

Oracle® Access Manager

Configuration Manager インストレーションおよび管理ガイド

10g (10.1.4.0.1)

部品番号 : E05057-01

2007 年 3 月

このマニュアルでは、Oracle Access Manager Configuration Manager のインストールと設定の詳細、および Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid 7.0.4 のデプロイ間での構成データの変更の送信について説明します。

Oracle Access Manager Configuration Manager インストールおよび管理ガイド, 10g (10.1.4.0.1)

部品番号 : E05057-01

原本名 : Oracle Access Manager Configuration Manager Installation and Administration Guide, 10g (10.1.4.0.1)

原本部品番号 : B32392-01

原著者 : Gail Tiberi

原協作者 : Harsha Chaitanya, Sharadchandra Chavali, Shivkumar Kore, Frank Villavicencio

Copyright © 2000, 2007 Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があり得ます。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	v
対象読者	vi
ドキュメントのアクセシビリティについて	vi
関連ドキュメント	vii
表記規則	ix
サポートおよびサービス	ix
1 構成管理の概要	
デプロイの例	1-2
Oracle Access Manager Configuration Manager の概要	1-2
Configuration Manager リポジトリ	1-4
環境	1-5
関連付け	1-5
移行用にサポートされるデータ・タイプ	1-6
物理エントリと論理オブジェクト	1-7
Configuration Manager での論理オブジェクトの比較およびカスタマイズの概要	1-9
移行トランザクション	1-9
オフラインのデータ・インポート用の LDIF ファイル	1-10
移行の計画、方法およびタスクの概要	1-11
データの移行の計画と成果物	1-13
バックアップとリカバリ計画	1-14
スナップショットの概要	1-14
トランザクションの概要	1-14
停止時間の評価および例	1-15
デプロイのサポートと相互運用性	1-16
2 Configuration Manager のデプロイおよび設定	
Configuration Manager デプロイの計画	2-2
Configuration Manager のデプロイの概要	2-2
必要な Configuration Manager インスタンス数の計画の概要	2-3
管理者権限の決定および確認	2-4
一覧表の作成と既存デプロイでの操作のテスト	2-4
リポジトリの設定と OC4J のインストール	2-6
Oracle Database リポジトリのインストールおよび設定	2-6
OC4J のインストールおよび構成	2-7
スタンドアロン構成での OC4J のインストールおよび構成	2-7

Oracle Application Server の管理コンポーネントとしての OC4J のインストール	2-9
Configuration Manager のデプロイ	2-12
Configuration Manager の管理者ロールおよびユーザー・ロールの割当て	2-16
Configuration Manager のツアー	2-23
「Logout」リンク	2-24
Configuration Manager の各ページの「Cancel」ボタンおよび「Back」ボタン	2-24
表のナビゲーション・エイド	2-24
「Snapshots」タブ	2-25
「Migration」タブ	2-26
「Transactions」タブ	2-27
「System Configuration」タブ	2-27
Configuration Manager のメッセージ	2-28
Configuration Manager でのリポジトリの詳細の追加	2-29
リポジトリが Configuration Manager で使用可能であることの確認	2-32

3 構成データの変更の移行

データの移行の概要	3-2
Configuration Manager へのアクセス	3-3
他の管理者への通知	3-4
Configuration Manager での環境の詳細の追加および管理	3-5
Configuration Manager での環境の詳細の表示	3-5
Configuration Manager への環境の詳細の追加	3-7
Configuration Manager での環境の詳細の変更	3-10
Configuration Manager での環境の詳細の削除	3-10
環境の接続のテスト	3-11
関連付けの作成および管理	3-12
ディレクトリ関連付けの設定の表示	3-12
ディレクトリ関連付けの作成	3-14
ディレクトリ関連付けの有効化 / 無効化	3-15
ディレクトリ関連付けの削除	3-16
オプションの変換ルールの追加および管理	3-17
変換ルールの表示	3-18
オプションの変換ルールの追加	3-20
変換ルールの変更	3-21
変換ルールの削除	3-23
スナップショットの作成および管理	3-24
スナップショット・リストの表示	3-24
スナップショットの作成	3-26
スナップショットの削除	3-28
スナップショットの内容のリストア	3-29
ソースからターゲットへのデータの移行	3-30
関連付けの選択の概要	3-32
移行する論理オブジェクトの選択の概要	3-32
移行前のデータの比較の概要	3-33
ターゲットのカスタマイズの概要	3-35
移行前のプレビューの概要	3-36
トランザクションおよびデータの移行の概要	3-37

LDIF ファイルへのデータのエクスポートの概要 (オプション)	3-37
データの移行	3-38
移行後のサーバーの再起動	3-42

4 成功した移行の検証

移行した変更の検証の概要	4-2
Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) の移行したデータの検証	4-3
10g (10.1.4.0.1) の ID システム・データの移行の検証	4-3
10g (10.1.4.0.1) のアクセス・システムのデータの移行の検証	4-4
Oracle COREid リリース 7.0.4 の移行したデータの検証	4-5
Oracle COREid リリース 7.0.4 の ID システム・データの移行の検証	4-5
Oracle COREid リリース 7.0.4 のアクセス・システムのデータの移行の検証	4-6

5 トランザクションの管理および変更のロールバック

関連付けられたディレクトリ・ペアのトランザクション詳細の表示	5-2
特定のトランザクション中に加えられた変更のロールバック	5-4
環境 (ディレクトリ) スナップショットの内容のリストア	5-9

A ワークシートの計画およびチェックリストの追跡

ワークシートおよびチェックリストの計画の再定義の概要	A-2
デプロイ全体のワークシート	A-3
ディレクトリ・インスタンスのワークシート	A-4
DIT およびオブジェクト定義詳細のワークシート	A-5
ディレクトリ・サーバー・プロファイルのワークシート	A-6
データベース・インスタンス・プロファイルのワークシート	A-7
Identity Server のワークシート	A-8
Policy Manager (リリース 7.0.4 Access Manager) インスタンスのワークシート	A-9
Access Server のワークシート	A-11
構成のワークシート	A-12
Configuration Manager のデプロイおよび設定のチェックリスト	A-14
構成データの移行のチェックリスト	A-14
別のツールを使用した他のデータの移行のチェックリスト	A-15

B Configuration Manager の問題のトラブルシューティング

ログ・ファイルへのアクセスおよびその使用	B-2
ログ・ファイルの内容およびロギング・レベル	B-3
ロギング・レベルおよびメッセージ・タイプ	B-7
監査ファイルへのアクセスおよびその使用	B-9
OC4J インストールおよび設定の問題のトラブルシューティング	B-11
OC4J 管理者のパスワードの変更	B-11
OC4J を構成して、Oracle Access Manager Configuration Manager を認識	B-11
OC4J ホストでの OC4J インストール準備の完了の確認	B-12
管理者権限を OC4J に定義	B-12
スタンドアロン構成への OC4J のインストール	B-12
OC4J の「ようこそ」ページが表示されない	B-13
OC4J の起動と停止	B-13
Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールの使用	B-13

Oracle Database のインストールおよび設定の問題のトラブルシューティング	B-14
特定のプラットフォームに Oracle Database をインストール	B-14
Oracle Database の管理および運用の問題	B-14
Oracle Database プロセスおよびファイルの管理の問題	B-14
Configuration Manager の問題のトラブルシューティング	B-15
スナップショットを作成できない	B-15
環境（ディレクトリ）スナップショットの内容が表示されない	B-15
Configuration Manager のインストール、設定およびリポジトリの問題	B-15
Configuration Manager 内の環境の問題	B-16
関連付けおよび変換ルールの問題	B-17

用語集

索引

はじめに

この『Oracle Access Manager Configuration Manager インストレーションおよび管理ガイド』では、Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 のデプロイ間での構成データの変更の送信について説明します。たとえば、開発環境デプロイから本番前環境デプロイに変更を送信する場合があります。正常に操作するための考慮事項、前提条件および手順についての説明も含まれます。

注意： Oracle COREid は Obliv NetPoint の、Oracle Access Manager は Oracle COREid のそれぞれ新しい名称です。Oracle COREid 7.0.4 は、Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) の一部として使用できました。このため、Oracle COREid 7.0.4 のマニュアルには、「10g リリース 2 (10.1.2)」が付けられていました。

内容は次のとおりです。

- [対象読者](#)
- [ドキュメントのアクセシビリティについて](#)
- [関連ドキュメント](#)
- [表記規則](#)
- [サポートおよびサービス](#)

対象読者

このマニュアルは、Oracle Access Manager Configuration Manager のインストールおよび管理を担当するユーザーを対象としています。また、Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 のデプロイ間での構成データの変更の送信を担当するユーザーにも役立ちます。このマニュアルでは、構成データとは、LDAP ディレクトリに格納される Oracle Access Manager または Oracle COREid の構成データおよびアクセス・ポリシー・データを指します。

このマニュアルでは、ネットワーク・アーキテクチャ、使用している LDAP ディレクトリの他、ファイアウォールおよびインターネット・セキュリティに精通していることを前提としています。また、Oracle Access Manager または Oracle COREid の既存デプロイにも精通している必要があります。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。

関連ドキュメント

Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) の詳細は、次のドキュメントを参照してください。

- 『Oracle Access Manager 概要』: Oracle Access Manager の概要、Oracle Access Manager のマニュアルへのロードマップ、および用語集を提供します。
- Oracle Application Server のリリース・ノート: 最新の Oracle Access Manager の詳細を説明します。リリース・ノートは、プラットフォーム固有のドキュメントに付属しています。リリース・ノートの最新バージョンは、Oracle Technology Network のサイト <http://www.oracle.com/technology/documentation> で入手できます。
- 『Oracle Access Manager インストール・ガイド』: コンポーネントをインストールおよび構成する方法について説明します。
- 『Oracle Access Manager アップグレード・ガイド』: 旧バージョンを最新バージョンにアップグレードする方法について説明します。
- 『Oracle Access Manager ID および共通管理ガイド』: ID システムのアプリケーションを構成してユーザー、グループおよび組織に関する情報を表示する方法、および ID システムのアプリケーションに表示されるデータを表示および変更する権限をユーザーに割り当てる方法について説明します。また、ユーザーに関する基本情報の追加、ユーザーに関する追加情報の指定、新規ユーザー・エントリの承認などの Identity アプリケーションの機能と結合するワークフローを、一連の自動実行の手順に構成する方法についても説明します。このマニュアルでは、ディレクトリ・プロファイル構成、パスワード・ポリシー構成、ロギングおよび監査などの、ID システムおよびアクセス・システムに共通の管理機能についても説明します。
- 『Oracle Access Manager アクセス管理ガイド』: ポリシー・ドメイン、認証スキームおよび認可スキームを定義してリソースを保護する方法、シングル・ドメインおよび複数ドメインでのシングル・サインオンを構成して 1 つのログインで複数のリソースにアクセスできるようにする方法、およびカスタム・ログイン・フォームを設計する方法について説明します。アクセス・システムを設定および管理する方法についても説明します。
- 『Oracle Access Manager デプロイメント・ガイド』: Oracle Access Manager の実行環境を計画および管理するユーザー向けの情報について説明します。容量計画、システム・チューニング、フェイルオーバー、ロード・バランシング、キャッシングおよび移行計画についても説明します。
- 『Oracle Access Manager カスタマイズ・ガイド』: Oracle Access Manager アプリケーションの表示形式を変更する方法や、オペレーティング・システム、Web サーバー、ディレクトリ・サーバー、ディレクトリの内容を変更したり、CGI ファイルまたは JavaScript を Oracle Access Manager 画面に接続することによって Oracle Access Manager を制御する方法について説明します。Access Manager API と、認可および認証プラグイン API についても説明します。
- 『Oracle Access Manager 開発者ガイド』: IdentityXML および WSDL を介してプログラムによって ID システムの機能にアクセスする方法、カスタム WebGate (AccessGate) を作成する方法、およびプラグインを開発する方法について説明します。Oracle Access Manager の CGI ファイルまたは JavaScript をいつ作成するかを認識するための情報についても説明します。
- 『Oracle Access Manager 統合ガイド』: Oracle Access Manager を設定して、BEA WebLogic、Plumtree Portal、IBM WebSphere などのサード・パーティの製品とともに実行する方法について説明します。
- 『Oracle Access Manager スキーマ詳細』: Oracle Access Manager スキーマの詳細を説明します。

Oracle COREid リリース 7.0.4 の詳細は、次のドキュメントを参照してください。

- 『Oracle COREid Access and Identity Introduction Guide』 : Oracle COREid の概要、Oracle COREid のマニュアルへのロードマップ、および用語集を提供します。
- 『Oracle COREid Access and Identity Release Notes』 : 最新の Oracle COREid の詳細を説明します。リリース・ノートは、プラットフォーム固有のドキュメントに付属しています。リリース・ノートの最新バージョンおよび Oracle COREid Access and Identity のドキュメントは、Oracle Technology Network のサイト <http://www.oracle.com/technology/documentation> で入手できます。
- 『Oracle COREid Access and Identity Installation Guide』 : コンポーネントをインストールおよび構成する方法について説明します。
- 『Oracle COREid Access and Identity Upgrade Guide』 : 旧バージョンを Oracle COREid リリース 7.0.4 にアップグレードする方法について説明します。
- 『Oracle COREid Access and Identity Administration Guide Volume 1』 : ID システムのアプリケーションを構成してユーザー、グループおよび組織に関する情報を表示する方法、および ID システムのアプリケーションに表示されるデータを表示および変更する権限をユーザーに割り当てる方法について説明します。また、ユーザーに関する基本情報の追加、ユーザーに関する追加情報の指定、新規ユーザー・エントリの承認などの Identity アプリケーションの機能と結合するワークフローを、一連の自動実行の手順に構成する方法についても説明します。このマニュアルでは、ディレクトリ・プロフィール構成、パスワード・ポリシー構成、ロギングおよび監査などの、ID システムおよびアクセス・システムに共通の管理機能についても説明します。
- 『Oracle COREid Access and Identity Administration Guide Volume 2』 : ポリシー・ドメイン、認証スキームおよび認可スキームを定義してリソースを保護する方法、シングル・ドメインおよび複数ドメインでのシングル・サインオンを構成して 1 つのログインで複数のリソースにアクセスできるようにする方法、およびカスタム・ログイン・フォームを設計する方法について説明します。アクセス・システムを設定および管理する方法についても説明します。
- 『Oracle COREid Access and Identity Deployment Guide』 : Oracle COREid の実行環境を計画および管理するユーザー向けの情報について説明します。容量計画、システム・チューニング、フェイルオーバー、ロード・バランシング、キャッシングおよび移行計画についても説明します。
- 『Oracle COREid Access and Identity Customization Guide』 : Oracle COREid アプリケーションの表示形式を変更する方法や、オペレーティング・システム、Web サーバー、ディレクトリ・サーバー、ディレクトリの内容を変更したり、CGI ファイルまたは JavaScript を Oracle COREid 画面に接続することによって Oracle COREid を制御する方法について説明します。Access Manager API と、認可および認証プラグイン API についても説明します。
- 『Oracle COREid Access and Identity Developer Guide』 : IdentityXML および WSDL を介してプログラムによって ID システムの機能にアクセスする方法、カスタム WebGate (AccessGate) を作成する方法、およびプラグインを開発する方法について説明します。Oracle COREid 用の CGI ファイルまたは JavaScript をいつ作成するかを認識するための情報についても説明します。
- 『Oracle COREid Access and Identity Integration Guide』 : Oracle COREid を設定して、BEA WebLogic、Plumtree Portal、IBM WebSphere などのサード・パーティの製品とともに実行する方法について説明します。
- 『Oracle COREid Access and Identity Schema Description』 : Oracle COREid スキーマの詳細を説明します。

表記規則

このマニュアルでは次の表記規則を使用します。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連する Graphical User Interface 要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
イタリック	イタリックは、ユーザーが特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、URL、サンプル内のコード、画面に表示されるテキスト、または入力するテキストを示します。

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

構成管理の概要

Oracle Access Manager Configuration Manager は、Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) の一部として使用できるスタンドアロン・アプリケーションです。このアプリケーションは、Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 の構成データを管理および移行するプロセスを自動化する Java アプリケーションです。この章では、この新しいアプリケーションの概要を説明します。内容は次のとおりです。

- デプロイの例
- Oracle Access Manager Configuration Manager の概要
- 移行の計画、方法およびタスクの概要
- データの移行の計画と成果物
- バックアップとリカバリ計画
- 停止時間の評価および例
- デプロイのサポートと相互運用性

デプロイの例

企業には、Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 のインストール (デプロイ) が複数存在することがあります。多くの顧客と同様に、複数のソフトウェアのデプロイが様々な設定で存在します。

- 開発環境デプロイ: デプロイ全体への依存が最小限の理想的なサンドボックスタイプの設定です。
- QA デプロイ: 通常、テストに使用されるより小規模な共有デプロイです。
- 本番前環境デプロイ: 通常、より多くのユーザーでのテストに使用される共有デプロイです。
- 本番環境デプロイ: 毎日企業内で完全に共有され、使用可能な状態にあります。

企業内のデプロイには、それぞれ異なる指定ができます。同じタイプのデプロイが複数存在してもかまいません。Oracle Access Manager Configuration Manager では、自動処理を使用して、データの移行タスクの合理化、エラーの排除、システム停止時間の最小化を行います。Configuration Manager を使用すると、Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 のデプロイ間で簡単に構成データを移行 (コピーを送信) できます。たとえば、新しいパスワード・ポリシーを QA デプロイに定義してテストした場合、その新しいポリシーを同じリリースの本番環境デプロイに伝播できます。

詳細は、「[Oracle Access Manager Configuration Manager の概要](#)」を参照してください。

Oracle Access Manager Configuration Manager の概要

構成管理とは、特定の Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 の構成データの**ライフサイクル管理**を指します。Oracle Access Manager Configuration Manager を使用すると、あるデプロイの指定したディレクトリ (ソース) から同じリリースの別のデプロイに関連付けられたディレクトリ (ターゲット) に、構成データの変更を送信するタスクを自動化できます。

構成データとは、製品固有の Oracle Access Manager または Oracle COREid の構成およびアクセス・ポリシー・データを指します。このデータは、各 Oracle Access Manager または Oracle COREid のデプロイ内の Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) **ディレクトリ**の oblix ツリーに格納されます。Oracle Access Manager では、各デプロイ内の LDAP ディレクトリに接続して、ファイルではなく LDAP データのみを移行します。Oracle Access Manager Configuration Manager では、**環境**という用語は LDAP ディレクトリを指します。

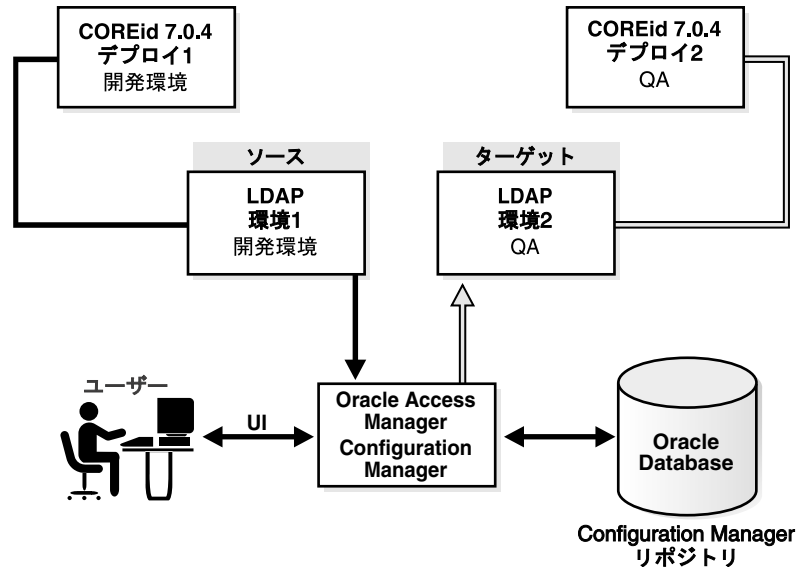
注意: 選択されたデータを別の環境に送信するプロセスは、特定のリリースのみの構成データの変更をコピーするため、水平なデータの移行と呼ばれることもあります。

Oracle Access Manager Configuration Manager (Configuration Manager) を使用してデータを移行する場合、関連付けられたターゲットにコピーするエントリをソースの構成ツリーで選択します。Configuration Manager では、次のソース環境とターゲット環境間でのみデータを移行できます。

- 指定された Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) ソースから関連付けられた Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) ターゲット
- 指定された Oracle COREid リリース 7.0.4 ソースから関連付けられた Oracle COREid リリース 7.0.4 ターゲット

たとえば、新しいパスワード・ポリシーを Oracle COREid リリース 7.0.4 の開発環境デプロイに定義してテストしたとします。Oracle Access Manager Configuration Manager を使用すると、[図 1-1](#) に示すように、新しいパスワード・ポリシーをこの Oracle COREid リリース 7.0.4 の開発環境デプロイから Oracle COREid リリース 7.0.4 の QA デプロイに伝播できます。

図 1-1 Oracle Access Manager Configuration Manager を使用したデータの移行



[図 1-1](#) に示したデプロイは例にすぎず、実際のデプロイは異なることもあります。たとえば、実際のデプロイは Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) でもかまいません。詳細は、1-16 ページの「[デプロイのサポートと相互運用性](#)」を参照してください。

プロセスの概要：データの準備および移行

- リポジトリ**：リポジトリの詳細を Oracle Access Manager Configuration Manager に追加すると、移行アクティビティに関する情報はリポジトリに格納されます。
 詳細は、1-4 ページの「[Configuration Manager リポジトリ](#)」を参照してください。
- 環境**：Oracle COREid リリース 7.0.4 の 2 つの異なる環境または Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) の 2 つの異なる環境の詳細を追加すると、環境の情報はリポジトリに格納され、移行アクティビティに使用する関連付けを形成できます。
 詳細は、1-5 ページの「[環境](#)」および 1-16 ページの「[デプロイのサポートと相互運用性](#)」を参照してください。
- 関連付け**：関連付けを定義すると、Configuration Manager は次の環境に接続します。
 - ソース（移行する構成データがある環境）
 - ターゲット（構成データの変更を受け取る環境）
 詳細は、1-5 ページの「[関連付け](#)」を参照してください。
- 移行**：Configuration Manager を使用して、次のような自動移行プロセスを実行します。
 - ターゲット環境のスナップショットを作成します。
 - ソース環境の構成ツリーでエントリを選択します。
 - ソースとターゲット間で選択したエントリの詳細を比較します。
 - 必要に応じて、ターゲットのエントリをカスタマイズします。
 - データをプレビューして移行内容を確認します。
 - 選択した構成データを移行します。

選択した構成データがソースからターゲットにコピーされます。移行されたデータの詳細を含むトランザクション・レコードがリポジトリに作成されます。

詳細は、1-6 ページの「移行用にサポートされるデータ・タイプ」、1-7 ページの「物理エンタリと論理オブジェクト」、1-9 ページの「移行トランザクション」および 1-14 ページの「スナップショットの概要」を参照してください。

注意： 選択した構成データは、Lightweight Directory Interchange Format (LDIF) ファイルにエクスポートできます。LDIF ファイルは ASCII 形式のファイルで、外部ツールを使用して Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) サーバー間でデータを交換および同期化するために使用できます。詳細は、1-10 ページの「オフラインのデータ・インポート用の LDIF ファイル」を参照してください。

- データの移行後に、動作しているターゲット・デプロイで変更をテストして、想定したとおりに機能していることを検証することをお勧めします。

移行の成功を検証する方法の詳細は、第 4 章を参照してください。

Configuration Manager リポジトリ

Oracle Access Manager Configuration Manager には、リポジトリと呼ばれる独自のデータ・ストアが必要です。Configuration Manager では、Oracle Database Server のみをリポジトリとしてサポートしています。リポジトリは、すべての Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 のデプロイと無関係である必要があります。

Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリとして使用するためにインストールした Oracle Database には、移行情報が格納されます。表 1-1 に、リポジトリに格納される情報を示します。

表 1-1 リポジトリに格納される Configuration Manager のデータ

リポジトリ内のデータ
環境 (ディレクトリ) の詳細
関連付けの詳細
変換ルール
スナップショット
トランザクション・データ (移行対象の論理オブジェクト)
監査の詳細
インポート対象の LDIF ファイル

詳細は、2-6 ページの「Oracle Database リポジトリのインストールおよび設定」を参照してください。

環境

環境という用語は、特定の Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 のデプロイ内で機能するようにインストールおよび構成される LDAP ディレクトリ・サーバーを指します。LDAP ディレクトリ (環境) には、oblix ツリーの、Oracle Access Manager または Oracle COREid の構成データが含まれます。

Oracle Access Manager Configuration Manager では、各環境の DIT (DN 接尾辞) 構造がまったく同じである必要がありません。たとえば、構成 DN が o=Oblix, ou=Config, ou=Dev, o=Root1 の環境と、構成 DN が o=Oblix, ou=Config, ou=QA, o=Root2 の環境が存在してもかまいません。

個々の環境の詳細は、Oracle Access Manager Configuration Manager に追加します。環境の詳細は、Configuration Manager リポジトリに格納され、Configuration Manager 内で使用できます。詳細は、3-5 ページの「[Configuration Manager での環境の詳細の追加および管理](#)」を参照してください。

2 つ以上の環境を Configuration Manager 内に定義すると、次の項の説明に従って関連付けを形成できます。

関連付け

関連付けは、Configuration Manager 内に定義された一対の環境から構成されます。各関連付けには、データ・オブジェクトの選択元として指定されるソース環境と、データのコピー先として指定されるターゲットが含まれます。たとえば、次のようにデータを送信するための関連付けを定義できます。

- 開発環境から QA へ
- QA から本番前環境へ
- 本番前環境から本番環境へ

関連付けは、Configuration Manager に定義された 2 つの環境の間に形成できます。関連付けの環境はどちらも同じリリース (リリース 10g (10.1.4.0.1) またはリリース 7.0.4 のいずれか) のデプロイに属するとみなされます。

どの環境も、ソースまたはターゲットのいずれかとして指定できます。1 つの環境は、ある関連付けのソースであると同時に、別の関連付けのターゲットであってもかまいません。

複数の関連付けを定義して使用することができます。しかし、各移行操作中に使用される関連付けは 1 つのみです。指定されたソースとターゲット間の特定の移行に関連する履歴はすべて、その関連付けに属します。

詳細は、3-12 ページの「[関連付けの作成および管理](#)」を参照してください。

注意： Oracle Access Manager Configuration Manager を使用してリリース 7.0.4 デプロイからリリース 10g (10.1.4.0.1) デプロイ、またはその逆にデータを移行することはできません。詳細は、1-16 ページの「[デプロイのサポートと相互運用性](#)」を参照してください。

移行用にサポートされるデータ・タイプ

この項では、Oracle Access Manager Configuration Manager を使用して移行できる構成データおよびランタイム・データのタイプについて説明します。

Oracle Access Manager では、ファイルではなく、移行用の LDAP データのみを移行します。このデータには、製品固有の Oracle Access Manager または Oracle COREid の構成およびアクセス・ポリシー・データ（アクセス制御ポリシーの res-ops など）、DB プロファイルおよびインスタンスなどのアイテムが含まれます。データは、Oracle Access Manager または Oracle COREid のデプロイ内の LDAP ディレクトリ（環境）の oblix ツリーに格納されます。

表 1-2 に、ID システムとアクセス・システムの両方の移行可能な構成データ・タイプを示します。

表 1-2 移行用にサポートされる構成データ・タイプ

ID システムの構成データ	アクセス・システムの構成データ
パスワード・ポリシー	マスター Web リソース管理者
ロスト・パスワード・ポリシー	ホスト識別子
オブジェクト・クラス定義	監査ポリシー
Identity Server 定義	リソース・タイプ定義
WebPass 定義	マスター監査ポリシー
ディレクトリ・オプション	Access Server の詳細
管理者情報	Access Server クラスタの詳細
サーバー設定	Access Client の詳細
マスター監査ポリシー	認証スキーム
グローバル監査ポリシー	認可スキーム
置換権限	管理レポート
包含ポリシー	
次の監査ポリシー：	
<ul style="list-style-type: none"> ■ User Manager ■ Group Manager ■ Organization Manager 	

表 1-3 に、Oracle Access Manager Configuration Manager を使用した移行用にサポートされるランタイム・データ・タイプを示します。

表 1-3 移行用にサポートされるランタイム・データ・タイプ

ID システムのランタイム・データ	アクセス・システムのランタイム・データ
次のパネル：	ポリシー・ドメイン
<ul style="list-style-type: none"> ■ User Manager ■ Group Manager ■ Organization Manager 	
ワークフロー構成：	
<ul style="list-style-type: none"> ■ User Manager のワークフロー定義 ■ Group Manager のワークフロー定義 ■ Organization Manager のワークフロー定義 	
属性アクセス制御ポリシー	
Group Manager オプション	
検索ベース	

すでに説明したように、Oracle Access Manager Configuration Manager は、デプロイの LDAP ディレクトリ内のデータのみを移行します。ファイルは移行されません。

表 1-4 に、Oracle Access Manager Configuration Manager を使用した移行用にサポートされないデータ・タイプを示します。表 1-4 に示すデータを移行するには、チェックイン、チェックアウトおよびデプロイに使用できる他のコード管理製品の利用が考えられます。表 1-4 に示すタイプのデータの移行は、このマニュアルの範囲外です。

表 1-4 Configuration Manager のアプリケーションを使用した移行のサポート対象外

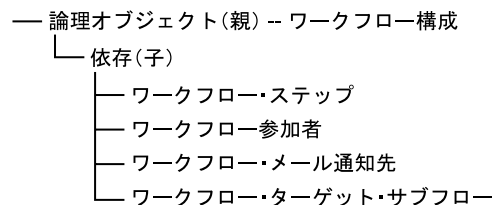
Configuration Manager を使用して移行できない ID システムのデータ	Configuration Manager を使用して移行できない アクセス・システムのデータ
PPP カタログ (および関連するコールされるスクリプト / コード)	認証プラグイン・コード (該当する場合)
JavaScript	認可プラグイン・コード (該当する場合)
イメージ	
スタイルシート	

物理エントリと論理オブジェクト

LDAP ディレクトリでは、情報は物理エンティティとして格納されます。多くの場合、物理エンティティのグループの論理的関連が非常に密接なため、個々の物理エンティティはアプリケーションに対してほとんど意味を持たないことがあります。たとえば、ワークフロー参加者は、単一のエンティティとしてあまり意味がありません。このような物理エンティティは、Oracle Access Manager Configuration Manager で**論理オブジェクト**と呼ばれる 1 つのオブジェクトの名前の下にグループ化することができます。論理オブジェクトは、物理エンティティと 1 対 1 マッピングすることもできます。

1 つの論理オブジェクトは、他の論理オブジェクトに依存する場合があります。たとえば、Oracle Access Manager および Oracle COREid では、ワークフロー定義は構成情報から構成されますが、この構成情報は、図 1-2 に示すように、ワークフロー・ステップ、その下にワークフロー参加者と順に依存している論理オブジェクトとみなすことができます。ワークフロー・ステップをターゲット・デプロイに移行する場合、Configuration Manager は参加者やメール通知先などの**依存**オブジェクトを特定します。依存論理オブジェクトは、単独で別個の論理オブジェクトとして存在しない**子**論理オブジェクトです。たとえば、ワークフロー・ターゲット・サブフローは、単独の論理オブジェクトではない依存論理オブジェクトです。

図 1-2 論理オブジェクトと依存

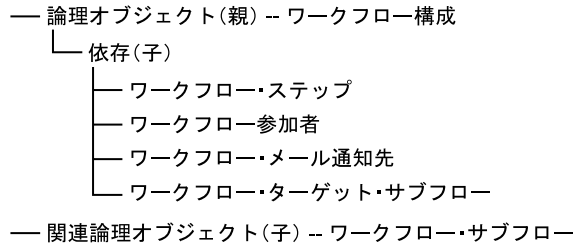


Oracle Access Manager Configuration Manager を使用してデータを移行する場合、すべての依存論理オブジェクトは、それぞれの親論理オブジェクトとともに移行されます。依存論理オブジェクトは消去できません。

関連論理オブジェクトは、単独で別個の論理オブジェクトとして存在する子です。たとえば、ロス・パスワード・ポリシーは、論理オブジェクトであり、パスワード・ポリシーの子 (関連) 論理オブジェクトでもあります。パスワード・ポリシーは、論理オブジェクトです。

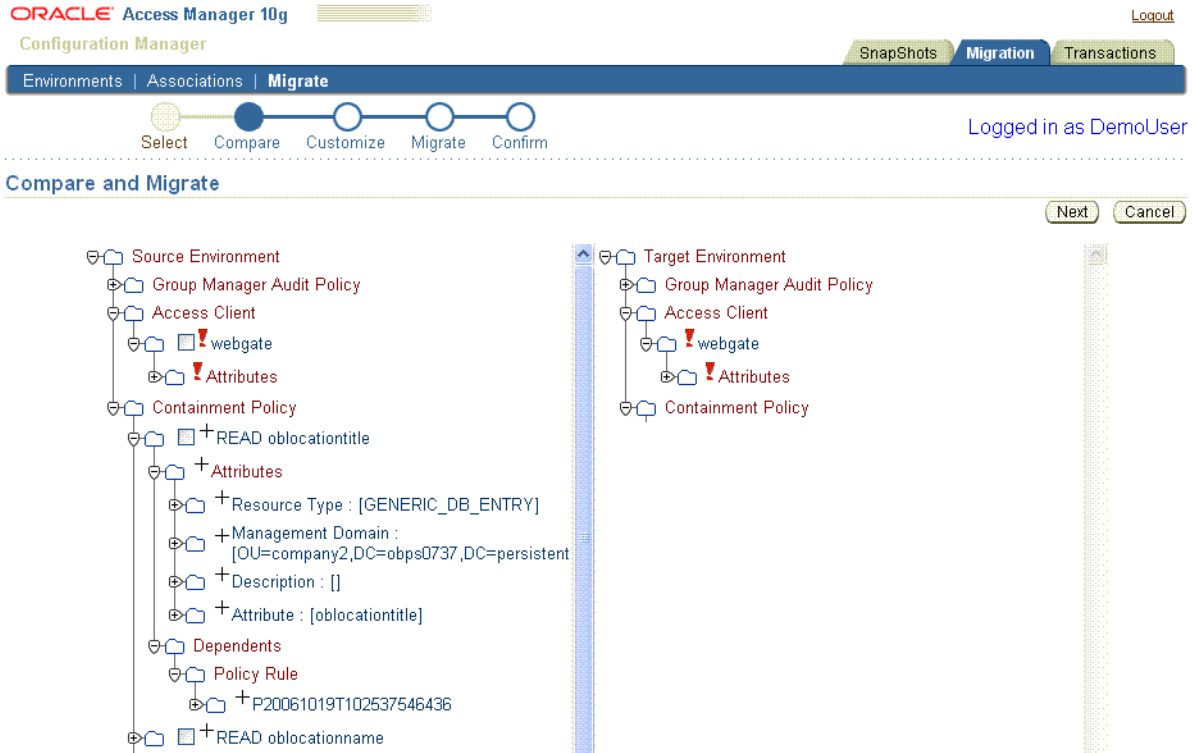
図 1-3 に、ワークフロー定義を示します。ここでは、サブフローは、論理オブジェクトであり、関連論理オブジェクトでもあります。Oracle Access Manager Configuration Manager を使用してデータを移行する場合、関連論理オブジェクトは移行するために選択することも消去することもできます。

図 1-3 論理オブジェクトと関連論理オブジェクト



Oracle Access Manager Configuration Manager を使用すると、3-32 ページの「移行する論理オブジェクトの選択の概要」で説明されているように、表示された論理オブジェクト・タイプまたは特定の論理オブジェクトをいくつでも選択して移行できます。論理オブジェクト・タイプまたは特定のオブジェクトを選択した後でデータを移行する前に、図 1-4 に示すように、Configuration Manager 内のナビゲーション・ツリーでソースとターゲット間の差異を比較することができます。

図 1-4 ナビゲーション・ツリー構造で示される論理オブジェクト



Configuration Manager での論理オブジェクトの比較およびカスタマイズの概要

「Compare and Migrate」ページでは、項目を開いて**属性**および**依存**に関する詳細を参照できます。論理オブジェクト名の横の記号は、移行前のソースとターゲット間の差異を示します。記号の詳細は、3-33 ページの「[移行前のデータの比較の概要](#)」を参照してください。

一部の属性には、ホスト名、IP アドレス、ドメイン名などのシステムまたは環境に固有の設定が含まれます。次のように、移行前、移行中または移行後に変更を適用して設定および属性をカスタマイズできます。

- 関連付けを作成した後でデータを移行する前に、移行中に自動的に適用されるオプションの変換ルールをディレクトリ関連付けに対して作成できます。「Customize」ページで、ルール適用前の状態（Before Migration）とルール適用後の状態（After Migration）の論理オブジェクトを確認できます。詳細は、3-17 ページの「[オプションの変換ルールの追加および管理](#)」を参照してください。
- 移行中、「Customize」ページで、属性を選択して手動でカスタマイズできます。手動で編集した後、変更適用前の状態（Before Migration）と変更適用後の状態（After Migration）の論理オブジェクトを確認できます。詳細は、3-35 ページの「[ターゲットのカスタマイズの概要](#)」を参照してください。
- 移行後、次のいずれかの方法で属性値を変更できます。
 - トランザクションのロールバックの「Customize」ページで、移行中に属性を手動で変更したときと同様に属性を手動で編集できます。詳細は、5-4 ページの「[特定のトランザクション中に加えられた変更のロールバック](#)」を参照してください。
 - vii ページの「[関連ドキュメント](#)」に示すドキュメントで説明されているように、Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 のターゲット・デプロイで直接変更できます。

詳細は、3-35 ページの「[ターゲットのカスタマイズの概要](#)」を参照してください。

移行トランザクション

トランザクション・レコードは、Oracle Access Manager Configuration Manager を使用してソースからターゲットに構成データを移行するたびに自動的に作成されます。各トランザクション・レコードには、関連付けのソースからターゲットに移行された論理オブジェクトのグループ全体、依存および選択された関連オブジェクトが含まれます。

すべてのトランザクションのリストは、Oracle Access Manager Configuration Manager 内で参照できます。特定のトランザクションを選択し、その移行中に行われた変更を確認できます。また、トランザクションを選択して変更をロールバックし、ターゲットの論理オブジェクトをその特定の移行が行われる前の状態に戻すこともできます。

トランザクションおよび変更のロールバックの詳細は、[第 5 章](#)を参照してください。

オフラインのデータ・インポート用の LDIF ファイル

Oracle Access Manager Configuration Manager の自動プロセスを使用して構成データを移行する他に、Configuration Manager を使用して移行するために選択した構成データを LDIF ファイルにエクスポートできます。トランザクション・データを **LDIF ファイル** にエクスポートしてもかまいません。

LDIF ファイルにエクスポートすると、本番環境デプロイなど、ターゲット・ディレクトリへの書き込み権限を与えないディレクトリ環境で Oracle Access Manager Configuration Manager を使用できます。次の場合に「Export to LDIF」オプションの使用を選択できます。

- LDIF ファイルを変更した後、外部ツールを使用してデータをインポートする場合。
- スケジュールされた時間（オフピーク時間など）に LDIF ファイルをアップロードする場合。
- ターゲット環境を変更する前に管理者から承認を取る場合。

この方法では、Oracle Access Manager Configuration Manager を使用して環境の追加、関連付けの形成および選択を行います。次に、ターゲットで論理オブジェクト・タイプを選択、比較およびカスタマイズをし、Configuration Manager を使用して選択内容を LDIF ファイルにエクスポートします。データをインポートする直前に Configuration Manager を使用してターゲット環境のスナップショットを取得することをお勧めします。データは外部ツールを使用してインポートしますが、その内容はこのマニュアルの範囲外です。

LDIF ファイルおよび外部ツールを使用してデータをインポートする場合、実際の移行はオフライン（Oracle Access Manager Configuration Manager の外）で発生するため、トランザクション・レコードは作成されません。

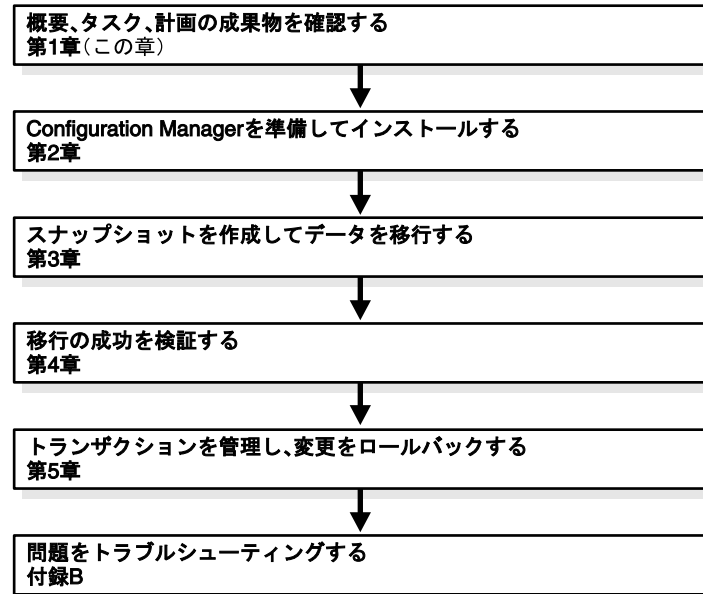
注意： Configuration Manager を使用して LDIF ファイルからデータをインポートすることはできません。外部ツールは、このマニュアルの範囲外です。

詳細は、3-37 ページの「[LDIF ファイルへのデータのエクスポートの概要（オプション）](#)」を参照してください。

移行の計画、方法およびタスクの概要

ここでは、データを移行する際に実行する必要がある一連のタスクについて概略を示します。これは、計画の起点にすぎません。図 1-5 に、Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 のデプロイ間で構成データの変更を送信する際に実行する移行タスクを示します。

図 1-5 移行タスク



タスクの概要 : Oracle Access Manager Configuration Manager によるデータの移行

1. Oracle Access Manager Configuration Manager を理解するためにこの章を確認します。
 - デプロイの例
 - Oracle Access Manager Configuration Manager の概要
 - 移行の計画、方法およびタスクの概要
 - データの移行の計画と成果物 (計画のワークシートは付録 A を参照)
 - バックアップとリカバリ計画
 - 停止時間の評価および例
 - デプロイのサポートと相互運用性
2. 第 2 章を参考にして、データの移行前に必要なコンポーネントをインストールおよび設定します。内容は次のとおりです。
 - Oracle Database リポジトリのインストールおよび設定 (Configuration Manager で使用するため)
 - OC4J のインストールおよび構成
 - Configuration Manager のデプロイ
 - Configuration Manager の管理者ロールおよびユーザー・ロールの割当て
 - Configuration Manager のツアー
 - Configuration Manager でのリポジトリの詳細の追加

3. **第3章**を参考にして、構成データを準備し、Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) デプロイまたは Oracle COREid リリース 7.0.4 デプロイのソース環境からターゲット環境に移行します。内容は次のとおりです。
 - **他の管理者への通知**: 移行の前後に行います。
 - **Configuration Manager** での環境の詳細の追加および管理: Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 の既存デプロイについて、ディレクトリの詳細を作成、表示、変更および削除します。
 - **関連付けの作成および管理**: 新しい関連付けの作成、設定の表示、関連付けの有効化 / 無効化および削除を行います。
 - **オプションの変換ルールの追加および管理**: 変換ルールは、移行中にディレクトリ関連付けのすべての論理属性に適用されます。
 - **スナップショットの作成および管理**: データの移行前にターゲットの oblix ツリーのバックアップ・コピーを作成するために行います。必要に応じて、スナップショットをリストアしてターゲットを移行前の状態に戻すことができます。
 - **ソースからターゲットへのデータの移行**: 関連付けの選択、論理オブジェクト・タイプの選択、選択したオブジェクトのソースとターゲットでの比較、選択したオブジェクトのカスタマイズ、変更のプレビュー、トランザクションの説明の追加およびデータの移行を行います。
 - 操作中に、LDIF ファイルにデータをエクスポートして、外部ツールを使用してデータをオフラインでインポートすることを選択できます。詳細は、「**LDIF ファイルへのデータのエクスポートの概要 (オプション)**」を参照してください。
 - **移行後のサーバーの再起動**: キャッシュをフラッシュしてターゲット環境からの最新の構成データでサーバーを更新するために必要です。
4. **第4章**に従って**成功した移行の検証**を行います。この章では、動作しているターゲット・デプロイで移行されたデータの検証に関する提案を示しています。独自のテストを作成し、データの移行前のソース・デプロイとデータの移行後のターゲット・デプロイの両方で、データの変更を検証することをお勧めします。
5. 必要に応じて、**付録 B**の「**Configuration Manager の問題のトラブルシューティング**」を確認します。

データの移行の計画と成果物

計画と準備は、データの移行の計画を成功させるための重要な要素です。この項では、計画の考慮事項および計画を成功させるために作成する必要がある項目一覧表について説明します。

計画と通知: Oracle Access Manager Configuration Manager を使用してデータの移行を開始する前に、1-11 ページの [図 1-5](#) に示されているすべての項目および図の後のタスクの概要について十分に理解しておくことを強くお勧めします。また、特定の移行期間をスケジュールし、他の管理者に、担当するデプロイでの予定アクティビティについて通知することをお勧めします。

デプロイ一覧表: 移行アクティビティを開始する前に、Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 の既存デプロイの一覧表を作成することをお勧めします。[表 1-5](#) に、移行の対象となるデプロイごとに収集する必要がある詳細情報を示します。詳細情報は、既存のインストール（またはアップグレード）のワークシートおよびレコードから収集できます。また、デプロイから最新情報を直接収集することもできます。

表 1-5 インストール済デプロイごとに必要な詳細情報

コンポーネント	必要な固有の詳細情報
ディレクトリ・サーバー・インスタンス	A-4 ページの「 ディレクトリ・インスタンスのワークシート 」
DIT 定義、オブジェクト定義、ワークフローおよびアクセス制御リスト	A-5 ページの「 DIT およびオブジェクト定義詳細のワークシート 」
ディレクトリ・サーバー・プロファイル	A-6 ページの「 ディレクトリ・サーバー・プロファイルのワークシート 」
データベース・インスタンス・プロファイル	A-7 ページの「 データベース・インスタンス・プロファイルのワークシート 」
Identity Server	A-8 ページの「 Identity Server のワークシート 」
Policy Manager (Oracle COREid リリース 7.0.4 では Access Manager) の詳細	A-9 ページの「 Policy Manager (リリース 7.0.4 Access Manager) インスタンスのワークシート 」
Identity Server	A-11 ページの「 Access Server のワークシート 」
ワークフローおよびアクセス制御リスト	A-12 ページの「 構成のワークシート 」

デプロイのテスト: 移行前にデータが正しいことを簡単に確認できるように、ソース・デプロイの構成データの変更を評価する独自のテストを開発することをお勧めします。移行後に、ターゲット・デプロイで同じテストを使用して、すべてが正しく動作していることを確認してください。

計画の詳細は、2-2 ページの「[Configuration Manager デプロイの計画](#)」を参照してください。

バックアップとリカバリ計画

Oracle Access Manager Configuration Manager には、移行前にデータをバックアップし、移行後に必要に応じてバックアップをリストアするための方法が用意されています。

- [スナップショットの概要](#)
- [トランザクションの概要](#)

スナップショットの概要

Oracle Access Manager Configuration Manager にはスナップショット機能があり、この機能を使用すると、選択した環境 (LDAP ディレクトリ) の oblix ツリー全体のバックアップ・コピーを作成できます。スナップショットには、構成ツリーの論理オブジェクトしか含まれません。たとえば、ワークフロー定義はスナップショットの一部ですが、ワークフロー・インスタンスはそうではありません。

Configuration Manager を使用してデータを移行する場合は、移行直前にターゲットのスナップショットを作成することをお勧めします。構成データを LDIF ファイルにエクスポートする場合は、LDIF ファイルをインポートする直前にターゲットのスナップショットを作成することをお勧めします。

Configuration Manager を使用すると、スナップショットをリストアしてスナップショットが取得されてから行われた変更をすべて元に戻すことができます。これにより、ディレクトリの論理オブジェクトはスナップショットが作成された時点の状態にリストアされます。

スナップショットをリストアすると、oblix ツリー全体がディレクトリにリストアされます。リストアの結果、oblix ツリー全体への変更はすべて取り消されます。取り消される変更には、Configuration Manager を使用して行われた移行の変更の他、Configuration Manager 以外で行われた変更も含まれます。

注意： スナップショットをリストアすると、スナップショットの取得後に行われた変更はすべて元に戻ります。また、ディレクトリは、スナップショットが作成された時点の状態に戻ります。

スナップショットの内容をリストアする際に、新しいスナップショットが自動的に作成され、環境の現在の状態が取得されます。新しいスナップショットを使用すると、リストアを元に戻すことができます。

詳細は、3-24 ページの「[スナップショットの作成および管理](#)」を参照してください。

トランザクションの概要

Oracle Access Manager Configuration Manager では、データを移行するたびにトランザクション・レコードが作成されます。各トランザクション・レコードには、移行された論理オブジェクトのグループ全体、関連オブジェクトおよび依存が含まれます。

注意： トランザクション・レコードは、外部ツールを使用したデータの移行時には作成されません。たとえば、Configuration Manager を使用して LDIF ファイルにデータをエクスポートし、外部ツールを使用してデータをインポートした場合、トランザクション・レコードは作成されません。

選択した関連付けについて、トランザクション・レコードの詳細を表示できます。また、特定のトランザクション・レコードを選択して、次の操作ができます。

- 特定の移行トランザクション中に行われた変更の表示
- 選択したトランザクション中に行われた変更のロールバック

トランザクションをロールバックすると、移行トランザクション中に論理オブジェクトに対して行われた変更のみが元に戻ります。ロールバック操作時には、新しいトランザクション・レコードが作成されます。

トランザクションおよび変更のロールバックの詳細は、[第5章](#)を参照してください。

停止時間の評価および例

Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 の構成データは、ID (COREid) システム・コンソールまたはアクセス・システム・コンソールを使用して直接変更します。変更は、デプロイから直接ディレクトリに自動的に書き込まれます。この場合、サーバー・キャッシュ内の該当エントリは即座にフラッシュされ、サーバーは最新の構成データで更新されます。Configuration Manager を使用せずに、これらの変更を別のデプロイに移行するには、手動プロセスを繰り返します。

注意： あるデプロイのデータを別のデプロイのデータと一致させるために手動で変更することは、時間がかかり、エラーが発生しやすい作業です。

Oracle Access Manager Configuration Manager を使用すると、サポート対象の論理オブジェクト・タイプの変更をソース環境から関連付けられたターゲットに送信できます。自動プロセスはきわめて迅速に実行され、意図していないエラーの発生を排除します。

Oracle Access Manager Configuration Manager では、1つの論理オブジェクトを約 100 ミリ秒で移行します。実際の移行時間の合計は、移行用に選択した論理オブジェクトの数の他、関連オブジェクトおよび依存の数によって決まります。たとえば、多数のホスト識別子および認証スキームを持つ1つのポリシー・ドメインを移行する方が、50以上のパスワード・ポリシーを移行するよりも時間がかかることがあります。

注意： 重要なコンポーネント（ソース環境、ターゲット環境、OC4J、Oracle Database リポジトリおよび Oracle Access Manager Configuration Manager）のホスト・コンピュータの処理速度および容量も移行操作の処理速度と時間に影響します。

Configuration Manager を使用してデータを移行した後に、ターゲット・デプロイで Identity Server および Access Server を手動で再起動し、サーバー・キャッシュをフラッシュしてターゲット・ディレクトリからの最新の構成データでサーバーを更新する必要があります。詳細は、3-42 ページの「[移行後のサーバーの再起動](#)」を参照してください。

Configuration Manager の機能を使用してトランザクションをロールバックできます。ロールバックの完了には、元の移行と同じだけの時間がかかります。必要に応じて、環境のスナップショットをリストアし、oblix ツリーに対して行われた変更をすべて元に戻すことができます。スナップショットのリストアにかかる時間は、バックアップされた構成データの量によって決まります。トランザクションの管理および変更のロールバックの詳細は、[第5章](#)を参照してください。

デプロイのサポートと相互運用性

データを移行すると、oblix 構成ツリーの選択したエントリはすべて、関連付けのソース環境からターゲットにコピーされます。Oracle Access Manager Configuration Manager を使用すると、次の環境の間でのみデータを移行できます。

- 指定された Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) のソース環境から Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) デプロイ内の関連付けられたターゲット
Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) の詳細は、vii ページの「[関連ドキュメント](#)」に示すこのリリースのマニュアルを参照してください。
- 指定された Oracle COREid リリース 7.0.4 のソース環境から Oracle COREid リリース 7.0.4 デプロイ内の関連付けられたターゲット
Oracle COREid リリース 7.0.4 の詳細は、vii ページの「[関連ドキュメント](#)」に示すこのリリースのマニュアルを参照してください。

注意： Oracle COREid リリース 7.0.4 を Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) にアップグレードする必要はありません。また、Oracle Access Manager Configuration Manager ではアップグレードを実行しません。

表 1-6 に示すように、関連付けで表されるデプロイはどちらも同じリリースであるとみなされます (いずれもリリース 10g (10.1.4.0.1) またはいずれもリリース 7.0.4)。Oracle Access Manager Configuration Manager は、どちらのリリースの同種デプロイでも等しく機能します。

表 1-6 Oracle Access Manager Configuration Manager の相互運用性マトリックス

指定されたソースのリリース	指定されたターゲットのリリース
Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1)	Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1)
Oracle COREid リリース 7.0.4	Oracle COREid リリース 7.0.4

注意： Oracle Access Manager Configuration Manager を使用してリリース 7.0.4 デプロイからリリース 10g (10.1.4.0.1) デプロイ、またはその逆にデータを移行することはできません。

Oracle Access Manager Configuration Manager は、OC4J でホストされる Java アプリケーションです。OC4J アプリケーションとしてデプロイされる Oracle Access Manager Configuration Manager の 1 つ以上のインスタンスは、次の追加コンポーネントと相互運用できます。

- Oracle Database リポジトリ。
- Oracle Containers for J2EE (OC4J) : スタンドアロン構成の OC4J または Oracle Application Server の管理コンポーネントとしてインストールされる OC4J の 1 つのインスタンス。
- ソースおよびターゲットとして使用される複数の環境 : Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) デプロイ用に別個にインストールする必要があります。
- ソースおよびターゲットとして使用される複数の環境 : Oracle COREid リリース 7.0.4 デプロイ用に別個にインストールする必要があります。

Configuration Manager のデプロイおよび設定の詳細は、[第 2 章](#)を参照してください。

Configuration Manager のデプロイおよび設定

この章では、Oracle Access Manager Configuration Manager の準備、デプロイおよび設定の方法について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- Configuration Manager デプロイの計画
- リポジトリの設定と OC4J のインストール
- Configuration Manager のデプロイ
- Configuration Manager の管理者ロールおよびユーザー・ロールの割当て
- Configuration Manager のツアー
- Configuration Manager でのリポジトリの詳細の追加
- リポジトリが Configuration Manager で使用可能であることの確認

Configuration Manager デプロイの計画

次の各項では、Oracle Access Manager Configuration Manager のデプロイおよび計画の考慮事項について説明します。

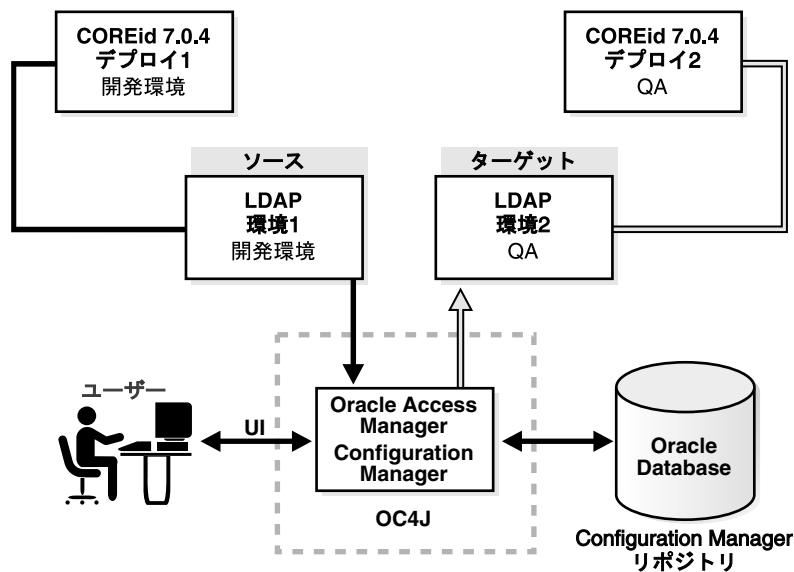
- Configuration Manager のデプロイの概要
- 必要な Configuration Manager インスタンス数の計画の概要
- 管理者権限の決定および確認
- 一覧表の作成と既存デプロイでの操作のテスト

Configuration Manager のデプロイの概要

Oracle Access Manager Configuration Manager は、OC4J でホストされる Java アプリケーションです。一般的な Oracle Access Manager Configuration Manager デプロイには、[図 2-1](#) に示すコンポーネントとアプリケーションが含まれます。図に続いて説明します。

注意： OC4J と Oracle Access Manager Configuration Manager は、一緒に 1 つのプラットフォームにインストールする必要があります。

図 2-1 一般的な Oracle Access Manager Configuration Manager インストール



[図 2-1](#) に示すサンプルの Oracle Access Manager Configuration Manager デプロイは、Oracle COREid リリース 7.0.4 環境を示しています。しかし、実際のデプロイには Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) を含めてもかまいません。

管理者およびユーザーは、Web ブラウザを介して Oracle Access Manager Configuration Manager にアクセスします。Configuration Manager デプロイには、次のものが含まれます。

- **リポジトリ：** Configuration Manager リポジトリとして使用する 1 つの Oracle Database
詳細は、2-6 ページの「[Oracle Database リポジトリのインストールおよび設定](#)」を参照してください。
- **OC4J：** [図 2-1](#) に示すようなスタンドアロン構成の OC4J または Oracle Application Server の管理コンポーネントとしてインストールされる OC4J の 1 つのインスタンス
詳細は、2-7 ページの「[OC4J のインストールおよび構成](#)」を参照してください。

- **Configuration Manager:** OC4J アプリケーションとしてデプロイされる Oracle Access Manager Configuration Manager の 1 つ以上のインスタンス

OC4J と Configuration Manager は、一緒に 1 つのプラットフォームにインストールされます。詳細は、2-3 ページの「[必要な Configuration Manager インスタンス数の計画の概要](#)」を参照してください。

- **環境:** 2 つ以上の Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 のデプロイおよび環境 (ソースおよびターゲットの LDAP ディレクトリ) は、別個にインストールする必要があります。

Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) デプロイまたは Oracle COREid リリース 7.0.4 デプロイのインストールおよび構成は、このマニュアルの範囲外です。これらのアクティビティの詳細は、vii ページの「[関連ドキュメント](#)」を参照してください。

Oracle Access Manager Configuration Manager は、1 つのマスター・サーバーまたはレプリカ・サーバーからのみ読み取り、1 つのマスター LDAP ディレクトリにのみ書き込みます。ディレクトリ環境のインストールは、このマニュアルの範囲外です。詳細は、ベンダーのドキュメントを参照してください。

必要な Configuration Manager インスタンス数の計画の概要

ほとんどの企業では、2-2 ページの [図 2-1](#) に示すように、Oracle Access Manager Configuration Manager インスタンスは 1 つしか必要ありません。複数のユーザーでパフォーマンスの問題が発生した場合は、追加の Oracle Access Manager Configuration Manager インスタンスをインストールできます。

注意: 同じターゲット内の同じ論理オブジェクトに対する変更を複数のユーザーが移行すると、ターゲットは一貫性のない状態になります。データを移行する前にユーザーを調整することをお勧めします。

1 つの Oracle Database リポジトリは、複数の Configuration Manager インスタンスに対応できます。複数の Configuration Manager インスタンスは、1 つのリポジトリに接続できます。複数の Configuration Manager インスタンスが存在する場合に、リポジトリのリスニング・ポートに関する制限はありません。リポジトリ内の詳細は、そのリポジトリに接続している Configuration Manager インスタンスから表示および管理できます。詳細は、2-6 ページの「[Oracle Database リポジトリのインストールおよび設定](#)」を参照してください。

Configuration Manager インスタンスが 1 つでも複数でも、必要な OC4J インスタンスは 1 つです。詳細は、2-7 ページの「[OC4J のインストールおよび構成](#)」を参照してください。

管理者権限の決定および確認

次のガイドラインは、Oracle Access Manager Configuration Manager の管理者に適用されません。

- Configuration Manager のデプロイには、OC4J の管理者権限が必要です。このロールは、OC4J のインストールおよび設定時に自動的に作成されます。
- Configuration Manager 内でリポジトリの詳細を管理するには、HMAdmin 権限が必要です。このロールは、OC4J に定義し、Configuration Manager 内で詳細を管理してリポジトリ接続をテストするユーザーに割り当てる必要があります。
- Configuration Manager の機能には、リポジトリの管理を除いて、HMUser ロールが必要です。HMUser ロールは、OC4J に定義し、Configuration Manager 内で環境の詳細の追加、関連付けの作成、スナップショットの作成、データの移行およびトランザクションの管理を実行するユーザーに割り当てる必要があります。

注意：環境（ディレクトリ）への書込み権限を持つユーザーは、HMUser 権限があれば、すべての移行機能を実行できます。HMAdmin 権限を持つユーザーは、Configuration Manager ではシステム構成の機能しか実行できません。

OC4J で管理者権限を定義する方法の詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』および 2-7 ページの「OC4J のインストールおよび構成」を参照してください。

管理権限を決定または確認する手順

1. 管理者の指定、管理者ログイン ID の選択、一時または永久パスワードの選択、情報の収集および伝播など行う際は、自分の会社のポリシーに準拠します。
2. 管理者権限の他、OC4J、Oracle Database および Oracle Access Manager Configuration Manager にログインするためのユーザー ID とパスワードを決定および割り当てる際は、自分のチームと意見を交換します。

一覧表の作成と既存デプロイでの操作のテスト

ここでは、動作しているデプロイでデータの移行アクティビティを開始する前に、収集する必要がある詳細情報および作成する必要があるテストについて説明します。移行アクティビティを開始する前に、次のアクティビティを実行することをお勧めします。

- 移行の対象となる Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) デプロイまたは Oracle COREid リリース 7.0.4 デプロイ内で一覧表を作成します。
- ソース・デプロイでテストを作成および実行して、データの変更が想定どおりの結果になることを確認します。

一覧表の作成:表 2-1 に、インストールされた Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) デプロイまたは Oracle COREid リリース 7.0.4 デプロイごとに収集する必要がある詳細情報と、情報を記録できるワークシートがある場所を示します。一覧表の詳細情報は、各デプロイのインストールまたはアップグレードのワークシートで見つかります。また、デプロイ自体から最新の詳細情報を収集することもできます。

表 2-1 10g (10.1.4.0.1) またはリリース 7.0.4 の既存デプロイごとに必要な詳細情報

コンポーネント	必要な固有の詳細情報の参照先
ディレクトリ・サーバー・インスタンス	A-4 ページの「 ディレクトリ・インスタンスのワークシート 」
DIT 定義、オブジェクト定義、ワークフローおよびアクセス制御リスト	A-5 ページの「 DIT およびオブジェクト定義詳細のワークシート 」
ディレクトリ・サーバー・プロファイル	A-6 ページの「 ディレクトリ・サーバー・プロファイルのワークシート 」
データベース・インスタンス・プロファイル	A-7 ページの「 データベース・インスタンス・プロファイルのワークシート 」
Identity Server	A-8 ページの「 Identity Server のワークシート 」
Policy Manager (Oracle COREid リリース 7.0.4 では Access Manager) の詳細	A-9 ページの「 Policy Manager (リリース 7.0.4 Access Manager) インスタンスのワークシート 」
Identity Server	A-11 ページの「 Access Server のワークシート 」

テストの作成:データを別のデプロイに移行する前に、必ずテストを作成して実行し、ソースの変更が想定どおりの結果になることを確認します。また、移行された変更が想定どおりに機能するように、ターゲットを正しく調整することが必要な場合があります。たとえば、ワークフロー・データを移行する場合、ソース環境で記述されたすべての参加者がターゲットに存在するようにします。そうでない場合、ターゲット・デプロイのワークフローは正しく機能しないことがあります。Oracle Access Manager Configuration Manager は、ターゲット環境に参加者が存在しないかどうかを通知しません。

一覧表を作成し、ソース・デプロイで変更をテストしてターゲットを正しく調整する手順

1. 移行前に、既存デプロイとそのディレクトリに関する情報を収集および記録したとおりに、[付録 A](#) のワークシートのコピーに記入します。
2. ソース・デプロイで構成データの変更によって影響を受ける機能を検証する適切なテストを開発し、変更が想定どおりの結果になることを確認します。

注意:データの移行後に、同じテストを使用してターゲット・デプロイで移行された変更を検証できます。

リポジトリの設定と OC4J のインストール

ホストを設定し、Oracle Access Manager Configuration Manager のインストールを準備するには、次のタスクの概要で説明されているアクティビティをすべて実行する必要があります。

タスクの概要：ホストの設定と Configuration Manager のインストールの準備

1. [Oracle Database リポジトリのインストールおよび設定](#)
2. [OC4J のインストールおよび構成](#)

Oracle Database リポジトリのインストールおよび設定

ここでは、Configuration Manager で使用する Oracle Database リポジトリのインストールおよび設定の概要を説明します。

Oracle Database Server 10g リリース 2 (10.2) を Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリとしてインストールする必要があります。次のエディションがサポートされています。

- Enterprise Edition
- Standard Edition
- Express Edition (XE)

Configuration Manager は標準の方法で Oracle Database と通信し、Oracle Call Interface (OCI) は使用しません。また、リポジトリを使用して環境の詳細、関連付け、変換ルール、スナップショット、トランザクション・レコード、監査情報および LDIF ファイルを格納します。

Oracle Access Manager Configuration Manager の複数のインスタンスをインストールする予定であっても、必要なリポジトリは 1 つのみです。詳細は、2-3 ページの「[必要な Configuration Manager インスタンス数の計画の概要](#)」を参照してください。

Oracle Database Server 10g リリース 2 (10.2) をインストールする手順

1. 通常どおり、MetaLink でサポート保証を確認します。次に例を示します。
 - a. <http://metalink.oracle.com> にアクセスします。
 - b. 指示に従って MetaLink にログインします。
 - c. 「Certify」タブをクリックします。
 - d. 「View Certifications by Product」をクリックします。
 - e. 「Database/Server」オプションを選択し、「Submit」をクリックします。
 - f. 「Oracle Database - YourEdition」を選択し、「Submit」をクリックします。
2. インストールおよび設定の詳細は、使用しているプラットフォームに適した Oracle Database のインストレーション・ガイドを参照してください。
3. Oracle Database の管理および運用の詳細は、『Oracle Database 概要』を参照してください。
4. Oracle Database のプロセス、表領域、データファイル、一時ファイル、スキーマ・ファイル、Oracle 管理のファイルなどの管理方法の詳細は、『Oracle Database 管理者ガイド』を参照してください。

リポジトリをインストールしたら、「[OC4J のインストールおよび構成](#)」のアクティビティを完了する準備ができました。OC4J をインストールすると、Configuration Manager をデプロイした後、インストールしたリポジトリの詳細を Configuration Manager に追加できます。

OC4J のインストールおよび構成

ここでは、Oracle Container for J2EE (OC4J) のインストールおよび設定について説明します。

OC4J と Oracle Access Manager Configuration Manager は両方一緒に 1 つのプラットフォームにインストールします。Oracle Access Manager Configuration Manager をデプロイするには、OC4J 10g リリース 3 (10.1.3) をインストールする必要があります。

OC4J は、Java 2 Enterprise Edition (J2EE) 1.4 に完全準拠した環境を提供します。OC4J には、J2EE 仕様で規定されているコンテナ、API およびサービスがすべて用意されています。

OC4J は 2 つの構成で配布されますが、いずれの構成も Oracle Access Manager Configuration Manager でサポートされています。

- **スタンドアロン構成:** この構成では、OC4J は自己完結型コンポーネントとして直接管理、起動および停止される単一のスタンドアロン・インスタンスとしてインストールされます。この OC4J 構成は、非管理構成とも呼ばれ、管理しやすい J2EE 準拠の堅牢なコンテナを提供します。この構成では、単一の OC4J インスタンスが単一の ORACLE_HOME (Oracle ソフトウェアがインストールされるルート・ディレクトリ) にインストールされます。

OC4J スタンドアロン構成での Web 通信は、組み込み OC4J Web サーバーを介して提供されます。このサーバーは Oracle HTTP Server (OHS) を使用せずに HTTP および HTTPS 通信をネイティブにサポートします。デフォルトの Web サイトは default-web-site.xml ファイルに定義され、デフォルトの HTTP リスナーはポート 8888 に指定されます。追加の Web サイトは、このファイルのバリエーションを使用して、別のポートに定義されます。OC4J での追加の Web サイトの作成および管理の手順は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』を参照してください。

インストールの詳細は、2-7 ページの「[スタンドアロン構成での OC4J のインストールおよび構成](#)」を参照してください。

- **管理構成:** この構成では、OC4J は Oracle Application Server クラスタ内の 1 つ以上の OC4J インスタンスのグループに、Oracle Application Server のコンポーネントとしてインストールされます。Oracle Application Server では、HTTP セッションおよびステートフル・セッション Enterprise JavaBean のレプリケーションおよびクラスタ・トポロジ内の OC4J インスタンスのグループ全体にわたるロード・バランシングをサポートします。

詳細は、2-9 ページの「[Oracle Application Server の管理コンポーネントとしての OC4J のインストール](#)」を参照してください。

スタンドアロン構成での OC4J のインストールおよび構成

スタンドアロン OC4J 構成は次のコンポーネントで構成されており、80MB の空き領域が必要です。

- Oracle Containers for J2EE 10g リリース 3 (10.1.3)
- Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソール

この Web ベースの管理アプリケーションは、デフォルトで OC4J とともにインストールされ、インストール後すぐに使用可能になります。この管理インタフェースの使用の詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』の Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールに関する項を参照してください。

スタンドアロン OC4J ディストリビューションには Application Server Control コンソールが含まれますが、ZIP アーカイブとして提供されます。インストール時に、OC4J が通信するポート番号を指定するよう求められます。任意のポート番号を割り当ててもかまいませんが、デフォルト・ポートは 8888 です。

管理者のアカウントおよびロール: インストール時に、oc4jadmin アカウントのパスワードを指定するよう求められます。このアカウントには、ユーザーおよびロールの管理と JMX MBean サーバーへの接続に使用される oc4j-administrators ロールが割り当てられます。OC4J のインストール時にこのアカウントのパスワードを割り当てない場合は、OC4J の初回起動時に設定するよう求められます。パスワードは、後で Application Server Control コンソールの「設定」ページから変更できます。次の手順には、oc4jadmin アカウントのパスワードの設定に関する詳細が含まれます。詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』のスタンドアロン OC4J のインストールに関する項を参照してください。

OC4J の起動および停止 : スタンドアロン環境の OC4J サーバー・インスタンスは、OC4J コマンド・スクリプトまたは実行可能ファイル `oc4j.jar` アーカイブのいずれかを使用してデフォルトの構成で起動できます。スタンドアロン OC4J サーバーは、`admin_client.jar` または `admin.jar` コマンドライン・ユーティリティの `-shutdown` コマンドか、`oc4j.cmd` または `oc4j` 実行可能スクリプトを起動して停止できます。詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』を参照してください。

デフォルトの Web サイト : インストールされた OC4J スタンドアロン・ディストリビューションには、アプリケーションにアクセスできるデフォルトの Web サイトや、Application Server Control 管理インターフェースを使用できる Web サイトが含まれています。スタンドアロン OC4J 構成では、デフォルトの Web サイトは、HTTP リクエストを特定のポートで直接受信できるように構成されています。デフォルト・ポートは 8888 です。あるいは、セキュア HTTPS リクエストを受信するようにサイトを構成できます。デフォルトの Web サイトは、OC4J の使用をすぐに開始できるように提供されています。詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』を参照してください。

次の手順では、Oracle Access Manager Configuration Manager で使用するために OC4J スタンドアロン構成をインストールするのに必要な情報を示します。この手順は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』から入手できる OC4J インストールに関する記述に置き換わるものではありません。

OC4J スタンドアロン・サーバーをインストールする手順

1. MetaLink に移動して、ホスト・コンピュータがこのリリースの Oracle Access Manager Configuration Manager と互換性があることを確認します。
 - a. <http://metalink.oracle.com> にアクセスします。
 - b. 指示に従って MetaLink にログインします。
 - c. 「Certify」タブをクリックします。
 - d. 「View Certifications by Product」をクリックします。
 - e. 「Application Server」オプションを選択し、「Submit」をクリックします。
 - f. 「Oracle Identity Manager」を選択し、「Submit」をクリックします。
 - g. 「Oracle Identity Management Certification Information 10g (10.1.4.0.1) (html)」をクリックして、「Oracle Identity Management」ページを表示します。
 - h. 「Section 6, "Oracle Access Manager Certification"」のリンクをクリックして、動作保証マトリックスを表示します。
2. スタンドアロン OC4J サーバーのインストール前に、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』で説明されている前提条件が満たされていることを確認します。次に例を示します。
 - a. OC4J ホスト・コンピュータで、Java 2 Platform, Standard Edition (J2SE) Development Kit (JDK) リリース 5.0 以上をダウンロードしてインストールします。
 - b. J2SE のインストール後に、適切な環境変数が設定されていることを確認します。たとえば、`JAVA_HOME`、`ORACLE_HOME` および `J2EE_HOME` です。
3. 次の場所で、OC4J ディストリビューションの ZIP アーカイブを探してダウンロードします。

<http://www.oracle.com/technology/software/products/ias/index.html>

For Development :

Oracle Containers for J2EE (OC4J) 10g Release 3 (10.1.3.1.0)

4. 『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』の手順に従って、スタンドアロン OC4J ディストリビューションをインストールします。

選択したアーカイブ・ユーティリティを使用して、OC4J がインストールされるディレクトリとして機能するディレクトリ (ORACLE_HOME) に oc4j_extended.zip ファイルを解凍する手順を参照してください。

インストーラによって、必要なディレクトリ構造は自動的に作成されます。スタンドアロン環境の OC4J サーバー・インスタンスは、OC4J コマンド・スクリプトまたは実行可能ファイル oc4j.jar アーカイブのいずれかを使用してデフォルトの構成で起動できます。OC4J を起動および停止する方法の詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』の該当する章を参照してください。

5. OC4J の初回起動時に、OC4J 管理者アカウントのパスワードを設定します (このアカウントのユーザー名はデフォルトで oc4jadmin に設定されます)。

注意: このアカウントのパスワードは変更できます。詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』の OC4J を管理するためのツールに関する項を参照してください。

6. OC4J のホームページへの URL を入力してインストールが正常に終了したことを確認した後、oc4jadmin としてログインします。次に例を示します。

`http://hostname:port/em/console`

hostname は OC4J スタンドアロン構成のホスト・コンピュータ、*port* は OC4J ホストがリスニングする HTTP ポート番号です。em/console により OC4J コンソールに接続します。

7. 次のように続行します。

- **インストールが成功した場合** (次に説明されているアクティビティを実行) :
 - **Configuration Manager の管理者ロールおよびユーザー・ロールの割当て** : デプロイ後にユーザーが Oracle Access Manager Configuration Manager にログインできるようにします。
 - **Configuration Manager のデプロイ** : Enterprise Manager のブラウザ・コンソールを使用して実行します。
- **インストールが失敗した場合** : 『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』のトラブルシューティングのヒントを参照してください。

Oracle Application Server の管理コンポーネントとしての OC4J のインストール

OC4J を Oracle Application Server の管理コンポーネントとしてインストールする場合は、J2EE Server 構成の拡張インストール手順に従います。この構成には、570MB の空き領域が必要です。

J2EE Server 構成では、次のコンポーネントがインストールされます。

- 1 つ以上のグループの 1 つ以上のインスタンスの Oracle Containers for J2EE (OC4J) 10g (10.1.3.1.0)
このコンポーネントは、Java アプリケーションを開発するための完全な Java 2 Enterprise Edition (J2EE) 環境を提供します。
- Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソール (Oracle Application Server の Web ベース管理に使用)
- Oracle HTTP Server 1.3: フロントエンド Web 通信を提供し、ロードバランシング機能が含まれます。

- Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN) : Oracle Notification Server (ONS) が含まれます。

OPMN は、Oracle Application Server インスタンスとそのコンポーネントのプロセス制御および監視を行います。ONS は、デフォルトですべての Oracle Application Server ホストにインストールされます。管理環境では、OPMN を使用してすべてのコンポーネント (OC4J やコンポーネント間の Oracle HTTP Server 通信など) を起動および停止する必要があります。『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』の Oracle Application Server 環境での OC4J の起動に関する項を参照してください。

OC4J ランタイム・オプションおよびシステム・プロパティは、OPMN 構成ファイル `opmn.xml` に手動で設定できます。詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』の OC4J ランタイム構成に関する項を参照してください。

Oracle Application Server では、HTTP セッションおよびステートフル・セッション Enterprise JavaBean のレプリケーションおよびクラスタ・トポロジ内の OC4J インスタンスのグループ全体にわたるロード・バランシングをサポートします。OC4J でのクラスタ・トポロジおよびアプリケーション・クラスタリングの詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』を参照してください。

Oracle Application Server のクラスタ環境では、単一の Application Server Control コンソールを使用してクラスタ内のすべての OC4J インスタンスを管理できます。詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』の Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールおよび OC4J を管理するためのツールに関する項を参照してください。

様々な管理コンポーネントのインストールは、Oracle Universal Installer を使用して行われます。OPMN は、すべての `ORACLE_HOME` ディレクトリにインストールして、インストールされた各コンポーネントを監視できるようにする必要があります。Oracle Universal Installer には、様々なインストール・オプションが用意されています。

- 統合された Web サーバー、J2EE Server およびプロセス管理

この構成では、OC4J、Oracle HTTP Server および OPMN を含め、すべてのコンポーネントが 1 つの `ORACLE_HOME` ディレクトリにインストールされます。複数の OC4J インスタンスをこの `ORACLE_HOME` ディレクトリ内に作成できます。複数のホスト・コンピュータは、それぞれ 1 つ以上の OC4J インスタンスをホストしますが、Oracle Application Server クラスタに含めることができます。

- J2EE Server およびプロセス管理

このインストールには、OC4J と OPMN が含まれます。開発またはテストのためにスタンドアロン OPMN 管理 OC4J インスタンスとして利用できます。あるいは、Oracle Application Server クラスタ内に含めることもできます。

- Web サーバーおよびプロセス管理

このインストールには、Oracle HTTP Server と OPMN しか含まれません。通常、Oracle Application Server クラスタのフロントエンド Web リスナーとして機能する、スタンドアロン Oracle HTTP Server インスタンスとして使用できます。

次の手順では、Oracle Access Manager Configuration Manager で使用するために管理コンポーネントとして OC4J をインストールするのに必要な情報を示します。この手順は、Oracle Application Server のインストール・ガイドから入手できる OC4J インストールに関する記述に置き換わるものではありません。

Oracle Application Server J2EE Server 構成をインストールする手順

1. MetaLink に移動して、ホスト・コンピュータがこのリリースの Oracle Access Manager Configuration Manager と互換性があることを確認します。
 - a. <http://metalink.oracle.com> にアクセスします。
 - b. 指示に従って MetaLink にログインします。
 - c. 「Certify」 タブをクリックします。
 - d. 「View Certifications by Product」 をクリックします。
 - e. 「Application Server」 オプションを選択し、「Submit」 をクリックします。
 - f. 「Oracle Identity Manager」 を選択し、「Submit」 をクリックします。
 - g. 「Oracle Identity Management Certification Information 10g (10.1.4.0.1) (html)」 をクリックして、「Oracle Identity Management」 ページを表示します。
 - h. 「Section 6, "Oracle Access Manager Certification"」 のリンクをクリックして、動作保証マトリックスを表示します。
2. Oracle Application Server のインストレーション・ガイドの J2EE Server インストールに関する説明に従って、次のようにアクティビティを実行します。
 - a. 要件を確認します。
 - b. インストールを開始する前に把握しておく必要がある記述を確認します。
 - c. J2EE Server の拡張インストールに関する項目を確認します。
3. 次の URL から Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールにアクセスします。


```
http://hostname:port/em/console
```

hostname は Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールのホスト・コンピュータ、*port* はホストがリスニングする HTTP ポート番号です。em/console によりコンソールに接続します。
4. 次のように続行します。
 - **インストールが成功した場合** (次のアクティビティを指定された順に実行) :
 - **Configuration Manager のデプロイ** : Enterprise Manager のブラウザ・コンソールを使用して実行します。
 - **Configuration Manager の管理者ロールおよびユーザー・ロールの割当て** : デプロイ後にユーザーが Oracle Access Manager Configuration Manager にログインできるようにします。
 - **インストールが失敗した場合** : Oracle Application Server のインストレーション・ガイドのトラブルシューティングのヒントを参照してください。

Configuration Manager のデプロイ

ここでは、Oracle Access Manager Configuration Manager を OC4J アプリケーションとしてデプロイする方法について説明します。OC4J でサポートされる Web サーバーであれば、Configuration Manager に対してサポートされます。Microsoft の動作保証は該当しませんし、想定されてもいません。

Oracle Access Manager Configuration Manager アプリケーションは、OC4J を使用してデプロイできる .war ファイルとして配布されます。.war ファイルには、7.77MB の空きディスク領域が必要です。

次の手順では、Configuration Manager をデプロイおよびテストする方法について説明します。OC4J を起動および停止する方法の詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』を参照してください。

次の手順を開始する前に表 2-2 をチェックして、前提条件が満たされていることを確認します。

表 2-2 デプロイの前提条件

確認	前提条件のタスク	参照先
	Oracle Database リポジトリをインストールする。	2-6 ページの「 Oracle Database リポジトリのインストールおよび設定 」
	OC4J をインストールする。	2-7 ページの「 OC4J のインストールおよび構成 」

OC4J を使用して Configuration Manager をデプロイする手順

1. OC4J のホームページに移動し、まだログインしていない場合は、oc4jadmin としてログインします。次に例を示します。

```
http://hostname:port/em/console
```

hostname は OC4J スタンドアロン構成のホスト・コンピュータ、*port* は OC4J ホストがリスニングする HTTP ポート番号です。em/console により OC4J コンソールに接続します。

2. OC4J のホームページで、「アプリケーション」タブをクリックします。
3. 「アプリケーション」ページで、「デプロイ」ボタンをクリックします。
「アーカイブの選択」ページが表示されます。

4. 図 2-2 に示すように、「参照」ボタンを使用して、Oracle Access Manager Configuration Manager の .war ファイル・アーカイブへのパスを入力した後、「次へ」ボタンをクリックします。

図 2-2 「アーカイブの選択」ページ

ORACLE Enterprise Manager 10g
Application Server Control

設定 ログ ヘルプ ログアウト

アーカイブの選択 アプリケーション属性 デプロイ設定

デプロイ: アーカイブの選択

取消 ステップ 1/3 次へ(>)

アーカイブ

次のタイプのアーカイブをデプロイできます: J2EEアプリケーション(EARファイル)、Webモジュール(WARファイル)、EJBモジュール(EJB JARファイル)およびリソース・アダプタ・モジュール(RARファイル)。

アーカイブはローカル・ホストに存在します。アーカイブをApplication Server Controlが稼働しているサーバーにアップロードします。
アーカイブの場所 参照...

アーカイブはApplication Server Controlが稼働しているサーバーにすでに存在します。
サーバー上の場所
サーバー上の場所は、絶対パスまたはj2eehomeからの相対パスである必要があります

デプロイ・プラン

デプロイ・プランは、アプリケーションのデプロイ設定を含むXMLファイルです。デプロイ・プランがない場合は、デプロイ・プロセスで自動的に作成されます。この後のデプロイ・プロセスでは、デプロイ・プランを編集し、このアプリケーションを今後デプロイできるように保存するオプションがあります。

新規デプロイ・プランを自動的に作成します。
デプロイ・プランの設定は、OC4Jのデフォルトおよびアーカイブに含まれている情報に基づきます

デプロイ・プランはローカル・ホストに存在します。デプロイ・プランをApplication Server Controlが稼働しているサーバーにアップロードします。
プランの場所 参照...

デプロイ・プランはApplication Server Controlが稼働しているサーバーにすでに存在します。
サーバー上の場所
サーバー上の場所は、絶対パスまたはj2eehomeからの相対パスである必要があります

取消 ステップ 1/3 次へ(>)

設定 | ログ | ヘルプ | ログアウト

「アプリケーション属性」ページが表示されます。

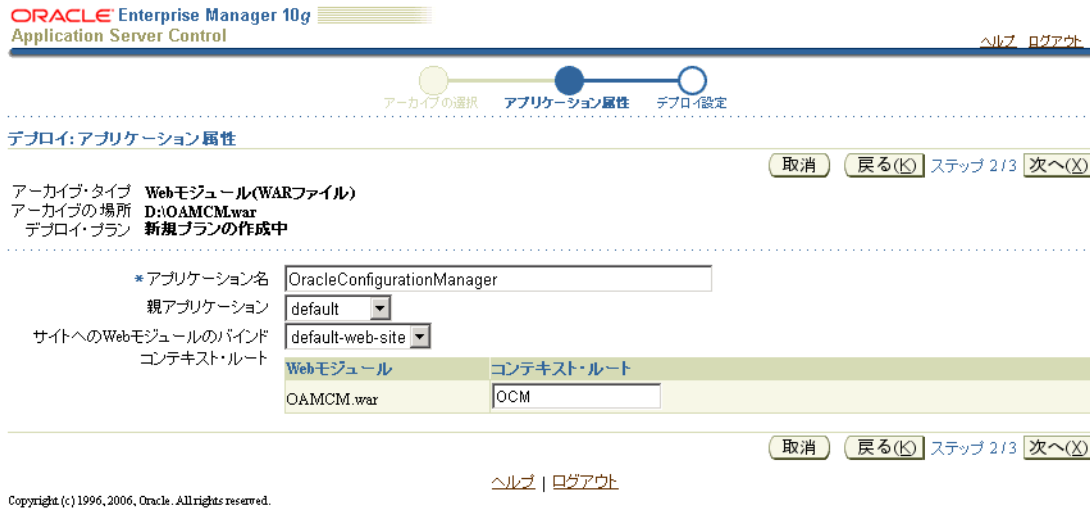
5. 「アプリケーション属性」ページで、表 2-3 の値を Configuration Manager のアプリケーション属性に指定した後、「次へ」ボタンをクリックして、実際のページと図 2-3 のページを比較します。

表 2-3 Oracle Access Manager Configuration Manager のアプリケーション属性

Configuration Manager のアプリケーション属性	値
アプリケーション名	OracleConfigurationManger
親アプリケーション	default
サイトへの Web モジュールのバインド	Default-web-site
コンテキスト・ルート	OCM

入力が終わると、「アプリケーション属性」ページは図 2-3 のページのようになります。

図 2-3 「アプリケーション属性」ページ



「次へ」ボタンをクリックすると、「デプロイ設定」ページが表示されます。

- 図 2-4 に示すように「デプロイ設定」ページで「デプロイ」ボタンをクリックして、Oracle Access Manager Configuration Manager をデプロイします。

図 2-4 「デプロイ設定」ページ



7. 図 2-5 に示すように表示される確認メッセージを確認します。

図 2-5 「確認」 ページ



8. 「確認」 ページで、右下隅の「戻る」 ボタンをクリックし (OC4J のホームページに戻り) ます。
9. Configuration Manager のホームページへの URL をブラウザ・ウィンドウに入力してデプロイをテストし、デプロイが正常に終了したことを確認します。次に例を示します。

`https://hostname:port/ocm/faces/index.jsp`

hostname は Configuration Manager のホスト・コンピュータ、*port* は Configuration Manager ホストがリスニングする HTTP ポート番号です。/ocm は Oracle Access Manager Configuration Manager アプリケーションのデプロイ時に「アプリケーション属性」 ページで指定した Web モジュールのコンテキスト・ルートです。faces/index.jsp により Configuration Manager アプリケーションの「Login」 ページに接続します。

次に示すような Configuration Manager の「Login」 ページが表示されます。

ORACLE Access Manager 10g

Configuration Manager

Login

* User Name

* Password

Login

10. 次のように続行します。

- **デプロイが成功した場合**: 次の順にアクティビティを実行します。
 - **ログイン**: Configuration Manager で使用するために定義したログイン名とパスワードを入力した後、「Login」 ボタンをクリックします。詳細は、2-16 ページの「Configuration Manager の管理者ロールおよびユーザー・ロールの割当て」を参照してください。
 - **Configuration Manager のツアー**: 使用可能な機能およびユーザー・インタフェースを習得します。
 - **Configuration Manager でのリポジトリの詳細の追加**: HMAAdmin ロールが割り当てられている場合は、Configuration Manager で使用するリポジトリを定義します。

- **デプロイが失敗した場合**: Configuration Manager の「Login」ページが表示されない場合は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』のアプリケーションのデプロイに関するトラブルシューティングのヒントを参照してください。

Configuration Manager の管理者ロールおよびユーザー・ロールの割当て

ここで示す手順では、Oracle Access Manager Configuration Manager に必要な管理者ロールの作成および割当てについて説明します。

Oracle Access Manager Configuration Manager でセキュリティのために必要なのは、OC4J のみです。OC4J 内では、Configuration Manager アプリケーションには、Configuration Manager に特定の権限を付与する 2 つのセキュリティ・ロールが必要です。次のロールを割り当てられたユーザーのみが、Oracle Access Manager Configuration Manager でタスクを実行できます。

- **HMAAdmin**: このロールにより、Oracle Access Manager Configuration Manager 内でリポジトリに対するシステム構成機能のみを実行できます。その他すべての Configuration Manager のアクティビティを実行するには、各ユーザーに HMUser ロールを割り当てる必要があります。
- **HMUser**: このロールにより、システム構成機能を除いたすべての Configuration Manager の機能を実行できます。環境（ディレクトリ）への書き込み権限を持つユーザーは、HMUser 権限があればすべての移行機能を実行できます。すなわち、環境の詳細の追加、関連付けの作成、変換ルールの追加、スナップショットの取得、データの移行およびトランザクションの管理が可能です。

OC4J で作成した HMAAdmin ロールおよび HMUser ロールは、既存の OC4J ロールを継承しません。また、HMAAdmin ロールおよび HMUser ロールの作成時に、RMI ログイン権限や管理権限は付与されません。

OC4J を使用して Configuration Manager をデプロイする際に、Oracle Access Manager Configuration Manager には特定のアプリケーション名を定義しました。次の手順では、Oracle Access Manager Configuration Manager の管理者およびユーザーに必要な OC4J 内にロールを作成し、これらのロールを OC4J 内に定義した特定のユーザーに割り当てます。

次の手順を開始する前に表 2-4 をチェックして、前提条件が満たされていることを確認します。

表 2-4 OC4J で Configuration Manager のロールを割り当てるための前提条件

確認	前提条件のタスク	参照先
	Configuration Manager をデプロイする。	2-12 ページの「 Configuration Manager のデプロイ 」

OC4J で HMAAdmin ロールおよび HMUser ロールを作成して割り当てる手順

1. OC4J のホームページに移動し、oc4jadmin としてログインします。次に例を示します。

`http://hostname:port/em/console`

`hostname` は OC4J スタンドアロン構成のホスト・コンピュータ、`port` は OC4J ホストがリスニングする HTTP ポート番号です。em/console により OC4J コンソールに接続します。

2. 図 2-6 に示すように、OC4J のホームページで「アプリケーション」タブをクリックした後、Oracle Access Manager Configuration Manager に定義したリンクを探してクリックします。

図 2-6 OC4J の「アプリケーション」タブ

ORACLE Enterprise Manager 10g
Application Server Control

クラスターポロジ > Application Server: as10131.stanvac05.jp.oracle.com >
OC4J: home

ページ・リフレッシュ: 2007/02/01 15時02分30秒 JST

ホーム アプリケーション Webサービス パフォーマンス 管理

このページには、このOC4JインスタンスにデプロイされたJ2EEアプリケーションとアプリケーション・コンポーネント(EJBモジュール、WARモジュール、リソース・アダプタ・モジュール)が表示されます。

表示: アプリケーション

(起動) (停止) (再起動) (アンデプロイ) (再デプロイ) | (デプロイ)

すべて選択 | 選択解除 | すべて開く | すべて閉じる

選択	名前	ステータス	開始時間	アクティブ・リクエスト	リクエスト処理時間(秒)	アクティブなEJBメソッド	アプリケーション定義のMBeans
<input type="checkbox"/>	すべてのアプリケーション						
<input type="checkbox"/>	ascontrol	↑	2007/02/01 11時39分21秒 JST	0	0.11	0	
<input type="checkbox"/>	default	↑	2007/02/01 11時39分20秒 JST	0	0.00	0	
<input type="checkbox"/>	OracleConfigurationManager	↑	2007/02/01 14時44分07秒 JST	0	0.00	0	
<input type="checkbox"/>	Middleware Services						

ヒント 親アプリケーション(デフォルト・アプリケーションなど)を停止すると、Enterprise Managerにより親アプリケーションに依存するすべての子アプリケーションが自動的に停止されます。同様に子アプリケーションを起動すると、Enterprise Managerにより必要な親アプリケーションが自動的に起動されます。

ホーム アプリケーション Webサービス パフォーマンス 管理

Oracle Access Manager Configuration Manager の「アプリケーション」タブが開きます。

3. 「管理」タブをクリックして、Oracle Access Manager Configuration Manager のページを表示します。

4. 図 2-7 に示すように、「管理」タブで「タスクに移動」列の「セキュリティ・プロバイダ」アイコンをクリックします。

図 2-7 Oracle Access Manager Configuration Manager の「管理」タブ

ORACLE Enterprise Manager 10g
Application Server Control 設定 ログ ヘルプ ログアウト

クラスタ・トポロジ > Application Server: as10131.stanvac05.jp.oracle.com > OC4J: home >
アプリケーション: Oracle Configuration Manager ページ・リフレッシュ: 2007/02/01 15時06分46秒 JST

ホーム Webサービス パフォーマンス **管理**

すべて開く すべて閉じる	
タスク名	タスクに移動 説明
▼ 管理タスク	
▼ プロパティ	
クラスタリング・プロパティ	このアプリケーションに対するクラスタリング・プロパティを表示/編集します。
▼ サービス	
JDBCリソース	このアプリケーションのデータ・ソースと接続プールを作成/削除/表示します。
JNDIブラウザ	このアプリケーションのJNDIバインディングを参照します。
▼ セキュリティ	
セキュリティ・プロバイダ	セキュリティ・プロバイダのプロパティ、プリンシパルおよびレルム管理。
▼ デプロイメント・ディスクリプタ	
アプリケーション・デプロイメント・ディスクリプタの表示	アプリケーション・デプロイメント・ディスクリプタ(application.xml)を表示します。
固有デプロイメント・ディスクリプタの表示	固有デプロイメント・ディスクリプタ(orion-application.xml)を表示します。
データ・ソース・デプロイメント・ディスクリプタの表示	データ・ソース・デプロイメント・ディスクリプタ(data-sources.xml)を表示します。
▼ JMX	
関連するシステムMBean	システムMBeanブラウザでこのアプリケーションのJ2EEアプリケーションMBeanに移動します。
アプリケーション定義のMBeans	このアプリケーションで定義されたMBeanを参照します。
▼ TopLink	
TopLinkセッション	このアプリケーションのTopLinkセッションを管理します。

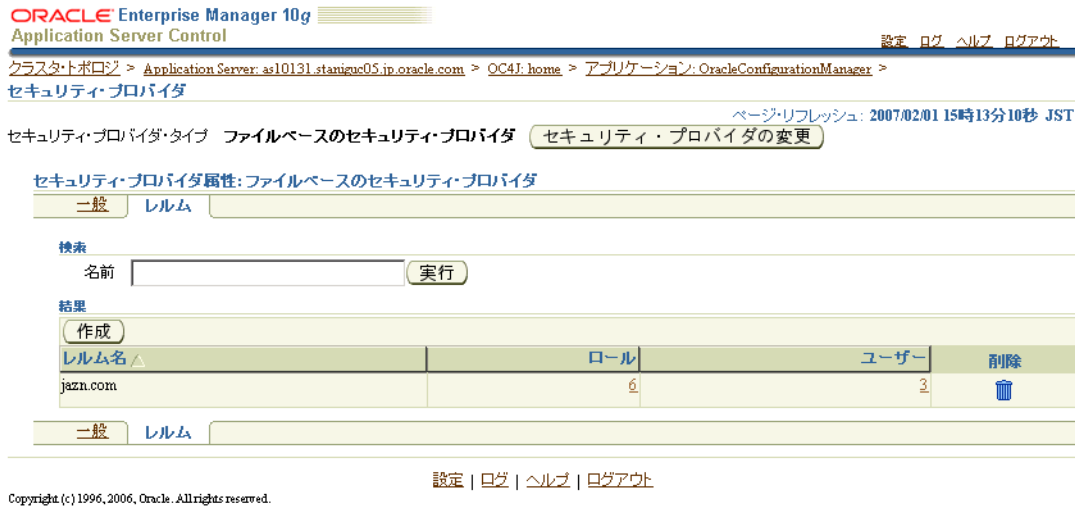
ホーム Webサービス パフォーマンス **管理**

「セキュリティ・プロバイダ」ページが表示されます。

5. 「セキュリティ・プロバイダ」ページで、「レルム」タブをクリックします。

6. 次の手順を実行し、Oracle Access Manager Configuration Manager に対して HMAAdmin ロールおよび HMUser ロールを作成します。
 - a. 図 2-8 に示すように、「レルム」サブタブで、レルム名に関連付けられたリンクを（「ロール」列で）探してクリックします。

図 2-8 「レルム」サブタブ: レルム名、ロールおよびユーザー



「ロール」ページが表示されます。このページには、「作成」ボタンがあります。

- b. 「ロール」ページで、「作成」ボタンをクリックして「ロールの追加」ページを表示します。

図 2-9 に示すような「ロールの追加」ページが表示されます。

図 2-9 「ロールの追加」ページ



- c. 「ロールの追加」 ページで、HMAdmin ロールについて次の詳細を入力した後、「OK」をクリックします。
 - 名前: HMAdmin
 - RMI ログイン権限の付与: 空白のままにしておきます。
 - 管理権限の付与: 空白のままにしておきます。
 - ロールの割当て: 無視します。HMAdmin が継承するロールはありません。
 - OK: HMAdmin ロールの設定が終わったら、「OK」 ボタンをクリックします。
 - d. 「ロールの追加」 ページで、次の情報を参考にして HMUser ロールを作成します。
 - 名前: HMUser
 - RMI ログイン権限の付与: 空白のままにしておきます。
 - 管理権限の付与: 空白のままにしておきます。
 - ロールの割当て: 無視します。HMUser が継承するロールはありません。
 - OK: HMUser ロールの設定が終わったら、「OK」 ボタンをクリックします。
- 実際の「ロール」 ページは、[図 2-10](#) のページのようになります。

図 2-10 HMAdmin および HMUser が表示された「ロール」 ページ

ORACLE Enterprise Manager 10g
Application Server Control 設定 ログ ヘルプ ログアウト

クラスタ: トポロジ > Application Server: as10131.stanvac05.jp.oracle.com > OC4J: home > アプリケーション: OracleConfigurationManager > セキュリティ・プロバイダ > **ロール**

ページ・リフレッシュ: 2007/02/01 15時28分22秒 JST

セキュリティ・プロバイダ・タイプ: ファイルベースのセキュリティ・プロバイダ
レルム名: jazn.com

検索

名前

結果

ロール名 ▲	ユーザー	削除
ascontrol_admin	1	
ascontrol_appadmin	0	
ascontrol_monitor	0	
HMAdmin	0	
HMUser	0	
oc4j-administrators	2	
oc4j-app-administrators	0	
users	0	

設定 | ログ | ヘルプ | ログアウト

Copyright (c) 1996, 2006, Oracle. All rights reserved.

7. 次のアクティビティを実行して、ユーザーを追加し、作成したばかりの管理者ロールまたはユーザー・ロールを Configuration Manager アプリケーションに割り当てます。
 - a. 図 2-11 に示すように、「レルム」サブタブで、レルム名に関連付けられたリンクを「ユーザー」列で探してクリックします。

図 2-11 「ユーザー」リンクが表示された「レルム」サブタブ

Oracle Enterprise Manager 10g
Application Server Control

クラスターホスト: Application Server: as10131.staniguc05.ip.oracle.com > OC4J_home > アプリケーション: OracleConfigurationManager > セキュリティ・プロバイダ

ページリフレッシュ: 2007/02/01 15時13分10秒 JST

セキュリティ・プロバイダタイプ: ファイルベースのセキュリティ・プロバイダ (セキュリティ・プロバイダの変更)

セキュリティ・プロバイダ属性: ファイルベースのセキュリティ・プロバイダ

二股 レルム

検索
名前: 実行

結果
作成

レルム名 ▲	ロール	ユーザー	削除
jazn.com	6	3	

二股 レルム

設定 | ログ | ヘルプ | ログアウト

Copyright (c) 1996, 2006, Oracle. All rights reserved.

- b. 「ユーザー」 ページで、「結果」 ラベルの下の「作成」 ボタンをクリックします。
- c. 図 2-12 に示すように、「ユーザーの追加」 ページで要求される詳細を追加した後、「OK」 をクリックします。次に例を示します。
 - 名前: Configuration Manager にログインするためのユーザー ID を入力します。
 - パスワード/パスワードの確認: このユーザーのパスワードを入力した後、2 回目の入力をしてパスワードを確認します。
 - ロールの割当て: 「使用可能なロール」 リストからこのユーザーに必要なロールを選択した後、「移動」 矢印をクリックして「選択したロール」 リストに追加します。次に例を示します。

HMAdmin

または

HMUser

注意: HMAdmin ロールと HMUser ロールの両方をシングル・ユーザーに割り当てることができます。

図 2-12 「ユーザーの追加」 ページ

- 「OK」をクリックして操作を完了します。

「確認」ページが表示され、この新しいユーザーの情報を確認できます。

- d. 図 2-13 に示すように「確認」ページでユーザー名およびロールを確認し、すべての情報が正しいことを確認します。

図 2-13 ユーザー名およびロールが表示された「確認」ページ

ユーザー名	割当済ロール	削除
anonymous		
DemoUser	HMUser*	
gail_tibori	HMUser*, HMAdmin*	
hansha	HMUser*	
himachi	HMUser*, HMAdmin*	
ItaAdmin	oc4j-administrators*	
oc4jadmin	oc4j-administrators*, ascontrol_admin*	
sharad	HMUser*, HMAdmin*	
shiv	HMUser*, HMAdmin*	

ヒント アスタリスクはユーザーに直接付与されたロールを示します。

- 8. 必要に応じて手順7を繰り返し、他の Oracle Access Manager Configuration Manager の管理者およびユーザーを追加します。

9. OC4J を終了するには、「ログアウト」をクリックします。

割り当てた Oracle Access Manager Configuration Manager の 1 人以上の管理者で、リポジトリの詳細を Configuration Manager に追加できます。

10. ロールおよびユーザーを作成したら、Oracle Access Manager Configuration Manager アプリケーションを再起動します。

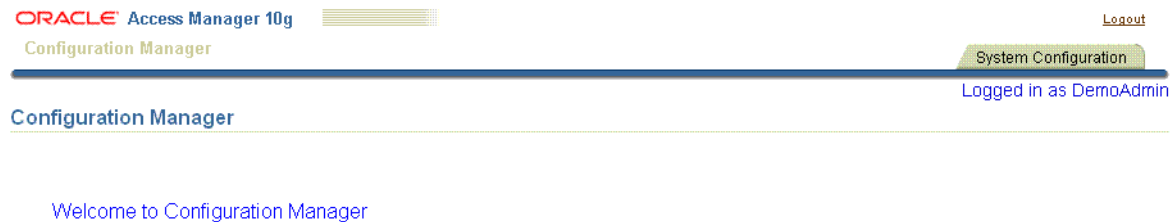
Configuration Manager のツアー

ここでは、Oracle Access Manager Configuration Manager に慣れるためのクイック・ツアーについて説明します。

Oracle Access Manager Configuration Manager に HMAAdmin 権限しかないユーザーとしてログインすると、「System Configuration」タブしか表示されません。HMUser 権限を持つユーザーとしてログインすると、「System Configuration」タブ以外のすべての機能タブが表示されます。両方のロールが割り当てられている場合は、すべてのタブを使用できます。詳細は、「[Configuration Manager の管理者ロールおよびユーザー・ロールの割り当て](#)」を参照してください。

Oracle Access Manager Configuration Manager にログインすると、他の Oracle Web ベース・アプリケーションと同様に、[図 2-14](#) に示すような「Welcome」ページが表示されます。機能タブがページの上部に表示され、それに対応するリンクがページの下部に表示されます。

図 2-14 Oracle Access Manager Configuration Manager の「Welcome」ページ



Configuration Manager にアクセスする手順

1. Configuration Manager のホームページに移動します。次に例を示します。

```
https://hostname:port/ocm/faces/index.jsp
```

hostname は Configuration Manager のホスト・コンピュータ、*port* は Configuration Manager ホストがリスニングする HTTP ポート番号です。/ocm は Oracle Access Manager Configuration Manager アプリケーションのデプロイ時に「アプリケーション属性」ページで指定した Web モジュールのコンテキスト・ルートです。faces/index.jsp により Configuration Manager アプリケーションの「Login」ページに接続します。

「Login」ページが表示されます。

2. 実行するアクティビティに基づいて HMUser 権限または HMAAdmin 権限を持つユーザーとしてログインします。次に例を示します。

```
HMUser_Name  
Password
```

3. ツアーを進めながら、次の各項を参照してください。
 - 「Logout」リンク
 - Configuration Manager の各ページの「Cancel」ボタンおよび「Back」ボタン
 - 表のナビゲーション・エイド
 - 「Snapshots」タブ
 - 「Migration」タブ
 - 「Transactions」タブ
 - 「System Configuration」タブ
 - Configuration Manager のメッセージ

「Logout」リンク

「Logout」リンクは、Configuration Manager の各ページの右上隅に表示されます。「ログアウト」リンクをクリックすると、セッションが終了します。

Configuration Manager の各ページの「Cancel」ボタンおよび「Back」ボタン

「Cancel」ボタンは、Oracle Access Manager Configuration Manager の多くのページに表示されます。「Cancel」をクリックすると、現在の操作は完了せずに終了し、元の機能ページに戻ります。たとえば、移行操作をキャンセルすると、「Select Logical Object Types to Compare」ページに戻ります。

「Back」ボタンは、Oracle Access Manager Configuration Manager の一部のページに表示されます。「Back」ボタンをクリックすると、前のページに戻ります。これは、Web ブラウザ自体の「戻る」ボタンの使用に似ています。たとえば、環境の詳細を表示しているときに「Back」をクリックすると、「Environment List」ページに戻ります。

表のナビゲーション・エイド

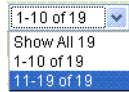
複数の環境、関連付け、スナップショットまたはトランザクションがある場合、対応するリスト・ページでは、情報が項目別に表形式で表示されます。図 2-15 に、一般的なリスト・ページと表の詳細を示します。

図 2-15 表のナビゲーション・エイド

Select Environment Name	Environment Type	Environment Description
<input type="radio"/> ps0737_5555_394	COREid704	Target Environment 704.
<input type="radio"/> ps0737_5555_393	COREid704	Source environment 704
<input type="radio"/> 10104DEV	OAM1014	dev
<input type="radio"/> TestEnvironment2	OAM10104	This is 10104 environment

表内の項目数が 10 以下の場合、一度にすべての項目を表示できます。表内の項目数が 10 を超える場合は、ナビゲーション・エイドが表示されます。たとえば、[図 2-15](#) の表には、表の右上にナビゲーション・エイドがあります。

- **Previous:** 「Previous」をクリックすると前のページに戻ります。
- **Next:** 「Next」をクリックすると次のページに進みます。
- **リスト:** リストから特定の範囲の項目を選択します。または、「Show All」を選択して表にすべての行を表示します。



「Snapshots」タブ

スナップショット機能を使用すると、使用している環境の 1 つの LDAP ディレクトリの oblix ツリー全体のバックアップ・コピーを作成できます。「Snapshots」タブを選択すると、「SnapShot List」ページが表示されます。このページから、新しいスナップショットの作成、リストアするスナップショットの選択、スナップショットの削除を実行できます。

[図 2-16](#) に示すように、選択した環境の既存のスナップショットの詳細が表形式で表示されます。「Select Environment」リストから環境を選択するまで、表は空です。

図 2-16 「Snapshot」タブ

ORACLE Access Manager 10g Configuration Manager

Navigation: Snapshots | Migration | Transactions

Logged in as DemoUser

SnapShot List

Select Environment: 10104DEV

Select SnapShot and... | Delete | Restore | Create New

Select SnapShot Name	Description	Date Created	Created By
<input type="radio"/> snapshot2	test	Fri Dec 15 02:41:23 GMT+05:30 2006	DemoUser
<input type="radio"/> snapshot1	test	Wed Dec 13 20:51:40 GMT+05:30 2006	both
<input type="radio"/> snapshot2	test	Wed Dec 13 20:52:20 GMT+05:30 2006	both

© Oracle Corp. 2006

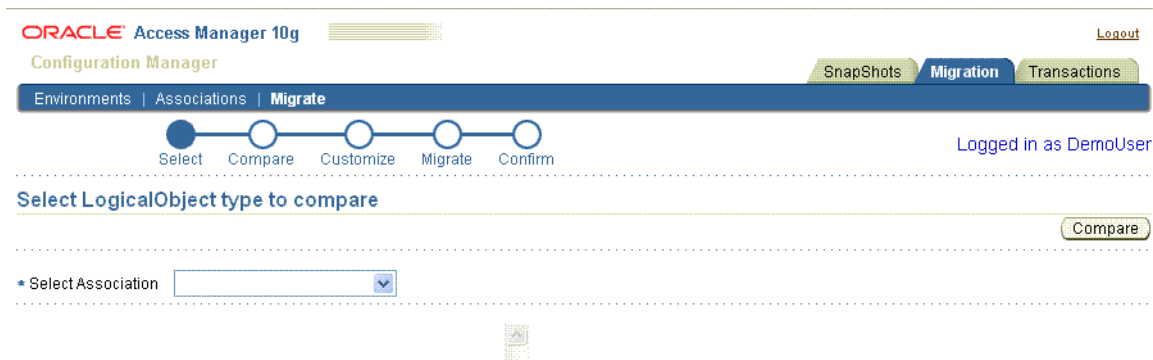
Navigation: Snapshots | Migration | Transactions | Logout

詳細は、3-24 ページの「スナップショットの作成および管理」を参照してください。

「Migration」タブ

図 2-17 に、「Migration」タブを示します。関連する機能は、セカンダリ・タブ（「Environments」、「Associations」、「Migrate」）で使用できます。図 2-17 に示すように、「Migrate」セカンダリ・タブには進捗インジケータがあります。

図 2-17 「Migration」タブ、各セカンダリ・タブおよび「Migrate」進捗インジケータ



対応するセカンダリ・タブを選択して、次のタスクを実行します。

- Environments:** このセカンダリ・タブから、既存の環境に関する詳細を作成、表示、変更または削除できます。データを移行するには、2つ以上の環境（一方はソースとして、他方はターゲットとして使用）を Configuration Manager に追加する必要があります。
 詳細は、3-5 ページの「[Configuration Manager での環境の詳細の追加および管理](#)」を参照してください。
- Associations:** このセカンダリ・タブから、ディレクトリ関連付けに関する詳細を作成、表示、変更または削除できます。データを移行するには、Configuration Manager に定義された2つの環境（一方はソースとして、他方はターゲットとして使用）の間に関連付けを作成する必要があります。
 詳細は、3-12 ページの「[関連付けの作成および管理](#)」を参照してください。
- Migrate:** 環境を定義して関連付けを形成したら、このセカンダリ・タブを使用して構成データを移行できます。データは、Oracle Access Manager Configuration Manager を使用すると直接移行できます。あるいは、データを LDIF ファイルにエクスポートすることを選択し、外部ユーティリティを使用してデータをオフラインでインポートすることもできます。
 詳細は、3-30 ページの「[ソースからターゲットへのデータの移行](#)」を参照してください。

「Transactions」タブ

トランザクション・レコードは、Oracle Access Manager Configuration Manager を使用してデータを移行するたびに自動的に作成されます。トランザクション ID は、レコードが作成されると自動的に割り当てられます。オプションのトランザクションの説明を指定できます。

「Transactions」タブを選択すると、「Transactions List」ページが表示されます。関連付けを選択すると、[図 2-18](#) に示すように関連するすべてのトランザクション・レコードが表形式で表示されます。関連付けを選択するまで、表は空です。

図 2-18 「Transactions」タブ

ORACLE Access Manager 10g Configuration Manager Logout

Snapshots Migration **Transactions**

Logged in as DemoUser

Transaction List

Select Association: 1014Dev-QA

Select a Transaction and

Select	Transaction ID	Description	Performed By	Date	Status
<input type="radio"/>	1372	No Description	DemoUser	Sat Dec 16 05:52:57 GMT+05:30 2006	Done
<input type="radio"/>	1390	No Description	DemoUser	Sat Dec 16 07:00:18 GMT+05:30 2006	Done
<input type="radio"/>	1430	Rollback of Transaction 1372	DemoUser	Wed Dec 20 06:06:07 GMT+05:30 2006	Done
<input type="radio"/>	1431	Rollback of Transaction 1372	DemoUser	Wed Dec 20 06:33:07 GMT+05:30 2006	Done

Snapshots | Migration | **Transactions** | Logout

© Oracle Corp, 2006

レコードの詳細を表示したり、トランザクション中に行われた特定の変更を表示したりできます。また、トランザクション中に行われた変更をロールバックすることも可能です。

トランザクションおよび変更のロールバックの詳細は、[第 5 章](#)を参照してください。

「System Configuration」タブ

リポジトリは、ディレクトリ環境の詳細、関連付け、スナップショット、コンテンツ、監査の詳細、移行トランザクション・データ、Configuration Manager を使用して作成できるオプションの LDIF ファイルを保存するために必要です。

HMAAdmin 権限を持つユーザーとしてログインしたときのみ、[図 2-19](#) に示すような「System Configuration」タブが使用可能になります。リポジトリが Configuration Manager に定義されるまで、フォームは空です。

図 2-19 「System Configuration」タブ

ORACLE Access Manager 10g Configuration Manager Logout

Snapshots Migration Transactions **System Configuration**

Logged in as DemoAdmin

System Configuration

Repository Type	Oracle DB
Host	141.144.80.200
Port	1521
UserID	hm
Password	

System Configuration | Logout

© Oracle Corp, 2006

「System Configuration」タブから、HMAAdmin 権限を持つユーザーは、次のリポジトリ関連タスクを Configuration Manager で実行できます。

- **表示:** 「System Configuration」タブを選択すると、必ずリポジトリの詳細が自動的に表示されます。リポジトリが Configuration Manager に定義されるまで、フォームは空です。
- **Edit:** リポジトリの詳細を追加または変更できるようになります。移行タスクを実行するには、リポジトリの詳細を追加する必要があります。
- **Test Connection:** リポジトリにアクセスできることを確認します。
- **Cleanup Repository:** Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリ表のデータを消去します。
- **Upload Schema:** Oracle Access Manager Configuration Manager スキーマが Oracle Database リポジトリに存在しない場合のみ表示されます。

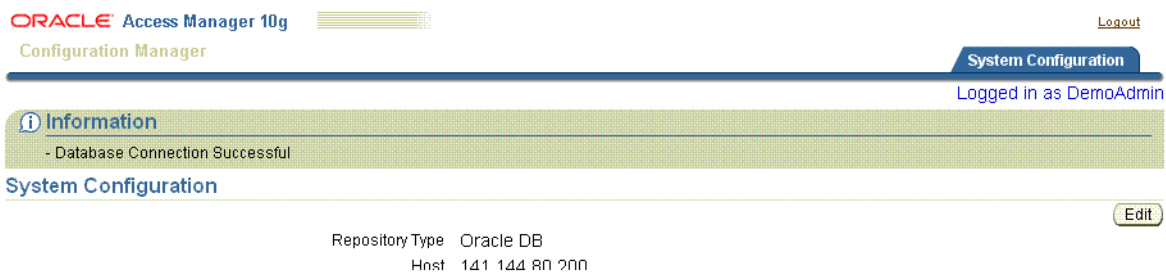
システム構成機能の詳細は、2-29 ページの「[Configuration Manager でのリポジトリの詳細の追加](#)」を参照してください。

Configuration Manager のメッセージ

Oracle Access Manager Configuration Manager で作業しているときに表示されるメッセージにはいくつかのタイプがあります。

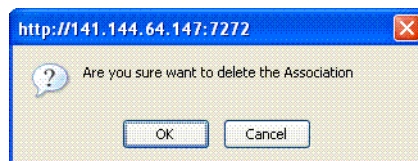
- **情報または確認メッセージ:** 操作が正常に完了したことを示します。図 2-20 に示すように、情報メッセージはページの最上部近くに表示されます。この例では、接続テスト操作がリポジトリに対して実行されました。完了すると、「System Configuration」ページに戻り、操作が正常に終了したことを示すメッセージが表示されます。

図 2-20 情報メッセージ



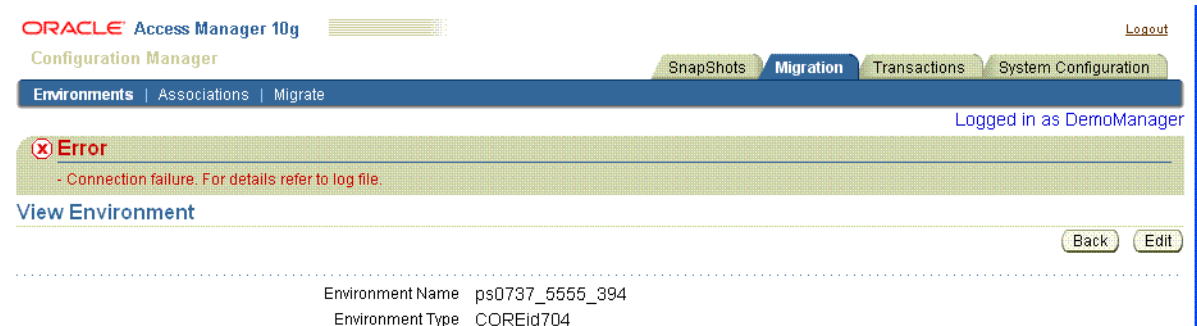
- **アクションまたは確認の要求:** 重要で元に戻せない操作を完了する前に求められます。たとえば、環境、関連付け、変換ルールを削除する前には確認が必要です。図 2-21 に示すようなウィンドウが表示され、確認を求められます。「OK」をクリックして操作を確認および完了するか、「Cancel」をクリックして操作を完了せずに終了します。

図 2-21 一般的なアクションの要求



- **エラー・メッセージ**: 操作を正常に完了できなかった場合に問題を通知します。エラー・メッセージは、[図 2-22](#) に示すような形式をとり、問題を評価して解決するのに役立つ情報が表示されます。

図 2-22 一般的なエラー・メッセージ



Configuration Manager でのリポジトリの詳細の追加

リポジトリは、ディレクトリ環境の詳細、関連付け、スナップショット、コンテンツ、監査の詳細、移行トランザクション・データ、Configuration Manager を使用して作成できるオプションの LDIF ファイルを保存するのに必要です。ここでは、Configuration Manager がリポジトリと通信できるようにする方法について説明します。

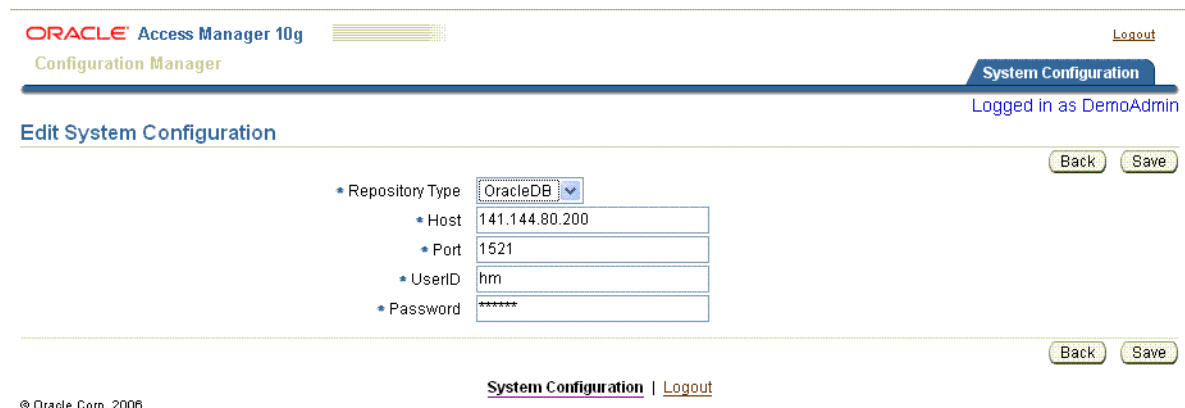
ここで説明するアクティビティを開始する前に、[表 2-5](#) で説明されている前提条件が満たされていることを確認します。

表 2-5 リポジトリの前提条件

確認	前提条件のタスク	参照先
	OC4J を使用して Configuration Manager 管理者ロール HMAAdmin をユーザーに割り当てる。	2-16 ページの「Configuration Manager の管理者ロールおよびユーザー・ロールの割当て」

「System Configuration」ページから、「Edit」ボタンをクリックしてリポジトリの詳細を入力します。「System Configuration」タブには「Add」ボタンはありません。[図 2-23](#) に、指定する必要がある詳細のサンプルを示します。HMUser 権限のみでログインすると、「System Configuration」タブは表示されません。

図 2-23 入力された「Edit System Configuration」ページ



リポジトリの詳細を Oracle Access Manager Configuration Manager に追加する手順

1. まだ Oracle Access Manager Configuration Manager に移動していない場合は、移動します。次に例を示します。

```
https://hostname:port/ocm
```

hostname は Configuration Manager のホスト・コンピュータ、*port* は Configuration Manager ホストがリスニングする HTTP ポート番号です。/ocm は Oracle Access Manager Configuration Manager アプリケーションのデプロイ時に「アプリケーション属性」ページで指定した Web モジュールのコンテキスト・ルートです。

「Welcome」ページが表示されます。

2. これまでの手順で OC4J で定義した HMAAdmin 権限を持つユーザーとしてログインします。

```
HMAAdmin_Name
Password
```

3. ページの右側にある「System Configuration」タブをクリックします。

注意： このアプリケーションに対して OC4J で定義された HMAAdmin 権限を持つユーザーのみに、「System Configuration」タブは表示されます。

4. 「System Configuration」ページで、「Edit」ボタンをクリックします。
5. 「Edit System Configuration」ページで、Configuration Manager リポジトリの詳細を識別するために適切な情報を入力します。次に例を示します。
 - **Repository Type:** Oracle DB がリストに表示される唯一の項目です。また、このアプリケーションでサポートされる唯一のリポジトリです。
 - **Host:** 完全 DNS ホスト名または IP アドレスのいずれかで表現される Oracle Database のホスト名。
 - **Port:** Oracle Database ホストが通信するポート番号。
 - **UserID:** Oracle Database 管理者のユーザー ID。
 - **Password:** Oracle Database 管理者のユーザー ID のパスワード。パスワードの制約はありません。
 - 「Save」をクリックしてこの情報を保存します（保存しない場合は、「Back」ボタンをクリックします）。

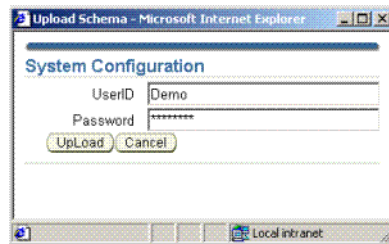
「System Configuration」ページに戻ると、「Test Connection」ボタンが表示されます。このボタンを使用して Configuration Manager からリポジトリにアクセスできることを確認できます。

6. 「Test Connection」ボタンをクリックして、このリポジトリに Configuration Manager がアクセスできることを確認します。

次に示すように、情報メッセージが表示されて正常に終了したことを示します。

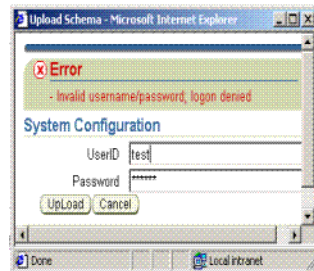
The screenshot shows the Oracle Access Manager 10g Configuration Manager web interface. At the top, it says "ORACLE Access Manager 10g Configuration Manager" and "System Configuration". A message bar indicates "Information - Database Connection Successful". Below this, the "System Configuration" section shows "Repository Type Oracle DB" and "Host 141.144.80.200". There is an "Edit" button on the right.

7. 次のように続行します。
- **接続が成功した場合**: 操作が正常に終了したことを示す情報メッセージが表示されず。手順 8 の説明に従ってスキーマをアップロードする準備ができました。
 - **接続が失敗した場合**: エラー・メッセージが表示されます。この場合、すべてのリポジトリの詳細が正確に入力されていることを確認します (必要に応じて編集します)。また、Oracle Database インスタンスが稼働していることを確認し、接続を再テストした後、次の手順に進んでスキーマをアップロードします。
8. **Upload Schema**: Configuration Manager スキーマのアップロードに必要なリポジトリの詳細を追加するとき、次のようにします。
- a. 「Upload Schema」ボタンをクリックします。
 - b. Upload Schema ウィンドウで、ディレクトリ管理者のユーザー ID とパスワードを入力した後、「Upload」をクリックして操作を完了します (または「Cancel」をクリックして操作を完了せずに終了します)。



9. 次のように続行します。

- **スキーマのアップロードが成功した場合:** データベースが正常に構成されたことを通知するメッセージが表示され、第 3 章の説明に従って移行タスクを準備および実行できます。
- **スキーマのアップロードが失敗した場合:** この場合、次に示すようなメッセージが表示されます。アップロードを再試行した後、第 3 章に進みます。



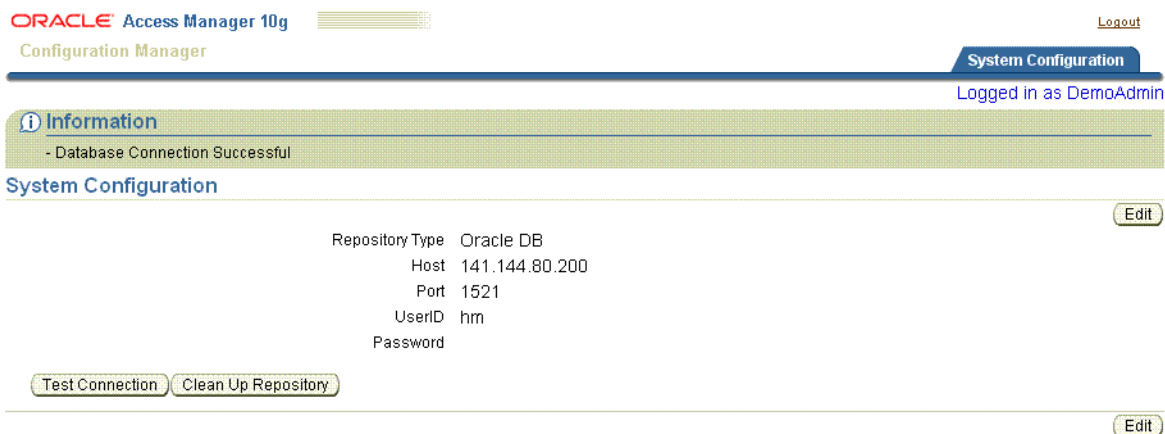
リポジトリの詳細を Oracle Access Manager Configuration Manager に追加してスキーマをアップロードしたら、Configuration Manager を使用する準備ができました。環境の詳細の追加、関連付けの形成、スナップショットの作成およびデータ移行の詳細は、第 3 章を参照してください。

リポジトリが Configuration Manager で使用可能であることの確認

データは、リポジトリが動作しアクセス可能な場合にのみ書き込むことができます。HMAAdmin 権限を持つユーザーは、接続テストの手順に従ってリポジトリが Configuration Manager で使用可能であることを確認できます。

操作が正常に完了すると、図 2-24 に示すように、ステータスを示す情報メッセージが表示されます。

図 2-24 「System Configuration」 ページの情報メッセージ



注意: OC4J で定義された HMAAdmin 権限を持つユーザーのみ、「System Configuration」タブにアクセスできます。HMUser 権限しかないユーザーとしてログインすると、「System Configuration」タブは表示されません。

Configuration Manager リポジトリが使用可能であることを確認する手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager のホームページから、HMAAdmin 権限を持つユーザーとしてログインした後、ページの右側にある「System Configuration」タブをクリックします。
2. 「System Configuration」ページで、「Test Connection」ボタンをクリックして情報メッセージを確認し、このリポジトリにアクセスできることを確認します。
3. 次のように続行します。
 - **接続が成功した場合**: 情報メッセージが表示され、この章のアクティビティを続行できます。
 - **接続が失敗した場合**: エラー・メッセージが表示されます。この場合、Oracle Database 管理者に連絡して Oracle Database インスタンスが稼働していることを確認し、接続を再テストしてから、この章のアクティビティを続行します。

構成データの変更の移行

この章では、構成データの準備およびソース LDAP ディレクトリ（環境）からターゲットへの移行に必要な情報を示します。この章の内容は次のとおりです。

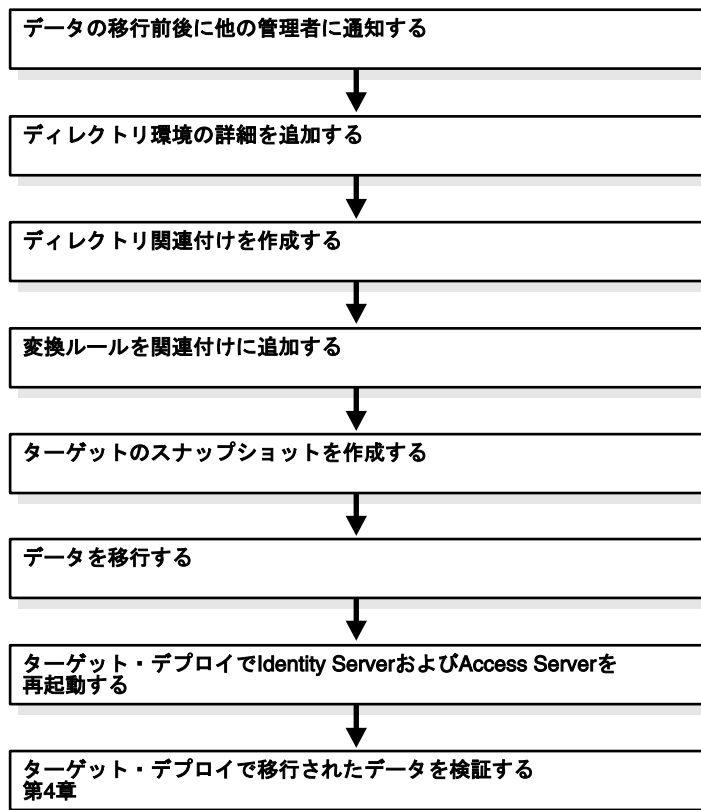
- データの移行の概要
- [Configuration Manager](#) へのアクセス
- 他の管理者への通知
- [Configuration Manager](#) での環境の詳細の追加および管理
- 関連付けの作成および管理
- オプションの変換ルールの追加および管理
- スナップショットの作成および管理
- ソースからターゲットへのデータの移行
- 移行後のサーバーの再起動

データの移行の概要

第2章のアクティビティが完了したら、Oracle Access Manager Configuration Manager を移行アクティビティに使用する準備ができました。

図3-1 に、Oracle Access Manager Configuration Manager を使用したデータの準備および移行を含む手順の概要を示します。図に続いて追加情報を示します。

図3-1 Configuration Manager を使用したデータの準備および移行



タスクの概要：データの移行

1. **他の管理者への通知**：データの移行の前後両方に行うことをお勧めします。詳細は、3-4 ページを参照してください。
2. **Configuration Manager への環境の詳細の追加**：関連付けを形成する前に行う必要があります。詳細は、3-5 ページを参照してください。
3. **ディレクトリ関連付けの作成**：移行前に行う必要があります。詳細は、3-12 ページを参照してください。
4. **オプションの変換ルールの追加および管理**：オプションですが、移行中に自動的に適用されます。詳細は、3-17 ページを参照してください。
5. **スナップショットの作成**：データの移行前に行うことをお勧めします。詳細は、3-24 ページを参照してください。
6. **ソースからターゲットへのデータの移行**：詳細は、3-30 ページを参照してください。
7. **移行後のサーバーの再起動**：データの移行後に行う必要があります。詳細は、3-42 ページを参照してください。
8. **成功した移行の検証**：ターゲット・デプロイですべてが想定どおりに機能していることを確認するために行うことをお勧めします。詳細は、第4章を参照してください。

Oracle Access Manager Configuration Manager を使用してリリース 7.0.4 デプロイからリリース 10g (10.1.4.0.1) デプロイ、またはその逆にデータを移行することはできません。詳細は、1-16 ページの「[デプロイのサポートと相互運用性](#)」を参照してください。

Configuration Manager へのアクセス

ここで示す手順では、Oracle Access Manager Configuration Manager にアクセスする方法について説明します。

Configuration Manager を使用して実行するタスクに対して適切な権限を持ってログインする必要があります。Configuration Manager に対する OC4J のロールには次の 2 種類があり、OC4J 管理者が定義する必要があります。

- HMAAdmin ロール: リポジトリとの接続テストを含め、システム構成アクティビティを実行するために必要です。
- HMUser ロール: システム構成を除いたすべてのアクティビティを実行できます。

この手順を開始する前に、[表 3-1](#) で説明されている前提条件がすべて満たされていることを確認します。

表 3-1 Oracle Access Manager Configuration Manager へのアクセスの前提条件

確認	前提条件のタスク	参照先
	Oracle Access Manager Configuration Manager のリポジトリを設定し、OC4J をインストールする。	2-6 ページの「 リポジトリの設定と OC4J のインストール 」
	Oracle Access Manager Configuration Manager を OC4J アプリケーションとしてデプロイする。	2-12 ページの「 Configuration Manager のデプロイ 」
	OC4J のロールをユーザーに割り当て、Configuration Manager に対するアクセス権限を付与する。OC4J 管理者に連絡し、Configuration Manager のログイン ID とパスワードを確認する。	2-16 ページの「 Configuration Manager の管理者ロールおよびユーザー・ロールの割当て 」
	リポジトリの詳細を Configuration Manager に追加する。	2-29 ページの「 Configuration Manager でのリポジトリの詳細の追加 」

Configuration Manager にアクセスする手順

1. 通常どおり、Configuration Manager のホームページにアクセスします。次に例を示します。

```
https://hostname:port/ocm/faces/index.jsp
```

hostname は Configuration Manager のホスト・コンピュータ、*port* は Configuration Manager ホストがリスニングする HTTP ポート番号です。/ocm は Oracle Access Manager Configuration Manager アプリケーションのデプロイ時に「アプリケーション属性」ページで指定した Web モジュールのコンテキスト・ルートです。faces/index.jsp により Configuration Manager アプリケーションの「Login」ページに接続します。

「Login」ページが表示されます。

2. 実行するアクティビティに対して HMUser 権限 (OC4J で定義済) を持つユーザーとしてログインします。次に例を示します。

```
HMUser_Name  
Password
```

3. この章のアクティビティを続行します。

他の管理者への通知

変更の伝播およびサーバーの再起動のために特定の移行期間をスケジュールすることをお勧めします。さらに、他の管理者に、担当するデプロイのデータの移行前後両方に通知することをお勧めします。

注意：他の管理者への通知は、Configuration Manager を使用せずに実行する必要がある手動タスクです。

移行チームは、バックアップ（スナップショット）が実行されるときに、移行対象の論理オブジェクト・タイプ（または論理オブジェクト）であるソースおよびターゲットのディレクトリに関する詳細を収集および確認できます。確実に連携するようにこれらの情報を他のユーザーに送信できます。移行が完了したときに、同じ管理者に通知すると、管理者はサーバーの再起動および確認の手順を支援できます。

他の管理者に通知する手順

1. 変更によって影響を受けるデプロイの管理者全員のリストを作成します。
2. 管理者、デプロイおよび状況に関する詳細がすべて含まれる電子メールを作成します。次に例を示します。

ANNOUNCING DATA MIGRATION THAT MAY IMPACT YOUR DEPLOYMENT:

CONFIGURATION DATA WILL BE MIGRATED FOR:
Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1)
(OR Oracle COREid Release 7.0.4, if this is your deployment)

WHEN: Date and time

SOURCE DIRECTORY: DNS hostname
TARGET DIRECTORY: DNS hostname

A SNAPSHOT OF THE TARGET DIRECTORY WILL BE MADE: Date and time

MIGRATED CHANGES MUST BE PROPOGATED TO ANY REPLICAS.

IDENTITY AND ACCESS SERVERS MUST BE RESTARTED AFTER DATA MIGRATION TO ENSURE DATA SYNCHRONIZATION.

3. 移行前に、影響を受ける管理者全員に電子メールを送信します。
4. 移行後に、管理者全員にフォローアップの電子メールを送信し、実行した内容を通知します。

Configuration Manager での環境の詳細の追加および管理

ここでは、Configuration Manager で環境の詳細を追加および管理するための手順を示します。Configuration Manager リポジトリは、これらのアクティビティに対してオンラインである必要があります。ソースおよびターゲットの環境もオンラインであることをお勧めします。

注意：ディレクトリのスナップショットの作成、データの移行またはトランザクションのロールバックに関連するすべての環境は、動作しオンラインである必要があります。環境が Configuration Manager で使用可能であることを確認するには、3-11 ページの「[環境の接続のテスト](#)」を参照してください。

表 3-2 に、Configuration Manager でディレクトリの詳細を追加および管理するアクティビティを実行するために、完了しておく必要がある前提条件のタスクを示します。その後のタスクの概要では、Configuration Manager を使用した環境の管理について説明します。

表 3-2 環境の前提条件

確認	前提条件のタスク	参照先
	リポジトリ、OC4J、Oracle Access Manager Configuration Manager、管理者ロールとユーザー・ロールをインストールおよび設定する。	第 2 章

タスクの概要：既存デプロイに対する環境の詳細の管理

1. [Configuration Manager での環境の詳細の表示](#)
2. [Configuration Manager への環境の詳細の追加](#)：関連付けの形成およびデータの移行の前に行う必要があります。
3. [Configuration Manager での環境の詳細の変更](#)
4. [Configuration Manager での環境の詳細の削除](#)
5. [環境の接続のテスト](#)

Configuration Manager での環境の詳細の表示

ここで示す手順では、Configuration Manager に追加された環境の詳細を表示する方法について説明します。このアクティビティは、HMUser 権限を持つユーザーであれば実行できます。

図 3-2 に示すように、「Migrate」タブを選択した後、「Environments」セカンダリ・タブを選択すると、「Environments List」ページが表示されます。環境の詳細が Configuration Manager に存在しない場合、表は空です。この場合、3-7 ページの「[Configuration Manager への環境の詳細の追加](#)」にスキップしてください。

図 3-2 「Environments List」ページ

The screenshot shows the Oracle Access Manager 10g Configuration Manager interface. The 'Environments List' page is displayed, showing a table of environments. The table has columns for Environment Name, Environment Type, and Environment Description. The data in the table is as follows:

Select	Environment Name	Environment Type	Environment Description
<input type="radio"/>	ps0737_5555_394	COREid704	Target Environment 704.
<input type="radio"/>	ps0737_5555_393	COREid704	Source environment 704
<input type="radio"/>	10104DEV	OAM1014	dev
<input type="radio"/>	TestEnvironment2	OAM10104	This is 10104 environment

「Environment Name」列の名前をクリックすると、図 3-3 に示すような「View Environment」ページが表示されます。図に続いてこのページの詳細を説明します。

図 3-3 「View Environment」ページ

The screenshot shows the Oracle Access Manager 10g Configuration Manager interface. The main content area displays the following information for environment 10104DEV:

Environment Name	10104DEV
Environment Type	OAM1014
Environment Description	dev
Directory Server Type	Active Directory
Host Name	141.144.69.14
Port	389
Configuration DN	OU=oblix,OU=company1,DC=obps0737,DC=persistent,DC=co,DC=in
User DN	cn=administrator,cn=users,dc=obps0737,dc=persistent,dc=co,dc=in
Password	
Environment URL	http://141.144.74.35:3333/access/oblix/
Enable SSL	false

Buttons for 'Test Environment', 'Back', and 'Edit' are also visible on the page.

「View Environment」ページには次の情報が表示されます。

- **Environment Name:** このディレクトリ・サーバーの詳細を Configuration Manager に追加したときに入力した一意の名前。
- **Environment Type:** このディレクトリ・サーバーがインストールされたリリース (Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4)。
- **Environment Description:** このディレクトリおよびデプロイをさらに特定するオプションの記述。
- **Directory Type:** サポートされるディレクトリ・サーバー・タイプ。
- **Host Name:** このディレクトリがインストールされたコンピュータの DNS ホスト名 (完全 DNS ホスト名または IP アドレス)。
- **Port:** このディレクトリ・サーバーが通信するポート番号。
- **Configuration DN:** Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 の構成データのバインド DN。たとえば、`o=oblix,o=company,c=us` です。

ユーザー・データの検索ベースに似ています。構成 DN は、Oracle Access Manager スキーマおよび構成データが格納される DIT のノードを識別するために指定する必要があります。Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) デプロイまたは Oracle COREid リリース 7.0.4 デプロイ内での使用および場所の詳細は、vii ページの「[関連ドキュメント](#)」に示す対応するインストール・ガイドを参照してください。

- **User DN:** Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) ディレクトリまたは Oracle COREid リリース 7.0.4 ディレクトリの管理者 ID (バインド DN またはルート DN)。

このディレクトリ・アカウントには、読取り、書込み、追加、削除、検索、比較および自己書込み権限が必要です。これらの権限を持つユーザーの作成方法は、ディレクトリ・ベンダーによって異なります。詳細は、ディレクトリのドキュメントを参照してください。Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) デプロイまたは Oracle COREid リリース 7.0.4 デプロイ内での使用および場所の詳細は、vii ページの「[関連ドキュメント](#)」に示す対応するインストール・ガイドを参照してください。

- **Password:** ユーザー DN のディレクトリ管理者のパスワード。

- **Environment URL:** LDAP ディレクトリへの URL。
- **Enable SSL:** 有効の場合は True、無効の場合は False です。

Configuration Manager に追加された環境の詳細を表示する手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager から「Migration」タブを選択した後、「Environments」を選択して「Manage Environment」ページを表示します。
2. 目的の環境名をクリックして、選択したディレクトリの詳細を表示します。次に例を示します。

10104DEV

3. 「View Environment」ページからは、次のアクティビティを実行できます。
 - 「Test Environment」ボタンをクリックして、このディレクトリが動作しオンラインであることを確認します。
 - 「Back」ボタンをクリックして、「Manage Environment」ページに戻ります。
 - 「Edit」ボタンをクリックして、選択したディレクトリの詳細を変更します。この場合、3-10 ページの「[Configuration Manager での環境の詳細の変更](#)」に進んでください。

Configuration Manager への環境の詳細の追加

ここで示す手順は、環境の詳細を Configuration Manager に追加する方法について説明します。HMUser 権限を持つユーザーであれば、環境の詳細を追加できます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリは、オンラインである必要があります。環境（LDAP ディレクトリ）もオンラインであることをお勧めします。

注意： 2 つ以上の LDAP ディレクトリ環境について詳細を追加すると、データの移行のソースおよびターゲットを指定する関連付けを形成できます。

フェイルオーバーとロード・バランシング： Oracle Access Manager Configuration Manager では、ディレクトリのフェイルオーバーまたはロード・バランシングをサポートしません。各既存デプロイについて、Configuration Manager は 1 つのマスター LDAP ディレクトリにのみ書き込み、1 つのマスター・サーバーまたはレプリカ・サーバーからのみ読み取ります。

レプリケートされたディレクトリ環境では、ターゲット環境としてマスター・ディレクトリ（書込み操作が発生するディレクトリ）に対してのみ詳細を追加する必要があります。 そうしないと、移行用に選択したオブジェクトをターゲットに書き込むことができず、移行は失敗します。構成データをマスター LDAP ディレクトリに移行した後、Identity Server および Access Server を再起動する前に変更がレプリカにすべて伝播されたことを確認する必要があります。

「Environment List」ページで「Create New」ボタンをクリックすると、「Add Environment」ページが表示されます。図 3-4 に、入力サンプルを示します。環境によって異なります。

図 3-4 「Add Environment」ページ

ORACLE Access Manager 10g Configuration Manager

Logout

Snapshots Migration Transactions

Environments Associations Migrate

Logged in as DemoUser

Add Environment

Save Cancel

Please enter Directory Server Configuration Details

* Environment Name	10104DEV
* Environment Type	OAM1014
Environment Description	dev
* Directory Server Type	Active Directory
* Host Name	141.144.68.137
* Port	389
* Configuration DN	37,DC=persistent,DC=co,DC=ir
* User DN	0737,dc=persistent,dc=co,dc=in
* Password	*****
Environment URL	41.144.74.35:3333/access/oblivion

環境タイプ（OAM 1014 または COREid704）およびディレクトリ・タイプを選択できるリストが表示されます。この例では、環境タイプは OAM1014 です。

環境に関する他の情報を入力するフィールドが表示されます。環境の名前および説明を定義する際には、英数字の大 / 小文字の組合せの他、空白文字と句読点を使用できます。

環境が SSL 対応である場合は、「Add Environment」ページで必ず指定します。詳細は、次の手順を参照してください。

既存の環境の詳細を追加する手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager から、「Migration」タブを選択した後、「Environments」を選択します。
2. 「Environment List」ページで、「Create New」ボタンをクリックします。
3. 「Add Environment」ページで、この手順の概要におけるガイドラインに従ってこのディレクトリ・サーバーに関する情報を指定します。次に例を示します。

- **Environment Name:** このディレクトリ・サーバーの一意の説明的な名前を入力します。環境の詳細、ホスト名、ポートまたは他の識別できる特徴を含めることができます。次に例を示します。

10104DEV

- **Environment Type:** このディレクトリ・サーバーがインストールされた環境のタイプ（リリース 10g (10.1.4.0.1) またはリリース 7.0.4）を選択します。

OAM1014

- **Environment Description:** このディレクトリおよび環境をさらに特定するオプションの簡単な記述を入力します。次に例を示します。

dev

- **Directory Type:** リストからディレクトリ・サーバーのタイプを選択します。次に例を示します。

Active Directory

- **Host Name:** このディレクトリがインストールされたコンピュータの完全 DNS ホスト名 (DNS_hostname.domain.com) または IP アドレスを入力します。次に例を示します。

141.144.68.137

- **Port:** このディレクトリ・サーバーが通信するポート番号を入力します。

389

- **Configuration DN:** Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 のデータの構成 DN を入力します。次に例を示します。

OU=oblix,OU=company1,DC=obps0737,DC=persistent,DC=co,DC=in

- **User DN:** この環境 (LDAP ディレクトリ) のディレクトリ管理者 ID を入力します。次に例を示します。

cn=administrator,cn=users,dc=obps0737,dc=persistent,dc=co,dc=in

- **Password:** ディレクトリ管理者のパスワードを入力します。

- **Environment URL:** LDAP ディレクトリへの URL。次に例を示します。

http://141.144.74.35:3333/access/oblix/

詳細は、3-5 ページの「[Configuration Manager での環境の詳細の表示](#)」を参照してください。

4. **Enable SSL:** このディレクトリで SSL が有効な場合は、ページの一番下の「Enable SSL」を選択して、次の手順に従ってこのディレクトリの証明書をロードします。次に例を示します。
 - a. 「Enable SSL」の横のボックスを選択します。
 - b. 「add Certificate」リンク（「Enable SSL」チェック・ボックスの横）をクリックして、「Upload Certificate」ダイアログ・ボックスを表示し、要求される詳細を入力します。
 - c. **CA Certificate File:** このディレクトリの CA 証明書ファイルへの絶対パスを入力（または参照して選択）します。
 - d. **Keystore Password:** キーストア・ファイルのパスワードを入力します。
 - e. 「Upload」ボタンをクリックして証明書を取得します（または「Cancel」をクリックして証明書をアップロードせずにダイアログ・ボックスを終了します）。
 - **証明書のアップロードが成功した場合:** 元のページに戻ります。この場合、手順 5 に進んでください。
 - **証明書のアップロードが失敗した場合:** 問題の解決に役立つエラー・メッセージが表示されます。この場合、エラー・ウィンドウで「Cancel」ボタンをクリックし、ファイルの場所およびパスワードを確認して、証明書のステップを再実行します。
5. このディレクトリ・サーバーの詳細の入力が終了したら、「Save」をクリックします。
6. この手順を繰り返して、同じリリースの他のデプロイ内の別の 1 つ以上の LDAP ディレクトリについて環境の詳細を追加します。

Configuration Manager での環境の詳細の変更

環境の詳細の変更は、HMUser 権限を持つユーザーであれば実行できます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリは、オンラインである必要があります。環境 (LDAP ディレクトリ) もオンラインであることをお勧めします。

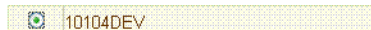
次の手順の説明に従って、Configuration Manager で環境の詳細の大部分、つまり環境名および環境タイプを除いたすべての詳細を変更できます。たとえば、誤った記述は再入力できます。この操作には、「Select」列のオプションを使用して目的の名前を選択します。名前自体をクリックしないでください。

各エントリの詳細およびガイドラインは、3-7 ページの「[Configuration Manager への環境の詳細の追加](#)」を参照してください。

注意： 詳細を変更する際に、環境名および環境タイプは変更できません。

ディレクトリ環境の詳細を変更する手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager から、「Migration」タブを選択した後、「Environments」を選択します。
2. 「Select」列で、目的の環境名の横のオプションをクリックした後、「Modify」ボタンをクリックします。次に例を示します。



3. 「Modify Environment」ページで、変更するこのディレクトリの詳細を編集します。
4. 詳細の編集が終了したら「Save」をクリックします（または「Cancel」をクリックして完了する前に操作を終了します）。

Configuration Manager での環境の詳細の削除

次の手順の説明に従って、Configuration Manager で環境の詳細を削除できます。HMUser 権限を持つユーザーであれば、環境を削除できます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリは、オンラインである必要があります。LDAP ディレクトリもオンラインであることをお勧めします。


削除された環境は、関連付けの形成やデータの移行時には使用できません。関連付けの一部として定義された環境は削除できません。

注意： 環境が関連付けの一部である場合は、先に関連付けを削除してから環境を削除します。

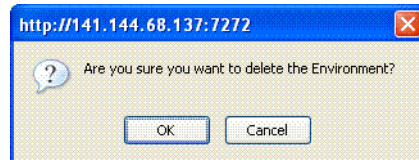
この操作には、「Select」列のオプションを使用して目的の名前を選択します。名前自体をクリックしないでください。この操作の際に、実行する内容の確認を求められます。操作が完了すると、「Manage Environments」ページに戻り、選択した項目が削除されたことを通知する情報メッセージが表示されます。

Configuration Manager から環境の詳細を削除する手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager から、「Migration」タブを選択した後、「Manage Environments」を選択します。
2. 目的の環境名の横のオプションをクリックした後、「Delete」ボタンをクリックします。次に例を示します。

 NDS-ps2979-US

操作が実行される前に、次に示すような、実行する内容の確認をを求めるメッセージが表示されます。



3. メッセージ・ウィンドウの「OK」をクリックして削除を確認します（または「Cancel」をクリックして完了せずに操作を終了します）。
4. 「Manage Environments」ページで、操作が正常に終了したことを示す情報メッセージを確認します。また、環境の詳細がリストに表示されていないことを確認します。

環境の接続のテスト

スナップショット、移行およびトランザクションの各操作を行う際、環境は動作しオンラインである必要があります。HMUser 権限を持つユーザーであれば、環境の接続をテストできます。接続に問題がある場合は、ディレクトリ管理者に連絡します。

環境が動作しオンラインであることを確認する手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager から、「Migration」タブを選択した後、「Environments」を選択します。
2. 「Environment Name」列で目的の名前をクリックして詳細を表示します。次に例を示します。

10104DEV

3. 「View Environment」ページで、「Test Environment」ボタンをクリックします。
4. 情報メッセージを読み、環境の接続が成功したことを確認します。
 - **接続が成功した場合**: このディレクトリを対象とするアクティビティを続行します。
 - **接続が失敗した場合**: ディレクトリ管理者に連絡します。スナップショット、移行およびトランザクションの各操作を行う際、ディレクトリは動作しオンラインである必要があります。

関連付けの作成および管理

ここでは、Oracle Access Manager Configuration Manager を使用してディレクトリ関連付けを表示、作成、有効化、無効化および削除する方法について説明します。作業を進める前に、[表 3-3](#) で説明されている前提条件のアクティビティが完了していることを確認します。

表 3-3 関連付けの前提条件

確認	前提条件のタスク	参照先
	データの移行時に使用する 2 つ以上の環境 (LDAP ディレクトリ) の詳細を追加する。	3-7 ページの「 Configuration Manager への環境の詳細の追加 」

HMUser 権限を持つユーザーであれば、次のタスクの概要のアクティビティを実行できます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリは、オンラインである必要があります。対象となる LDAP ディレクトリ環境もオンラインであることをお勧めします。

タスクの概要：ディレクトリ関連付けの作成および管理

1. [ディレクトリ関連付けの設定の表示](#)
2. [ディレクトリ関連付けの作成](#)：データの移行前に行う必要があります。
3. [ディレクトリ関連付けの有効化 / 無効化](#)
4. [ディレクトリ関連付けの削除](#)

ディレクトリ関連付けの設定の表示

次の手順の説明に従って、関連付けの設定を表示できます。関連付けをまだ作成していない場合は、3-14 ページの「[ディレクトリ関連付けの作成](#)」を参照してください。

HMUser 権限を持つユーザーであれば、関連付けの設定を表示できます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリは、オンラインである必要があります。対象となる環境もオンラインであることをお勧めします。

「Migrate」タブの「Associations」セカンダリ・タブを選択すると、「Association List」ページが表示されます。[図 3-5](#) にサンプルを示します。Configuration Manager に関連付けが存在しない場合、表は空です。

図 3-5 「Association List」ページ

The screenshot shows the Oracle Access Manager Configuration Manager interface. At the top, there's a navigation bar with tabs for Snapshots, Migration (selected), Transactions, and System Configuration. Below that, there's a sub-navigation bar with 'Environments', 'Associations' (selected), and 'Migrate'. The main content area is titled 'Association List' and contains a table with the following data:

Select	Association Name	Association Description	Source Environment	Target Environment	Status
<input type="radio"/>	1014QA-DEV	1014	10104QA	10104DEV	Enabled
<input type="radio"/>	JUnitTest3&4	This is JUnit Test getAssociation Using JUnitTest3 & JUnitTest4 Environments	JUnitTest3	JUnitTest4	Enabled
<input type="radio"/>	1014Dev-QA	1014Dev-QA	10104DEV	10104QA	Enabled

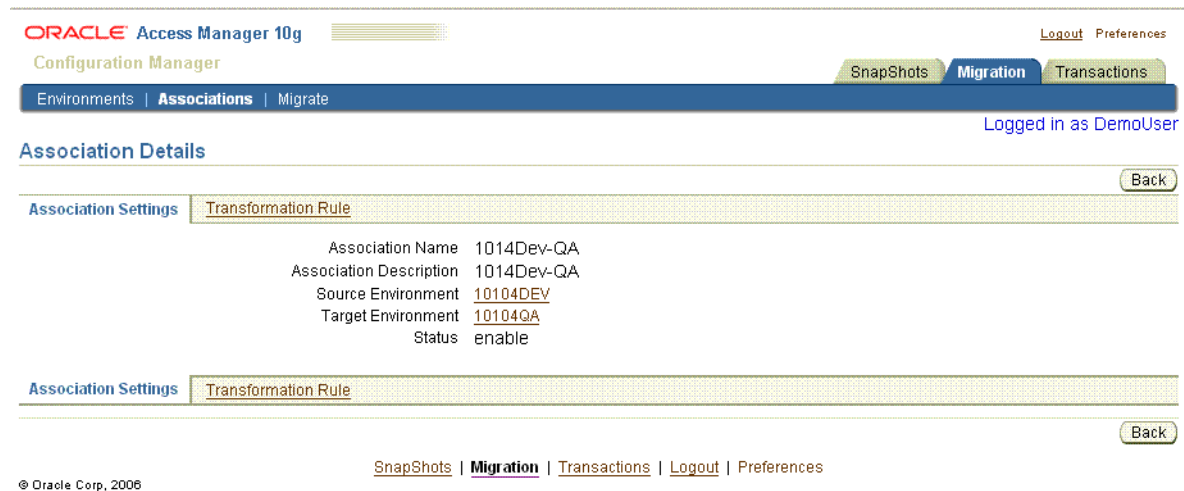
At the bottom of the page, there's a footer with '© Oracle Corp, 2006' and a navigation bar with 'Snapshots', 'Migration' (selected), 'Transactions', 'System Configuration', and 'Logout'.

関連付けの詳細は、次のとおりです。

- **Association Name:** この関連付けられたディレクトリ・ペアを識別するために入力した一意の名前。
- **Association Description:** この関連付けについて入力したオプションの簡単な記述。
- **Source Environment:** ソース環境の名前（移行するデータがある LDAP ディレクトリ）。
- **Target Environment:** ターゲット環境の名前（データの移行先となる LDAP ディレクトリ）。
- **Status:** Enabled または Disabled。各関連付けは作成時に自動的に有効になります。

表で名前をクリックすると、[図 3-6](#) に示すような「Association Details」ページが表示されます。

図 3-6 「Association Details」ページ



関連付けの設定を表示する手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager から、「Migration」タブを選択した後、「Associations」を選択します。
2. 「Association List」ページの「Association Name」列で名前をクリックします。次に例を示します。

[1014QA-DEV](#)

3. 「Association Details」ページに、このディレクトリ・ペアの設定が表示されます。
4. 「Back」ボタンをクリックして、「Association List」ページに戻ります。
5. 必要に応じて、次の説明に進んでください。
 - [ディレクトリ関連付けの作成](#)
 - [ディレクトリ関連付けの有効化 / 無効化](#)
 - [ディレクトリ関連付けの削除](#)
 - [オプションの変換ルールの追加および管理](#)

ディレクトリ関連付けの作成

データの移行には、ソース環境とターゲット環境間の移行パスを指定するディレクトリ関連付けが必要です。HMUser 権限を持つユーザーであれば、関連付けを作成できます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリは、オンラインである必要があります。対象となる LDAP ディレクトリもオンラインであることをお勧めします。

「Migrate」タブの「Associations」セカンダリ・タブを選択すると、「Association List」ページが表示されます。「Create New」ボタンをクリックすると、[図 3-7](#) に示すような「Add Association」ページが表示されます。

図 3-7 「Add Association」ページ

The screenshot shows the 'Add Association' page in the Oracle Access Manager Configuration Manager interface. The page title is 'Add Association'. The breadcrumb trail is 'SnapShots | Migration | Transactions | System Configuration | Logout'. The page is logged in as 'DemoManager'. The form contains the following fields:

- Association Name: Text input field
- Association Description: Text input field
- Source Environment: Dropdown menu
- Target Environment: Dropdown menu

There are 'Save' and 'Cancel' buttons at the top right and bottom right of the form area.

関連付けの名前およびオプションの説明を入力する際には、英数字の大 / 小文字の組合せの他、空白文字と句読点を使用できます。Configuration Manager に定義されている環境から、ソース環境とターゲット環境を選択できるリストが表示されます。

ソース環境を選択すると、選択したソースのリリースに基づいて選択できるターゲット環境のリストが設定されます。たとえば、選択したソース環境がリリース 7.0.4 である場合、「Target Environment」リストには、Configuration Manager に定義された他のリリース 7.0.4 環境のみが移入されます。関連付けは、作成時に自動的に有効になります。

目的の環境がリストに表示されない場合は、その環境を追加する必要があります。詳細は、3-7 ページの「[Configuration Manager への環境の詳細の追加](#)」を参照してください。

注意： 関連付けが作成されると、詳細は変更できません。3-16 ページの「[ディレクトリ関連付けの削除](#)」の説明に従って、関連付けは削除できます。

関連付けを作成する手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager から、「Migration」タブを選択した後、「Associations」を選択します。
2. 「Association List」ページで、「Create New」ボタンをクリックします。
3. 「Add Association」ページで、次の詳細を入力して、この関連付けられたペアのソース・ディレクトリおよびターゲット・ディレクトリを指定します。次に例を示します。
 - **Association Name:** この関連付けられたディレクトリ・ペアを一目で識別できる一意の名前を入力します。次に例を示します。
1014Dev-QA
 - **Association Description:** この関連付けられたペアをさらに特定するオプションの簡単な記述を入力します。次に例を示します。
Password Policy
 - **Source Environment:** 既存の環境のリストから目的のソース・ディレクトリの名前を選択します。次に例を示します。
10104DEV
 - **Target Environment:** リストから目的のターゲット・ディレクトリの名前を選択します。次に例を示します。
10104QA
4. 「Save」をクリックして関連付けを作成します（あるいは「Cancel」をクリックして操作を終了します）。
「Associations List」ページが表示されます。関連付けは、自動的に使用可能になります。

ディレクトリ関連付けの有効化 / 無効化

ここでは、ディレクトリ関連付けを無効または有効にする方法について説明します。HMUser 権限を持つユーザーであれば、関連付けを有効または無効にできます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリおよび関連付けられた LDAP ディレクトリはオンラインである必要があります。

関連付けは、データの移行に使用できる必要があります。新しい関連付けを作成すると、自動的に使用可能になります。関連付けを無効にすると、データを移行できません。また、その関連付けのトランザクション・レコードを表示することもできません。

関連付けは、削除する前に無効にする必要はありません。しかし、先に関連付けを無効にしてから削除することをお勧めします。

ディレクトリ関連付けを有効（または無効）にする手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager から、「Migration」タブを選択した後、「Associations」を選択します。
2. 「Association List」ページで、目的の関連付け名の横のオプションを選択します。次に例を示します。



3. **関連付けを有効にする場合：**「Association List」ページで「Enable」ボタンをクリックします。

関連付けが有効になったことを示すメッセージが表示され、「Status」列が「Enabled」となります。

4. **関連付けを無効にする場合：**「Association List」ページで「Disable」ボタンをクリックします。

関連付けが無効になったことを示すメッセージが表示され、「Status」列が「Disabled」となります。

5. 必要に応じて、次の説明に進んでください。
 - [ディレクトリ関連付けの設定の表示](#)
 - [ディレクトリ関連付けの作成](#)
 - [ディレクトリ関連付けの削除](#)
 - [オプションの変換ルールの追加および管理](#)

ディレクトリ関連付けの削除

ここでは、ディレクトリ関連付けを削除する方法について説明します。HMUser 権限を持つユーザーであれば、関連付けを削除できます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリおよび関連付けられた LDAP ディレクトリはオンラインである必要があります。

関連付けを削除する前に無効にすることをお勧めします。関連付けを削除すると、この関連付けに関するすべての移行トランザクションも削除されます。しかし、削除された関連付けのスナップショットは、明示的に削除しないかぎり残ります。

注意： 関連付けの一部である環境は削除できません。先に関連付けを削除してから環境を削除する必要があります。

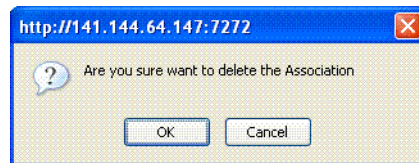
削除操作の際に、実行するアクションの確認を求められます。関連付けを削除すると、「Association List」ページに戻り、削除が正常に終了したことを通知する情報メッセージが表示されます。

関連付けを削除する手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager から、「Migration」タブを選択した後、「Associations」を選択します。
2. 「Association List」ページの「Select」列で、目的の関連付け名の横のオプションを選択して、「Delete」ボタンをクリックします。次に例を示します。



次に示すような、実行する内容の確認を求めるメッセージが表示されます。



3. 「OK」をクリックして削除を確認します（または「Cancel」をクリックして完了せずに操作を終了します）。
4. 「Association List」で、項目が削除されたことを示す情報メッセージを確認します。
5. 必要に応じて、次の説明に進んでください。
 - [ディレクトリ関連付けの設定の表示](#)
 - [ディレクトリ関連付けの作成](#)
 - [ディレクトリ関連付けの有効化 / 無効化](#)
 - [オプションの変換ルールの追加および管理](#)

オプションの変換ルールの追加および管理

第1章で説明されているように、論理オブジェクトの属性に変更を適用するために次のオプションがあります。

- 関連付けを作成すると、ここで示す手順に従って、移行操作中に適用されるオプションの変換ルールを作成できます。
- 移行操作中に、変換ルールが適用された後、3-38 ページの「データの移行」の説明に従って手動で属性をカスタマイズできます。
- 移行後、次のように属性値を変更できます。
 - 「Rollback Transaction」の「Customization」ページで変更します。詳細は、5-4 ページの「特定のトランザクション中に加えられた変更のロールバック」を参照してください。
 - ターゲットの Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 のデプロイで直接変更します。

変換ルールは、データの移行を開始する前に特定のディレクトリ関連付けに定義するルールです。移行操作のカスタマイズ・フェーズで、変換ルールは適用されます。各変換ルールは、既存の論理オブジェクトの属性値およびシステム固有の設定をルールの定義時に指定した値に変換します。「Customize」ページで、ルール適用前の状態 (Before Migration) とルール適用後の状態 (After Migration) の論理オブジェクトを確認できます。

たとえば、20 のパスワード・ポリシーを移行して、Number of login tries allowed 属性の値を 2 から 3 に変更する（またはホスト識別子を移行する際に Hostname バリエーションを変更する）とします。データの移行中に適用されこれらのアクティビティを実行する変換ルールを、データの移行前に作成できます。

HMUser 権限を持つユーザーであれば、変換ルールに関するタスクを実行できます。これらのタスクを実行する際は、Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリおよび関連付けられた LDAP ディレクトリはオンラインである必要があります。

オプションの変換ルールの定義を開始する前に、表 3-4 で説明されている前提条件のタスクが完了していることを確認します。

表 3-4 変換ルールの前提条件

確認	前提条件のタスク	参照先
	同じリリースのデプロイ内で 2 つ以上の LDAP ディレクトリについて環境の詳細を追加する。	3-7 ページの「 Configuration Manager への環境の詳細の追加 」
	1 つ以上のディレクトリ関連付けを作成し、変換ルールのソース環境とターゲット環境を指定する。	3-14 ページの「 ディレクトリ関連付けの作成 」

タスクの概要：変換ルールの追加および管理

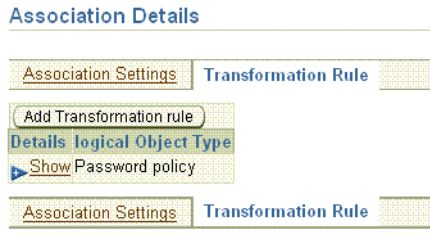
1. [変換ルールの表示](#)
2. [オプションの変換ルールの追加](#)
3. [変換ルールの変更](#)
4. [変換ルールの削除](#)

変換ルールの表示

ここで示す手順に従って、ディレクトリ関連付けの既存の変換ルールを表示します。HMUser 権限を持つユーザーであれば、このタスクを実行できます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリおよび関連付けられた LDAP ディレクトリはオンラインである必要があります。

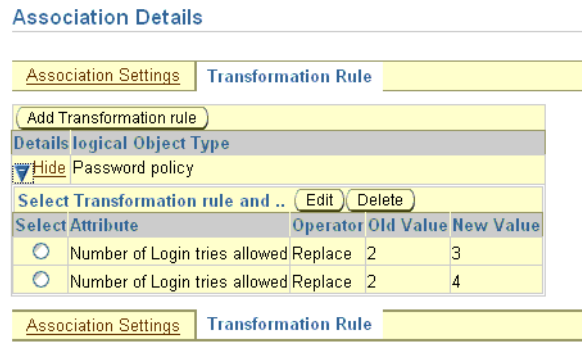
「Migrate」タブの「Associations」セカンダリ・タブを選択すると、「Association List」ページが表示されます。「Association Name」列で名前を選択して「Association Details」ページを表示したら、「Transformation Rules」サブタブをクリックします。図 3-8 に示すように、関連付けの既存の変換ルールの詳細が表に表示されます。最初は、「Transformation Rule」表には、変換ルールが存在するターゲットの論理オブジェクト・タイプのみ表示されます。ルールが存在しない場合は、「No Transformation Rules were found」というメッセージが表示されます。

図 3-8 「Transformation Rules」ページと表



目的の論理オブジェクト・タイプの横の「Show」矢印をクリックして詳細を開きます。
 図 3-9 に、属性、オペレータ、古い値、新規の値など、変換ルールについて表示される情報の種類を示します。「Edit」、「Delete」、「Add Transformation Rule」の各ボタンも使用できます。

図 3-9 「Edit」、「Delete」、「Add Transformation Rule」の各ボタンが表示されたルールの詳細



変換ルールを表示する手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager から、「Migration」タブを選択した後、「Associations」を選択します。
2. 「Association Name」列で、目的の名前をクリックします。次に例を示します。

1014QA-DEV

「Association Details」ページが表示されます。

3. 「Association Details」ページで、「Transformation Rule」サブタブをクリックします。次に例を示します。

Association Details

Association Settings Transformation Rule

4. 目的の論理オブジェクト・タイプの横の「Show」矢印をクリックして、対応するルールおよび属性を表示します。次に例を示します。

Details logical Object Type
 Show Password policy

5. 必要に応じて、次の説明に進んでください。

- オプションの変換ルールの追加
- 変換ルールの変更
- 変換ルールの削除

オプションの変換ルールの追加

ここで示す手順に従って、データの移行時にターゲットの属性値を自動的に変更するオプションの変換ルールをディレクトリ関連付けに対して追加します。HMUser 権限を持つユーザーであれば、このタスクを実行できます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリおよび関連付けられた LDAP ディレクトリはオンラインである必要があります。

変換ルールの表示のときと同じように、この操作を開始します。たとえば、既存の関連付けの名前を選択した後、「Transformation Rule」サブタブを選択します。目的の関連付けがリストに表示されない場合は、3-14 ページの「ディレクトリ関連付けの作成」の説明に従って形成されていることを確認します。

「Transformation Rule」サブタブの「Add Transformation Rule」ボタンをクリックします。「Add Transformation Rule」ページでは、最初はリストは空、フィールドは空白です。使用可能な属性は、選択した論理オブジェクト・タイプによって決まります。使用可能なオペレータは、選択した属性によって決まります。「Attribute」リストでは、システム固有の属性にはアスタリスク (*) が表示されます。

ルールを適用する論理オブジェクト・タイプおよび関連属性を選択します。次に、オペレータを選択します。終了するには、次の手順の説明に従って、古いパラメータ値と新規のパラメータ値を入力します。図 3-10 に、入力済の変換ルールの例を示します。

図 3-10 「Add Transformation Rule」 ページ

The screenshot shows the 'Add Transformation Rules' page. It contains the following fields and values:

- Logical Object Type: Password policy
- Attribute: Number of Login tries allowed
- Operator: Replace
- Old Value: 2
- New Value: 3

Buttons: Save, Cancel

変換ルールをディレクトリ関連付けに追加する手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager から、「Migration」タブを選択した後、「Associations」を選択します。
2. 「Association Name」列で、目的の名前をクリックします。次に例を示します。

1014QA-DEV

「Association Details」ページが表示されます。

3. 「Transformation Rules」サブタブをクリックします。「Transformation Rules」ページが「Add Transformation Rule」ボタンとともに表示されます。この関連付けに定義されたルールについて、論理オブジェクト・タイプが表に表示されます。この関連付けにルールが定義されていない場合、表は空です。
4. 「Add Transformation Rule」ボタンをクリックして、新規ルールを作成できるページを表示します。

「Add Transformation Rules」ページには、ルールの特定の要素を選択するリストおよびこのルールの特定のパラメータを入力するフィールドが表示されます。

5. 「Add Transformation Rules」 ページで、リストから値を選択してルールを定義します。次に例を示します。
 - **Logical Object Type:** リストから適切な論理オブジェクト・タイプを選択します。次に例を示します。
Password Policy
 - **Attribute:** リストから目的の属性を選択します。リストは、選択した論理オブジェクト・タイプによって変わります。次に例を示します。
Number of Login Tries Allowed
 - **Operator:** この属性およびルールについて適切なオペレータを選択します。次に例を示します。
Replace
 - **Old Value:** パラメータの古い値を入力します。次に例を示します。
2
 - **New Value:** パラメータの新規の値を入力します。次に例を示します。
3
6. 「Save」 ボタンをクリックして操作を完了します（または「Cancel」 をクリックしてこのルールを保存せずに終了します）。
「Association Details」 ページに、変換ルールが保存されたことを示すメッセージが表示されます。
7. 「Transformation Rule」 サブタブをクリックして、他の変換ルールの追加、あるいは変換ルールの変更または削除を行います。

変換ルールの変更

HMUser 権限を持つユーザーであれば、このタスクを実行できます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリおよび関連付けられた LDAP ディレクトリはオンラインである必要があります。

ここで示す手順に従って、関連付けの既存の変換ルールを編集します。たとえば、[図 3-11](#) に示すページを使用してこの手順に従って修正を行うことができます。

図 3-11 「Edit Transformation Rule」 ページ

Logical Object Type	Password policy
Attribute	Number of Login tries allowed
Operator	Replace
* Old Value	2
* New Value	3

Save Cancel

この手順は、変換ルールの作成と似ています。しかし、ルールを編集する場合、論理オブジェクト・タイプおよび属性は固定されており、変更できません。「Operator」 リスト、「Old Value」 フィールド、「New Value」 フィールドのみがアクティブで、現在の情報の変更に使えます。

変換ルールを編集する手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager から、「Migration」タブを選択した後、「Associations」を選択します。
2. 「Association Name」列で、目的の名前をクリックします。次に例を示します。

10140A-DEV

「Association Details」ページが表示されます。

3. 「Transformation Rules」サブタブをクリックして、「Transformation Rules」ページを表示します。
「Transformation Rules」ページでは、ルールが作成されている論理オブジェクト・タイプが表形式で表示されます。
4. 目的の論理オブジェクト・タイプの横の「Show」矢印をクリックして、このルールの詳細を表示します。
5. 編集する属性のオプションを選択します。次に例を示します。

Select Attribute	Operator	Old Value	New Value
 Number of Login tries allowed	Replace	2	3

6. 「Edit」ボタンをクリックして、このルールを編集できるページを表示します。
7. 3-20 ページの「オプションの変換ルールの追加」のガイドラインに従って、この変換ルールの詳細を変更します。
8. 「Save」をクリックしてこの変更を保存します（または「Cancel」をクリックして操作を終了します）。
9. この手順を繰り返して他の変換ルールを変更するか、必要に応じて次の説明に進んでください。
 - オプションの変換ルールの追加
 - 変換ルールの削除

変換ルールの削除

ここで示す手順に従って、関連付けから既存の変換ルールを削除します。HMUser 権限を持つユーザーであれば、このタスクを実行できます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリおよび関連付けられた LDAP ディレクトリはオンラインである必要があります。

削除操作は元に戻すことができません。ルールを削除する前に、実行するアクションの確認を求めるメッセージが表示されます。変換ルールが削除されると、操作が正常に終了したことを通知する情報メッセージが表示されます。削除された変換ルールをリストアすることはできません。かわりに再作成する必要があります。

変換ルールを削除する手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager から、「Migration」タブを選択した後、「Associations」を選択します。
2. 「Association Name」列で、目的の名前をクリックします。次に例を示します。

1014QA-DEV

「Association Details」ページには、現在の「Association Settings」サブタブおよび「Transformation Rules」サブタブが表示されます。

3. 「Association Details」ページで、「Transformation Rules」サブタブをクリックします。
4. 「Show」矢印をクリックして目的のルールを表示します。
5. 「Transformation Rules」ページで、削除する属性の横のオプションを選択します。次に例を示します。

Select	Attribute	Operator	Old Value	New Value
<input type="checkbox"/>	Number of Login tries allowed	Replace	2	3

6. 「Delete」ボタンをクリックして、このルールを削除します。
この操作の確認を求めるメッセージが表示されます。
7. メッセージ・ウィンドウの「OK」をクリックして確認します（または「Cancel」をクリックして完了せずに操作を終了します）。
8. 情報メッセージを確認し、ルールの表に項目が表示されていないことを確認します。
9. 必要に応じて繰り返し、他のルールを削除します。
10. データを移行する前に、次の説明に進んでください。
 - [スナップショットの作成および管理](#)
 - [ソースからターゲットへのデータの移行](#)

スナップショットの作成および管理

Oracle Access Manager Configuration Manager にはスナップショット機能があり、この機能を使用すると、選択した環境（Configuration Manager に定義された LDAP ディレクトリ）の oblix ツリー全体のバックアップ・コピーを作成できます。スナップショットをリストアして、ディレクトリに oblix ツリー全体をリストアできます。

スナップショットの作成は、ディレクトリのパフォーマンスにも Oracle Access Manager Configuration Manager のパフォーマンスにも大きな影響はありません。

スナップショットを作成する前に、表 3-5 で説明されている前提条件のタスクがすべて完了していることを確認します。

表 3-5 スナップショットの前提条件

確認	前提条件のタスク	参照先
	Configuration Manager で環境の詳細を追加する。	3-7 ページの「 Configuration Manager への環境の詳細の追加 」
	あらかじめスナップショット期間を管理者に通知する。	3-4 ページの「 他の管理者への通知 」
	該当の環境に Configuration Manager がアクセスできることを確認する。	3-11 ページの「 環境の接続のテスト 」

HMUser 権限を持つユーザーであれば、次の概要で説明されているタスクを実行できます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリおよび関連付けられた LDAP ディレクトリはオンラインである必要があります。

タスクの概要：スナップショットの作成および管理

1. [スナップショット・リストの表示](#)
2. [スナップショットの作成](#)
3. [スナップショットの削除](#)
4. [スナップショットの内容のリストア](#)

スナップショット・リストの表示

Oracle Access Manager Configuration Manager を使用して作成したスナップショットに関する情報の一部を表示できます。しかし、スナップショットの実際の内容を表示することはできません。HMUser 権限を持つユーザーであれば、このタスクを実行できます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリおよび環境は、オンラインである必要があります。

「SnapShots」タブの「Select Environment」リストから環境名を選択します。環境を選択するまで、表は空です。この環境のスナップショットが存在する場合は、[図 3-12](#)に示すように、その詳細が表形式で表示されます。表示できる詳細は、スナップショット名、オプションの説明、スナップショットが作成された日付、スナップショットを作成したユーザーです。この環境にスナップショットが存在しない場合、表は空です。

図 3-12 詳細が表示された「SnapShot List」ページ

ORACLE Access Manager 10g Configuration Manager

Logged in as DemoUser

SnapShot List

Select Environment: 10104DEV

Select SnapShot and.. (Delete) (Restore) (Create New)

Select	SnapShot Name	Description	Date Created	Created By
<input type="radio"/>	snapshot2	test	Fri Dec 15 02:41:23 GMT+05:30 2006	DemoUser
<input type="radio"/>	snapshot1	test	Wed Dec 13 20:51:40 GMT+05:30 2006	both
<input type="radio"/>	snapshot2	test	Wed Dec 13 20:52:20 GMT+05:30 2006	both

© Oracle Corp. 2006

SnapShots | Migration | Transactions | Logout

次の手順に従ってスナップショットの詳細を表示できます。しかし、スナップショットの内容を表示することはできません。

スナップショットの詳細を表示する手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager で、「SnapShots」タブを選択します。

「SnapShots List」ページが表示されます。ここで、環境を選択するか、新しいスナップショットを作成することができます。

2. 「Select Environments」リストから、環境を選択します。次に例を示します。

SnapShot List

Select Environment: 10104QA

選択した環境にスナップショットが存在する場合は、その詳細が表形式で表示されます。存在しない場合は、項目が見つからなかったことを通知するメッセージが表に表示されます。

3. 必要に応じて、次の説明に進んでください。
 - [スナップショットの作成](#)
 - [スナップショットの削除](#)
 - [スナップショットの内容のリストア](#)

スナップショットの作成

次の手順に従って、既存の環境のスナップショットを作成します。HMUser 権限を持つユーザーであれば、このタスクを実行できます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリおよび環境は、オンラインである必要があります。

スナップショットは、Oracle Access Manager Configuration Manager でのみ使用できます。Configuration Manager を使用して構成データを移行する場合は、データの移行直前にターゲットのスナップショットを作成することをお勧めします。Configuration Manager を使用して構成データを LDIF ファイルにエクスポートする場合は、LDIF ファイルをインポートする直前にターゲットのスナップショットを作成することをお勧めします。

スナップショット・プロセス時に、LDAP ディレクトリや Configuration Manager のパフォーマンスには大きな影響はありません。スナップショット・プロセスの時間は、選択した環境の oblix ツリーの構成データの量によって異なります。

注意： この操作の期間をスケジュールし、開始前に他の管理者に通知することをお勧めします。詳細は、3-4 ページの「他の管理者への通知」を参照してください。

「Snapshots」タブのリストから環境を選択した後、「Create New」ボタンをクリックして「Add SnapShot」ページを表示します。表示されたフィールドに、スナップショット名およびオプションの説明を入力します。

スナップショットの名前を付けたり説明を追加する際には、英数字の大 / 小文字の組合せの他、空白文字と句読点を使用できます。次に、「Select Environment」リストから、環境を選択します。図 3-13 に、入力済の「Add SnapShot」ページを示します。

図 3-13 「Add SnapShot」ページ

The screenshot shows the Oracle Access Manager Configuration Manager interface. The top navigation bar includes 'Snapshots', 'Migration', and 'Transaction' tabs. The main heading is 'Add SnapShot'. The form contains the following fields:

- SnapShot Name:** 10104QA - Dec 14
- Description:** Before Migrating Manager Workl
- Select Environment:** 10104QA

There are 'Cancel' buttons on the right side of the form, and a 'Save' button is partially visible at the bottom right.

「Save」ボタンをクリックすると、スナップショットが作成されます。プロセスが完了すると、操作が正常に終了したことを示す情報メッセージが表示されます。新しいスナップショットの名前および詳細が「SnapShot List」ページの表に表示されます。スナップショットの実際の内容は表示できません。

スナップショットを作成する手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager で、「SnapShots」タブを選択します。
2. 「Select Environments」リストから、環境を選択します。次に例を示します。



3. 「Create New」ボタンをクリックして、「Add SnapShot」ページを表示します。
4. 次のように、「Add SnapShot」ページに環境に合った情報を入力します。
 - **SnapShot Name:** リストでこのスナップショットを識別する一意の名前を入力します。次に例を示します。
10104QA - Dec 14
 - **Description:** リストで他のスナップショットとさらに区別するためのオプションの説明を入力します。次に例を示します。
Before migrating Manager Workflow
 - **Select Environment:** リストからスナップショットを取得する特定のディレクトリを選択します。次に例を示します。
10104QA
5. 「Save」をクリックしてこの情報を割り当て、スナップショットを作成します（あるいは「Cancel」をクリックしてスナップショットを作成せずに操作を終了します）。

操作が完了すると、「SnapShot List」ページに戻り、スナップショットが保存されたことを示すメッセージが表示されます。
6. メッセージおよび表を確認して、スナップショットが後でリストアする場合に使用可能であることを確認します。
 - **スナップショットの作成が成功した場合:** 移行を進めます。
 - **スナップショットの作成が失敗した場合:** エラー・メッセージが表示された場合は、環境およびリポジトリへの接続をテストし、これらが動作しオンラインであることを確認します。

スナップショットの削除

次の手順に従って、スナップショットを削除できます。HMUser 権限を持つユーザーであれば、このタスクを実行できます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリおよび関連付けられた LDAP ディレクトリはオンラインである必要があります。

注意：スナップショットが削除されると、そのスナップショットは Configuration Manager でのリストア操作に使用できません。

スナップショットの削除は、元に戻すことができません。この手順では、スナップショットの削除の確認を求めるメッセージが表示されます。確認すると、操作は完了して「SnapShots List」ページに戻ります。スナップショットが削除されたことを通知する情報メッセージが表示され、関連の詳細は表から削除されます。

スナップショットを削除する手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager で、「SnapShots」タブを選択します。
2. 「Select Environments」リストから、環境を選択します。次に例を示します。



3. 「Select」列で、削除するスナップショットの名前の横のオプションをクリックします。次に例を示します。



4. 「Delete」ボタンをクリックします。
スナップショットの削除の確認を求めるメッセージが表示されます。
5. メッセージ・ウィンドウの「OK」をクリックして、スナップショットの削除を確認します（あるいは「Cancel」をクリックして操作を終了します）。
6. 「SnapShots List」で、情報メッセージを確認し、選択した項目が削除されたことを確認します。

スナップショットの内容のリストア

Oracle Access Manager Configuration Manager の外部で行った変更の結果、環境の oblix ツリーの構成データに一貫性がなくなるか、構成データが破損した場合に、スナップショットをリストアすることがあります。HMUser 権限を持つユーザーであれば、このタスクを実行できます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリおよび該当の環境は、オンラインである必要があります。

Oracle Access Manager Configuration Manager を使用して作成したスナップショットをリストアすると、oblix ツリー全体がディレクトリにリストアされます。取り消される変更には、Configuration Manager を使用して行われた移行の変更の他、Configuration Manager 以外で行われた変更も含まれます。

注意： スナップショットをリストアすると、スナップショットの取得後に行われた変更はすべて元に戻り、ディレクトリはスナップショットが作成された時点の状態に戻ります。

リストアを開始する前に、選択したスナップショットのリストアの確認を求めるメッセージが表示されます。確認すると、現在の状態のディレクトリを取得するために新しいスナップショットが作成された後、選択した以前のスナップショットがリストアされます。リストアで元に戻った変更が多すぎる場合は、リストア中に作成したスナップショットをリストアできません。

注意： Oracle Access Manager Configuration Manager 以外のアプリケーションを使用してディレクトリのバックアップを作成した場合は、Configuration Manager を使用してバックアップをリストアできません。

スナップショットの内容をリストアする手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager で、「SnapShots」タブを選択します。
2. 「Select Environments」リストから、環境を選択します。次に例を示します。



3. 「Select」列で、リストアするスナップショット名の横のオプションをクリックします。次に例を示します。



4. 「Restore」ボタンをクリックします。

oblix 環境のツリーを以前の状態に戻すリストア操作の実行の確認を求めるメッセージが表示されます。

5. 「OK」をクリックしてリストアを完了します（または「Cancel」をクリックして操作を終了します）。

操作を確認すると、現在の状態の環境から新しいスナップショットが作成された後、選択したスナップショットの内容がリストアされます。

6. 「SnapShots List」で、正常に終了したことを示す情報メッセージを確認します。新しいスナップショットの詳細が表に表示されます。

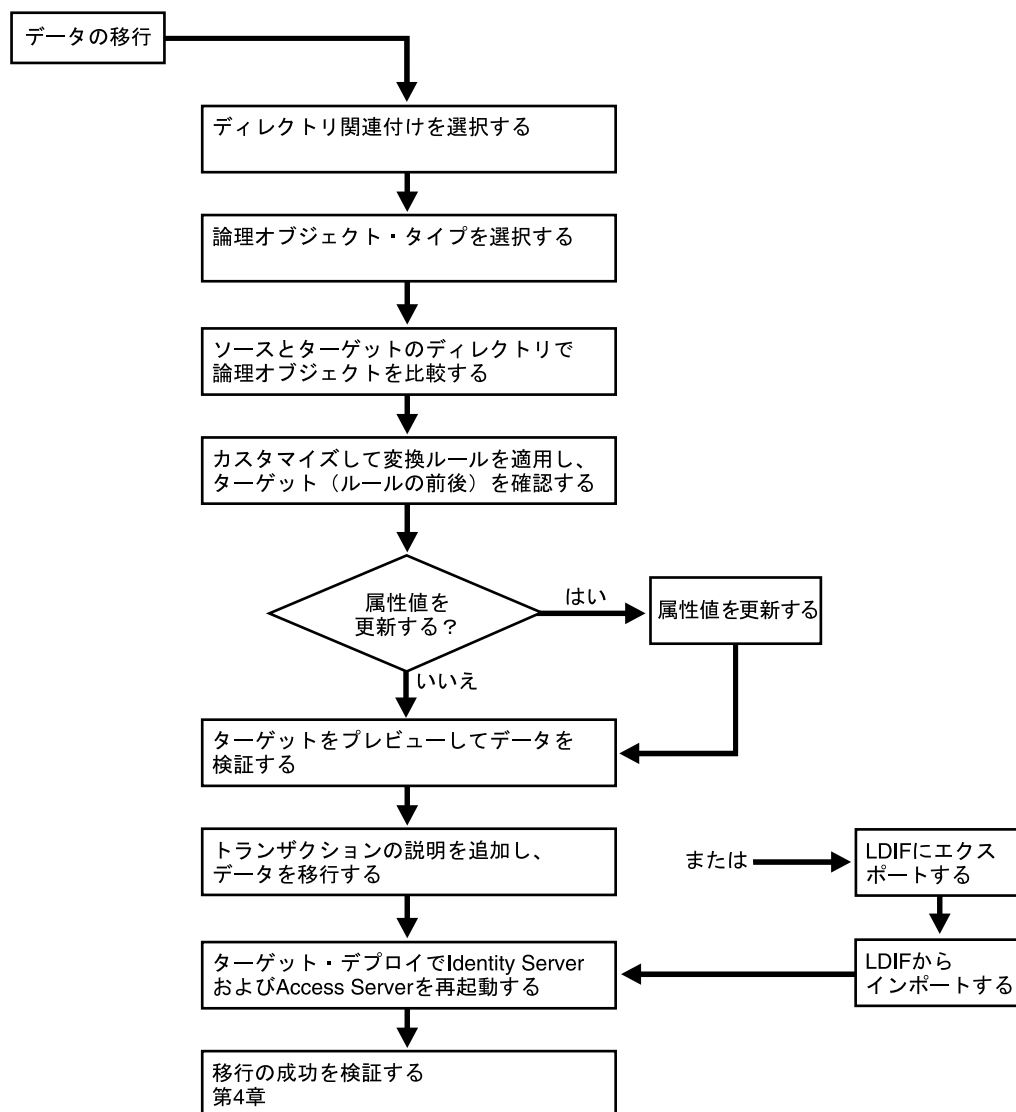
ソースからターゲットへのデータの移行

ここでは、移行プロセスおよび実行するすべてのアクティビティを含め、移行の概要について説明します。概要に続いてその手順を示します。HMUser 権限を持つユーザーであれば、このタスクを実行できます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポトリおよび関連付けられたLDAPディレクトリは、すべての移行アクティビティにおいてオンラインである必要があります。

注意： 移行期間をスケジュールし、データの移行前に管理者に通知することをお勧めします。詳細は、3-4 ページの「他の管理者への通知」を参照してください。

図 3-14 に、移行のプロセスおよび Configuration Manager を使用して実行するタスクを示します。図に続いて追加情報を示します。

図 3-14 移行タスクの手順



次のタスクの概要では、3-38 ページの表 3-6 で説明されている前提条件のタスクをすべて完了していることを前提にしています。

タスクの概要: 「Migration」タブおよび「Migrate」サブタブを選択した後のデータの移行

1. ディレクトリ関連付けを選択して移行パスを指定: 必ず実行します。3-32 ページの「[関連付けの選択の概要](#)」を参照してください。
2. 論理オブジェクト (論理オブジェクト・タイプ) を選択: 必ず実行します。3-32 ページの「[移行する論理オブジェクトの選択の概要](#)」を参照してください。
3. ナビゲーション・ツリーで選択した論理オブジェクトを比較:
 - ソースおよびターゲットの差異を確認します。
 - 選択して移行できる関連オブジェクトと自動的に移行される依存を確認します。詳細は、3-33 ページの「[移行前のデータの比較の概要](#)」を参照してください。
4. 選択した論理オブジェクトをカスタマイズ:
 - **自動化:** この関連付けに定義されたオプションの変換ルールを自動的に適用します。詳細は、3-17 ページの「[オプションの変換ルールの追加および管理](#)」を参照してください。
 - **オプション:** 論理オブジェクトの属性を手動編集して、移行中にターゲットに適用する新しい値を割り当てます。詳細は、3-35 ページの「[ターゲットのカスタマイズの概要](#)」を参照してください。
5. ターゲット・システムをプレビューして、選択した論理オブジェクトの現在の状態と移行が完了したときの状態を確認します。詳細は、3-36 ページの「[移行前のプレビューの概要](#)」を参照してください。
6. 自動的に作成されるこの移行のレコードを識別するための一意のトランザクションの説明を入力した後、データを移行します。詳細は、3-38 ページの「[データの移行](#)」を参照してください。

別の方法: データを LDIF ファイルにエクスポートした後、データをオフラインでインポートします (外部ツールを使用してデータをインポートします)。詳細は、3-37 ページの「[LDIF ファイルへのデータのエクスポートの概要 \(オプション\)](#)」を参照してください。

7. ターゲット環境ですべての Identity Server および Access Server を再起動します。詳細は、3-42 ページの「[移行後のサーバーの再起動](#)」を参照してください。

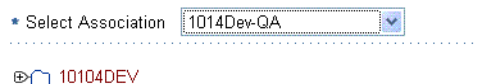
注意: Oracle Access Manager Configuration Manager を使用してリリース 7.0.4 環境からリリース 10g (10.1.4.0.1) 環境、またはその逆にデータを移行することはできません。詳細は、1-16 ページの「[デプロイのサポートと相互運用性](#)」を参照してください。

関連付けの選択の概要

移行時に使用する LDAP ディレクトリ環境は、オンラインであり Configuration Manager からアクセスできる必要があります。

データの移行は、「Migration」タブを選択した後、「Migrate」セカンダリ・タブを選択して開始します。「Select Logical Objects to Compare」ページが表示されます。ページ上部に進捗インジケータが表示され、「Select」がハイライト表示されます。ここで、関連付けを選択してソース環境からターゲット環境への移行パスを指定する必要があります。

図 3-15 「Select Logical Objects to Compare」ページでの関連付け名



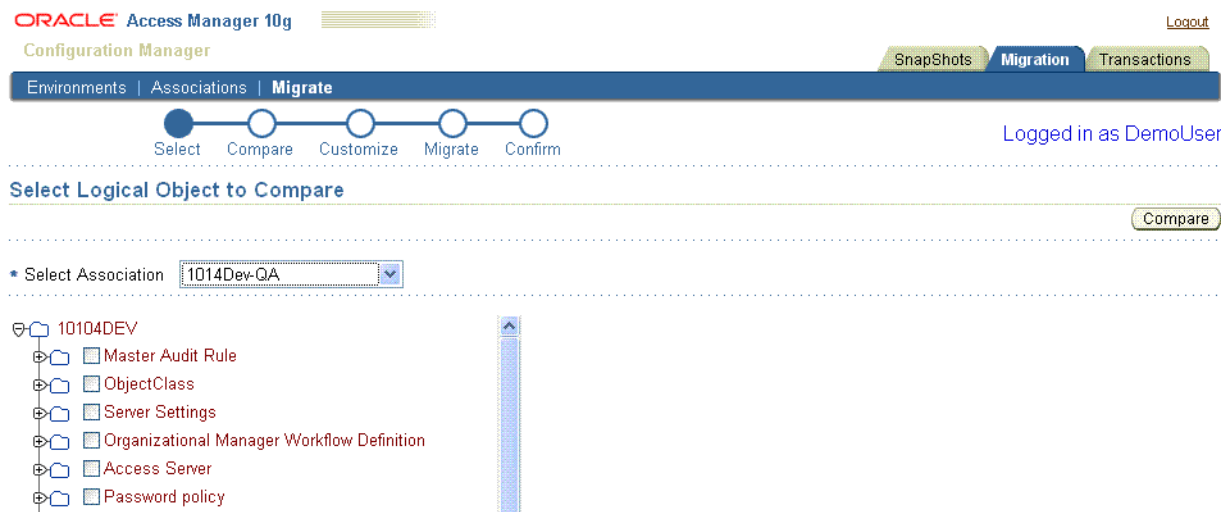
次の項の説明に従って論理オブジェクト・タイプを選択する準備ができました。

移行する論理オブジェクトの選択の概要

関連付けを選択すると、ソース環境を表すフォルダが表示されます。アイコンの左側にある展開アイコンをクリックすると、ソースの論理オブジェクト・タイプを表示できます。リストの縦スクロールバーを使用すると、必要に応じて上下にスクロールできます。

フォルダの横の展開アイコンをクリックすると、図 3-16 に示すように、その環境でサポートされる論理オブジェクト・タイプがすべて表示されます。各論理オブジェクト・タイプの横のチェック・ボックスを使用すると、比較する項目を選択（または選択解除）できます。デフォルトは選択されません。

図 3-16 論理オブジェクト・タイプ・リストの一部



各論理オブジェクト・フォルダには、展開アイコンがあります。論理オブジェクト・タイプを開くと、そのタイプに属する論理オブジェクトを表示できます。論理オブジェクト・タイプ（または論理オブジェクト）は、必要な数だけ選択できます。

- 特定のタイプのすべての論理オブジェクトを比較するには、論理オブジェクト・タイプの横のチェック・ボックスを選択します。
- タイプを開いて論理オブジェクトを表示するには、フォルダの横の展開アイコンをクリックします。

論理オブジェクト・タイプ（または論理オブジェクト）を選択したら、次の項の説明に従って、選択した論理オブジェクト・タイプを比較します。

移行前のデータの比較の概要

一度にソースとターゲットの論理オブジェクトの差異を表示して比較することができます。

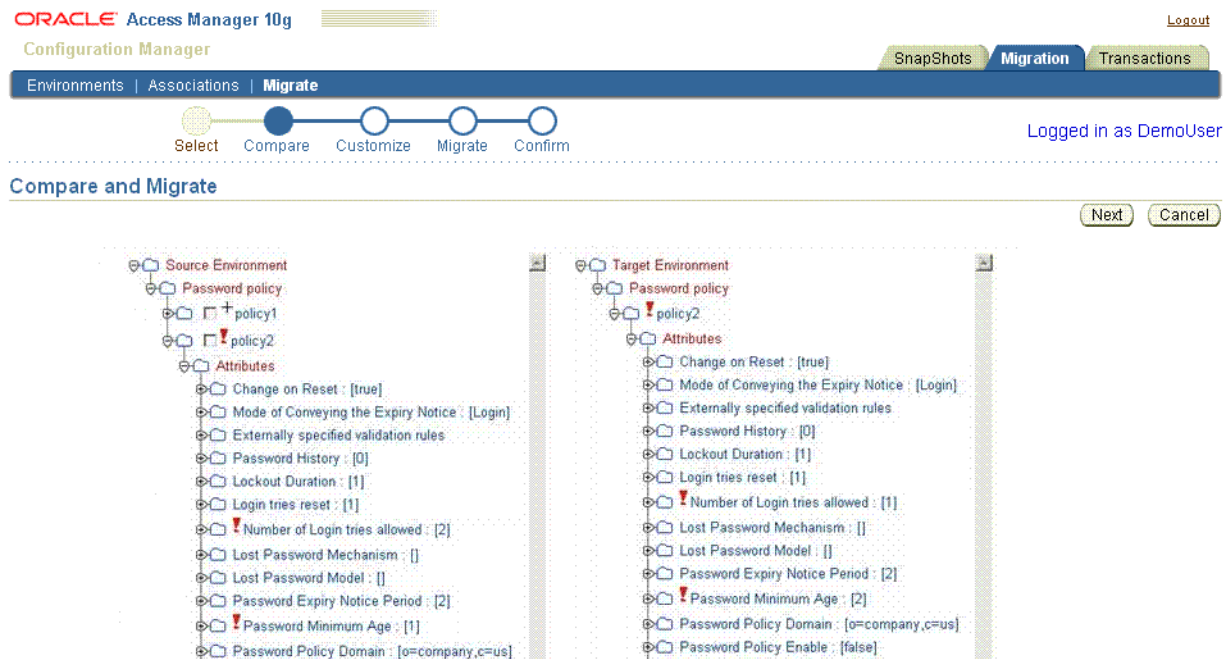
「Select Logical Object Types to Compare」ページで項目を選択して「Compare」ボタンをクリックすると、「Compare and Migrate」ページが表示されます。ソースとターゲットの両方の環境が表示されます。進捗インジケータの「Compare」がハイライト表示されます。ページとブラウザ・ウィンドウの両方で、スクロールバーを使用できます。

「Source Environment」または「Target Environment」のどちらかのタイトルをクリックすると、両方の環境の詳細がナビゲーション・ツリーに展開されます。展開される情報は、選択した論理オブジェクト・タイプ（または論理オブジェクト）に基づいています。

比較するオブジェクトの展開: 最初は、ソース環境とターゲット環境のフォルダは閉じています。フォルダの左側のアイコンをクリックして、オブジェクトのナビゲーション・ツリーを開いたり閉じたりします。

一方のビューでオブジェクトを開くと、両方のビューのオブジェクトが開きます。展開されたオブジェクトには、属性、関連オブジェクトおよび依存が表示されます。関連オブジェクトおよび依存の詳細は、1-7 ページの「物理エントリと論理オブジェクト」を参照してください。
 図 3-17 に、「Compare and Migrate」ページのサンプルを示します。

図 3-17 「Compare and Migrate」 ページの一部



差異のみの表示: 論理オブジェクト・タイプを選択しても特定の論理オブジェクトを選択しても、「Compare and Migrate」ページにはソースとターゲット間の差異のみが表示されます。たとえば、5つのワークフロー WF1、WF2、WF3、WF4 および WF5 がソース環境にあり、次の状態を想定するとします。

- 「Description」属性が異なる WF1 がターゲットにも存在する。
- WF2 および WF3 はターゲット環境に存在しない。
- WF4 および WF5 はソース環境とターゲット環境で同一である。

論理オブジェクト・タイプの「User Manager Workflow Definition」のみを選択した場合、「Compare and Migrate」ページには、「Description」属性が異なるために WF1 と、ターゲットに存在しないために WF2 および WF3 が表示されます。

しかし、論理オブジェクト WF1、WF2、WF4 を選択した場合、「Compare and Migrate」ページには、属性値が異なるために WF1 と、この時点ではターゲットに存在しないために WF2 が表示されます。一方、WF4 はソースとターゲットの両方の環境で同一であるため表示されません。

移行するオブジェクトの比較時の記号による差異のハイライト表示: 図 3-17 に示すように、オブジェクト名とチェック・ボックスの間に次の記号が表示され、差異に対する注意を喚起します。次に例を示します。

- **+**: 追加アイコンは、オブジェクトが一方のディレクトリに存在し、両方には存在しない場合にのみ表示されます。
 - 「Source Environment」リストの+ (追加アイコン) は、オブジェクトがソース・ディレクトリには存在し、ターゲット・ディレクトリには存在しないことを示します。
 - 「Target Environment」リストの+ (追加アイコン) は、オブジェクトがターゲット・ディレクトリには存在し、ソース・ディレクトリには存在しないことを示します。
- **!**: 差異アイコン (!) は、論理オブジェクトの属性値または依存、あるいはその両方が異なる場合に表示されます。

図 3-17 の例では、次の差異を（特に）示しています。

- Policy1 (追加アイコン+が表示) : ソースにしか存在しません。
- Policy2 (差異アイコン!が表示) : ソースとターゲットで同一の論理オブジェクトですが、Number of Login tries Allowed 属性および Password Minimum Age 属性の値がソースとターゲットで異なります。

データを比較する手順は、3-38 ページの「データの移行」で説明されている手順に含まれます。

カスタマイズおよび移行するオブジェクトの選択: ソースとターゲット間の差異を比較したら、ソース・ツリーで移行するオブジェクトの横のチェック・ボックスを選択します。ソースで目的のオブジェクトをすべて選択したら、「Next」ボタンをクリックして「Customize」ページを表示します。「Cancel」をクリックすると、「Select Logical Objects to Compare」ページに戻ります。

次の項の説明に従って、移行前にターゲットのデータをカスタマイズします。

ターゲットのカスタマイズの概要

オプションの変換ルールを作成するか、移行中に属性を手動でカスタマイズして、属性値の差異を解決できます。

「Compare and Migrate」ページで論理オブジェクトを選択して「Next」をクリックすると、関連付けに定義した変換ルールが自動的に適用されます。「Customize」ページが表示され、該当する場合は変換ルールの適用によりターゲットのオブジェクトがどのようにカスタマイズされたかが表示されます。進捗インジケータの「Customize」がハイライト表示されます。

最初は、2つの環境のタイトルのみが表示されます。どちらかの環境を開くと、両方の環境の詳細がナビゲーション・ツリーで表示されます。

- **Target Environment - Before Migration:** 変換ルールおよび手動のカスタマイズが適用される前の、ターゲット LDAP ディレクトリにおける論理オブジェクトの最新の正確な状態。
- **Target Environment - After Migration:** 変換ルール、手動のカスタマイズおよび移行が完了した後の状態の、ターゲットにおける論理オブジェクトの状態。

図 3-18 に、「Customize」ページのサンプルを示します。この例では、オブジェクトが展開されていて、属性および依存の差異が表示されています。つまり、追加アイコン (+) および差異アイコン (!) が移行前と移行後のターゲット間の差異を示しています。

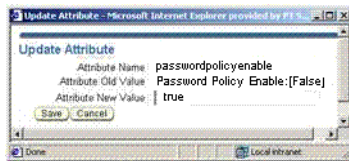
図 3-18 部分的な「Customize」ページ

「Cancel」ボタンをクリックすると、カスタマイズ操作は終了して「Select Logical Object Types to Compare」ページに戻ります。

手動による属性のカスタマイズ: 「Target Environment - After Migration」ツリーの属性には、2つのドット (..) でラベル表示された更新ボタンがあります。更新ボタンをクリックすると、Update Attribute ウィンドウが開き、新しい値を属性に手動で割り当てることができます。新しい値は、データの移行時に割り当てられます。あるいは、Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 のデプロイ内で、移行後に属性をカスタマイズすることもできます。

たとえば、両方のビューで Password Policy Enable が (False) だとします。この属性の値を手動でカスタマイズするには、Password Policy Enable (False) の横の (..) ボタンをクリックします。Update Attribute ウィンドウで、新しい値 (この場合は true) を入力して保存します。図 3-19 に、Update Attribute ウィンドウの例を示します。

図 3-19 Update Attribute ウィンドウ



「Save」をクリックすると「Customize」ページに戻り、「Target Environment - After Migration」ツリーに新しい値が反映されています。更新を取り消した場合は、属性への変更が行われずに「Customize」ページに戻ります。

属性のカスタマイズを終了して「Next」ボタンをクリックすると、次の項で説明されているように「Preview」ページが表示されます。

移行前のプレビューの概要

最後に「Preview」ページで、カスタマイズを評価し、移行される論理オブジェクトを確認できます。進捗インジケータの「Migrate」がハイライト表示されます。

他のページと同様に、「Preview」ページのアイコンを開きます。差異アイコン!は、移行前後のターゲットで属性の値に差異が確認される場合のみ表示されます。

「Migrate」ボタンをクリックする前に、次の項の説明に従って、一意のトランザクションの説明を入力する必要があります。

「Back」ボタンをクリックすると、「Customize」ページに戻ります。「Cancel」ボタンをクリックすると、何も選択されていない最初の「Select Logical Objects to Compare」ページに戻ります。

トランザクションおよびデータの移行の概要

「Migrate」 ボタンをクリックする前に、一意のトランザクションの説明を「Preview」 ページの下部に表示されるフィールドに入力することをお勧めします。データの移行時に、一意の数値のトランザクション ID が自動的に割り当てられます。一意の説明は、後で他のトランザクションと区別するのに役立ちます。第 5 章の説明に従って、トランザクション・レコードを使用すると、この移行中に行われた変更をロールバックできます。

「Migrate」 ボタンをクリックすると、データの移行が開始されます。移行が完了すると、操作が正常に終了したことを示す情報メッセージが表示されます。データの移行が完了するまでの時間の詳細は、1-15 ページの「停止時間の評価および例」を参照してください。

注意：かわりに、次の項の説明に従って、データを LDIF ファイルにエクスポートすることもできます。

データを移行したら、3-42 ページの「移行後のサーバーの再起動」の説明に従って、ターゲット・デプロイですべての Identity Server および Access Server を再起動する必要があります。

LDIF ファイルへのデータのエクスポートの概要（オプション）

Oracle Access Manager Configuration Manager では、データを自動的に移行するかわりに、データを LDIF ファイルにエクスポートできます。データを LDIF ファイルにエクスポートすると、必要に応じて、テキスト・エディタを使用して LDIF ファイルをオフラインで編集した後、外部ツールを使用してその LDIF ファイルをオフラインでインポートできます。

エクスポート方法では、Oracle Access Manager Configuration Manager を使用して関連付けを選択し、ソースの論理オブジェクト・タイプを選択してソースとターゲットで選択したオブジェクトを比較します。また、変換ルールを適用した後の変更をプレビューし、選択した場合は Configuration Manager を使用して手動でデータをカスタマイズします。トランザクションの説明を指定して Configuration Manager でデータを移行するかわりに、選択内容を LDIF ファイルにエクスポートします。

LDIF ファイルにデータをエクスポートしたら、後でそのファイルをオフラインでインポートします。この場合、実際の移行は単独で発生するため、トランザクション・レコードは作成されません。トランザクション・レコードなしで、Oracle Access Manager Configuration Manager を使用して変更をロールバックすることはできません。

データを LDIF ファイルにエクスポートする手順は、次の「データの移行」で示す手順に含まれます。この場合、外部ツールを使用して LDIF ファイルをインポートする直前にターゲット・ディレクトリのスナップショットを作成することをお勧めします。

注意： LDIF ファイルのインポートの詳細は、このマニュアルの範囲外です。

LDIF ファイルにデータをエクスポートしても、Configuration Manager を使用してデータを自動的に移行しても、ターゲット・デプロイですべての Identity Server および Access Server を再起動する必要があります。詳細は、3-42 ページの「移行後のサーバーの再起動」を参照してください。

データの移行

HMUser 権限を持つユーザーであれば、データの移行を実行できます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリおよび関連付けられた LDAP ディレクトリはオンラインである必要があります。この項で示す手順に従ってデータを移行する前に、表 3-6 で説明されている前提条件のタスクをすべて完了していることを確認します。

表 3-6 移行の前提条件

確認	前提条件のタスク	参照先
	あらかじめ移行期間を管理者に通知する（また移行後にフォローアップする）。	3-4 ページの「他の管理者への通知」
	1 つ以上のディレクトリ関連付けを作成し、移行のソースとターゲットを指定する。	3-14 ページの「ディレクトリ関連付けの作成」
	関連付けに対して（オプションの）変換ルールを追加する。	3-20 ページの「オプションの変換ルールの追加」
	ターゲット・ディレクトリの現在の状態のスナップショットを作成する。	3-26 ページの「スナップショットの作成」

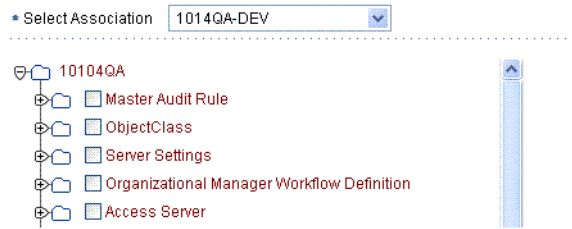
ソースからターゲットへデータを移行する手順

1. **環境のテスト**: 次のアクティビティを実行して、関連付けのソース環境とターゲット環境に Configuration Manager がアクセスできることを確認します。
 - a. Oracle Access Manager Configuration Manager から、「Migration」タブを選択した後、「Environments」を選択します。
 - b. 詳細を表示するソース環境名をクリックします。次に例を示します。

10104DEV
 - c. 「View Environment」ページで、「Test Environment」ボタンをクリックします。
 - d. 情報メッセージを読み、環境の接続が成功したことを確認します。
 接続に問題がある場合は、ディレクトリ管理者に連絡します。移行時、ディレクトリは動作しオンラインである必要があります。
 - e. ターゲット環境でこれらのアクティビティを繰り返し、環境が動作しオンラインであることを確認します。
2. Oracle Access Manager Configuration Manager から、「Migration」タブを選択した後、「Migrate」を選択します。
3. 「Select Association」リストから、目的の関連付けを選択します。次に例を示します。

* Select Association

4. 次の手順を実行して、比較および移行する論理オブジェクトを選択します。
- 関連付けのアイコンを開き、サポートされる論理オブジェクト・タイプの一覧を表示します。次に例を示します。



- この移行の対象とするすべての論理オブジェクト・タイプを選択します。



5. **比較:** 次の手順を実行して、ソースとターゲットのディレクトリで選択した論理オブジェクト・タイプの差異を比較し、依存を表示します。

- 「Compare」ボタンをクリックして「Compare and Migrate」ページを表示します。
「Compare and Migrate」ページが表示されます。
- 差異の表示:** 「Compare and Migrate」ページで、次の手順を実行して差異を確認します。

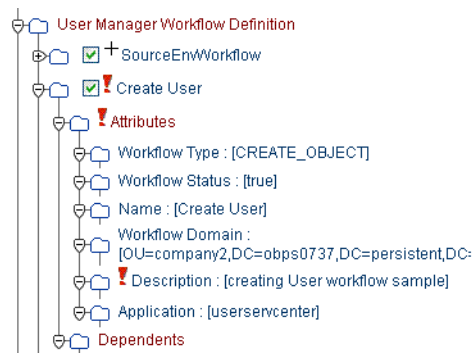
- フォルダの横の展開アイコンをクリックしてオブジェクトを開きます。
- 追加アイコン +: 追加アイコンがターゲットのみなのか、ソースのみなのかを確認します。
- 差異アイコン !: 差異アイコン! が指定された（属性値または依存が異なる）オブジェクトを確認します。

- 依存の表示:** 次のアクティビティを実行して論理オブジェクトの依存を表示します。

- 論理オブジェクトの横の展開アイコンをクリックして開きます。
- 依存および属性のリストを探して開きます。

依存は自動的に移行されます。これらを単独で選択する方法はありません。しかし、移行する論理オブジェクトおよび関連論理オブジェクトは選択する必要があります。

- 移行用の論理オブジェクトおよび関連オブジェクトの選択:** ソースで、選択する各アイテムの横のボックスを選択します（または選択済ボックスを選択して解除します）。



- e. 「Compare and Migrate」 ページで、「Next」 ボタンをクリックして「Customize」 ページを表示します。

論理オブジェクトの比較の詳細は、3-33 ページの「[移行前のデータの比較の概要](#)」を参照してください。

「Next」 ボタンをクリックすると、この関連付けに作成された変換ルールが自動的に適用されます。「Customize」 ページが表示されます。ページの本体は、「Target Environment - Before Migration」と「Target Environment - After Migration」の2つに分かれています。

6. **カスタマイズ:** 「Customize」 ページで、次のアクティビティを実行します。
- 「Target Environment - After Migration」の詳細を確認して、変換ルールの適用によりオブジェクトがどのように変更されるかを確認します。
 - 「Target Environment - After Migration」と「Target Environment - Before Migration」間の差異を確認して記録します。属性の更新が必要な場合があるため、差異アイコン (!) が表示された項目に注意します。

- c. 環境に応じて次に進みます。

- **移行前に属性を更新する場合:** このオプションのアクティビティを実行する場合は、手順7に進みます。
- **データをプレビューする場合:** 移行前に情報をすべて確認する場合は手順8に進みます。
- **移行を取り消す場合:** 「Cancel」 ボタンをクリックして、「Select Logical Objects to Compare」 ページに戻ります。

詳細は、3-35 ページの「[ターゲットのカスタマイズの概要](#)」を参照してください。

7. **属性の更新:** 「Customize」 ページから、必要に応じて次のオプションのアクティビティを実行します。「Target Environment - After Migration」 リストでオブジェクトを開いたら、次のようにします。
- ブラウザ・ウィンドウで、このサイトのポップアップを有効にします。
 - 変更する属性の横の更新ボタン (...) をクリックして、Update Attributes ウィンドウを開きます。次に例を示します。



- Update Attributes ウィンドウで、新しい値を追加して「Save」をクリックします。次に例を示します。
 - **Attribute Name:** 現在の属性名は固定で、変更できません。
 - **Attribute Old Value:** 現在の属性値は固定されています。
 - **Attribute New Value:** 3-35 ページの「[ターゲットのカスタマイズの概要](#)」を参考にして、割り当てる新しい属性値を入力します。
 - **Save:** 「Save」 ボタンをクリックして更新した属性値を保存し、「Customization」 ページに戻ります。
 - 必要に応じて、「Target Environment - After Migration」 リストで変更する属性ごとに繰り返します。
- 「Customize」 ページを終了するには、「Next」 ボタンをクリックして「Preview」 ページを表示します。

8. **ターゲットのプレビュー**：「Preview」ページで、アイコンを開き、すべての情報が移行対象であることを確認した後、実際の移行に応じて進みます。次に例を示します。
 - **LDIF ファイルにデータをエクスポートする場合**：外部ツールを使用してカスタマイズまたはインポートするために LDIF ファイルにデータをエクスポートする場合は、手順 9 に進みます。この場合、トランザクション・レコードは作成されません。
 - **すぐにデータを移行する場合**：手順 10 にスキップして、トランザクションの説明を割り当てた後、後続の手順を続行します。
 - **移行を取り消す場合**：「Cancel」ボタンをクリックして、「Select Logical Objects to Compare」ページに戻ります。
9. **LDIF ファイルへのエクスポート（オプション）**：選択した論理オブジェクトを（後でオフラインでインポートする）LDIF ファイルにエクスポートする場合にのみ、次の手順に従います。
 - a. 「Export to LDIF」ボタンをクリックします。
 - b. Open MigrationData ウィンドウで、「Open with Notepad (default)」をクリックします。
 - c. メモ帳ウィンドウで、エクスポートするデータを確認および編集した後、ファイルを保存します。
 - d. 名前を付けて保存ウィンドウで、このファイルの保存先ディレクトリを指定し、拡張子 .ldif を付けたファイル名を入力して「保存」をクリックします。次に例を示します。

MigrationData_12_16.ldif

指定した場所にファイルが作成されます。トランザクション・レコードは作成されません。詳細は、3-37 ページの「[LDIF ファイルへのデータのエクスポートの概要（オプション）](#)」を参照してください。
 - e. 外部ツールを使用して LDIF ファイルをインポートする前に、ターゲット・ディレクトリのスナップショットを作成します。

LDIF ファイルを使用してデータを移行するための外部ツールの使用は、このマニュアルの範囲外です。
10. **トランザクションの説明の割当て（必須）**：「Preview」ページ下部の「Transaction Description」フィールドで、次のようにします。
 - a. 後でこのトランザクションのレコードを認識しやすくする一意の名前を入力します。次に例を示します。

10104DevQA_12_14
 - b. 「Save」をクリックします。

11. データの移行: 「Preview」 ページで 「Migrate」 ボタンをクリックします。

一意のトランザクション ID が割り当てられ、移行操作が完了します。移行の実行にかかる時間には、複数の要因があります。詳細は、1-15 ページの「[停止時間の評価および例](#)」を参照してください。

次に示すような、移行が完了したことを示す情報メッセージが表示されます。トランザクションの ID および説明も表示されます。

The screenshot shows the Oracle Access Manager Configuration Manager interface. At the top, there is a navigation bar with tabs for Migration, SnapShots, Transactions, and System Configuration. Below the navigation bar, there is a message box with an information icon and the text: "Logical Objects are Successfully migrated to Target System". Below the message box, there is a table with the following content:

Transaction ID	Transaction Description
1290	testing demo work flow migration

At the bottom of the screenshot, there is a footer with the text: "© Oracle Corp, 2006" and a navigation bar with links for Migration, SnapShots, Transactions, System Configuration, Logout, and Help.

12. 情報メッセージを確認して、移行中に割り当てられたトランザクション ID (および指定した説明) をメモします。

移行後に、すべての Identity Server および Access Server を停止し再起動してキャッシュをフラッシュし、新しい情報で構成を更新する必要があります。

13. 「移行後のサーバーの再起動」に進んで、移行後のデータの同期を保証します。

移行後のサーバーの再起動

ID システムまたはアクセス・システムのコンソールを使用してデータを直接変更すると、変更は自動的にサーバーからディレクトリに書き込まれます。この場合、サーバー・キャッシュ内の該当エントリはフラッシュされ、サーバーは最新の構成データで自動的に更新されます。

しかし、Oracle Access Manager Configuration Manager を使用して変更を移行した場合、または LDIF ファイルにデータをエクスポートしてオフラインでインポートした場合は、変更はディレクトリにのみ書き込まれます。この場合、サーバーは直接の対象にはなりません。そのため、Configuration Manager を使用してデータを移行した直後に、ターゲット環境ですべての Identity Server および Access Server を手動で再起動し、サーバー・キャッシュをフラッシュしてターゲット・ディレクトリからの最新の構成データでサーバーを更新する必要があります。

注意: 複数のサーバーが含まれる場合、サーバーとディレクトリ間のデータの同期化の問題になり得る遅延を回避することが特に重要です。長時間の再起動では、すべてのサーバーが再起動されるまで一貫性のない期間があります。

リリース 10g (10.1.4.0.1) の Policy Manager コンポーネント (リリース 7.0.4 では Access Manager コンポーネント) の再起動は、データの移行後に実行する必要はありません。

注意: レプリケートされたディレクトリ環境がある場合、Identity Server および Access Server を再起動する前に、マスター LDAP ディレクトリに対して行われた移行の変更がレプリカにすべて伝播されたことを確認する必要があります。

移行後のデータの同期を保証する手順

1. **レプリケートされた環境:** データの移行直後に、次の手順の説明に従ってサーバーの再起動を実行する前に、変更がレプリカにすべて伝播されたことを確認します。
2. データの移行直後に、ターゲット・インストールですべての Identity Server (Windows プラットフォームの Identity Server サービス) を再起動します。
3. データの移行直後に、ターゲット・インストールですべての Access Server (Windows プラットフォームの Access Server サービス) を再起動します。
4. [第4章「成功した移行の検証」](#)の説明に従って、ターゲット環境およびデータの変更を検証します。

成功した移行の検証

この章では、データの移行が Oracle Access Manager Configuration Manager を使用して正常に実行されたことを検証する方法を説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [移行した変更の検証の概要](#)
- [Oracle Access Manager 10g \(10.1.4.0.1\) の移行したデータの検証](#)
- [Oracle COREid リリース 7.0.4 の移行したデータの検証](#)

移行した変更の検証の概要

第1章で説明されているように、データの移行を開始する前に、ソース・デプロイでの構成データの変更を迅速に検証できる特定のテストを開発することをお勧めします。移行後に、ターゲット・デプロイで同じテストを使用して、すべてが正しく動作していることを確認してください。

注意： ターゲット・デプロイのすべての依存状態を調整することをお勧めします。たとえば、ワークフロー・データを移行した場合、ソース・ディレクトリに記載されているすべてのワークフロー参加者がターゲットに含まれていることを確認してください。そうでない場合、ターゲット・デプロイのワークフローは正しく機能しないことがあります。

この章のタスクを開始する前に、表 4-1 で説明する前提条件のタスクが実行されていることを確認してください。

表 4-1 検証の前提条件

確認	前提条件のタスク	参照先
	移行する構成データの変更の成功を検証するソース・デプロイでのテストを開発する。	1-13 ページの「データの移行の計画と成果物」
	データを移行する。	3-38 ページの「データの移行」
	ターゲット・デプロイ内のすべての Identity Server および Access Server を再起動する。	3-42 ページの「移行後のサーバーの再起動」
	ソースのすべての依存状態がターゲット環境にも存在することを確認する。	

移行したデータが正しく機能していることを確認する際に使用できる情報の詳細は、次の項目を参照してください。

- [Oracle Access Manager 10g \(10.1.4.0.1\) の移行したデータの検証](#)
- [Oracle COREid リリース 7.0.4 の移行したデータの検証](#)

注意： ライブ・ターゲット・デプロイでの移行の成功を検証する際に実行する手順は、使用する製品のリリース (10g (10.1.4.0.1) またはリリース 7.0.4) にかかわらず基本的に同じです。一部の製品用語のみが異なります。

Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) の移行したデータの検証

移行したデータを Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) デプロイで使用して、変更が適切に移行され、すべてが正しく動作しているかどうか確認することをお勧めします。

次に、ターゲット Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) デプロイ内で移行したデータの検証について説明します。

- [10g \(10.1.4.0.1\) の ID システム・データの移行の検証](#)
- [10g \(10.1.4.0.1\) のアクセス・システムのデータの移行の検証](#)

10g (10.1.4.0.1) の ID システム・データの移行の検証

データの移行を検証するには、ターゲット・ディレクトリおよび移行したデータに依存する Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) ID システム・コンソールおよびアプリケーションでタスクを実行します。

次の手順では、移行したデータの検証の際に実行するアクティビティの手順および概要を説明します。手順 5 には、実行する可能性があるアクティビティがいくつか示されています。ただし、実際に実行するタスクは、移行したデータにより異なります。

10g (10.1.4.0.1) の ID システム・データの移行を検証する手順

1. 移行したデータの影響を受ける ID システムのアプリケーションおよび機能を特定し、ターゲット ID システムおよびアプリケーションでそれらをテストする計画を作成します。
2. ターゲット・インストールで、Identity Server サービスおよび WebPass の Web サーバー・インスタンスが実行されていることを確認します。
3. 適切な URL を指定して、ブラウザから ID システム・コンソールに移動します。次に例を示します。

```
http://hostname:port/identity/oblix
```

ここで、*hostname* は Web サーバーをホストするコンピュータ、*port* は WebPass の Web サーバー・インスタンスの HTTP ポート番号をそれぞれ指し、*/identity/oblix* は ID システム・コンソールに接続します。

Oracle Access Manager のランディング・ページが表示されます。

4. 次のタスクまたはそれ以外のタスクのいずれかを実行して、移行したデータが正しく動作していることを確認します。次に例を示します。
 - User Manager、Group Manager または Organization Manager で、パネルを確認します。
 - User Manager、Group Manager、Organization Manager が影響を受ける場合、それらの監査ポリシーを検証します。
 - User Manager、Group Manager または Organization Manager で、属性アクセス制御ポリシーを確認します。
 - 必要に応じ、マスター監査ポリシーおよびグローバル監査ポリシーを確認します。
 - パスワードおよびロスト・パスワード・ポリシーのデータ変更を移行した場合、それらを確認します。
 - データ変更を移行した場合、すべてのワークフロー構成詳細を検証します。
 - 移行後のオブジェクト・クラス定義が適切であることを確認します。
 - Identity Server および WebPass の定義、サーバー設定、管理者情報およびディレクトリ・オプションを検証します。
5. 通常どおりログアウトします。

特定のタスクの実行の詳細は、『Oracle Access Manager ID および共通管理ガイド』を参照してください。

10g (10.1.4.0.1) のアクセス・システムのデータの移行の検証

アクセス・システムのデータの移行を検証するには、ターゲット・ディレクトリおよび移行したデータに依存する Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) アクセス・システム・コンソールおよびアプリケーションでタスクを実行します。

次の手順では、移行したデータの検証の際に実行するアクティビティの手順および概要を説明します。手順 5 には、実行する可能性があるアクティビティがいくつか示されています。ただし、実際に実行するタスクは、移行したデータにより異なります。

10g (10.1.4.0.1) アクセス・システムの成功したデータの移行を検証する手順

1. 移行したデータの影響を受けるアクセス・システムのアプリケーションおよび機能を特定し、それらをテストする計画を作成します。
2. すべての Policy Manager の Web サーバーおよび WebPass の Web サーバー・インスタンスが実行されていることを確認します。
3. 適切な URL を指定して、ブラウザからアクセス・システム・コンソールに移動します。次に例を示します。

```
http://hostname:port/access/oblix
```

ここで、*hostname* は Web サーバーをホストするコンピュータ、*port* は WebPass の Web サーバー・インスタンスの HTTP ポート番号をそれぞれ指し、*/access/oblix* はアクセス・システム・コンソールに接続します。

Oracle Access Manager のランディング・ページが表示されます。

4. マスター管理者としてログインします。
5. 次のタスクまたはそれ以外のタスクの 1 つ以上を実行して、移行したデータを検証します。次に例を示します。
 - Access Server、Access Server Cluster および Access Client の詳細を確認します。
 - 影響を受ける認証および認可スキームの詳細を検証します。
 - レポート・データを確認します。
 - 影響を受けるポリシー・ドメインを確認します。
6. 通常どおりログアウトします。

特定のタスクの実行の詳細は、『Oracle Access Manager アクセス管理ガイド』を参照してください。

Oracle COREid リリース 7.0.4 の移行したデータの検証

移行したデータを Oracle COREid リリース 7.0.4 デプロイで使用して、変更が適切に移行され、すべてが正しく動作しているかどうかを確認することをお勧めします。

次の手順では、Oracle COREid リリース 7.0.4 の成功したデータの移行を検証する方法を説明します。

- [Oracle COREid リリース 7.0.4 の ID システム・データの移行の検証](#)
- [Oracle COREid リリース 7.0.4 のアクセス・システムのデータの移行の検証](#)

注意： ライブ・ターゲット・デプロイでの移行の成功を検証する際に実行する手順は、使用する製品リリース (10g (10.1.4.0.1) またはリリース 7.0.4) にかかわらず基本的に同じです。一部の製品用語のみが異なります。

Oracle COREid リリース 7.0.4 の ID システム・データの移行の検証

ID システムのデータの移行を検証する場合、ターゲット・ディレクトリおよび移行したデータに依存する Oracle COREid リリース 7.0.4 システム・コンソールおよびアプリケーションでタスクを実行します。

次の手順では、移行したデータの検証の際に実行するアクティビティの手順および概要を説明します。手順 5 には、実行する可能性があるアクティビティがいくつか示されています。ただし、実際に実行するタスクは、移行したデータにより異なります。

リリース 7.0.4 の ID システム・データの移行を検証する手順

1. 移行したデータの影響を受ける ID システムのアプリケーションおよび機能を特定し、それらをテストする計画を作成します。
2. すべての Identity Server サービスおよび WebPass の Web サーバー・インスタンスが実行されていることを確認します。
3. 適切な URL を指定して、ブラウザから COREid システム・コンソールに移動します。次に例を示します。

```
http://hostname:port/identity/oblix
```

ここで、*hostname* は Web サーバーをホストするコンピュータ、*port* は WebPass の Web サーバー・インスタンスの HTTP ポート番号をそれぞれ指し、*/identity/oblix* は COREid システム・コンソールに接続します。

COREid のランディング・ページが表示されます。

4. マスター管理者としてログインします。
5. COREid システム・コンソールまたはアプリケーションを使用する場合は、次のタスクまたはそれ以外のタスクを実行して、移行の影響を受ける可能性のあるデータを検証します。次に例を示します。
 - User Manager、Group Manager または Organization Manager で、パネルを確認します。
 - User Manager、Group Manager、Organization Manager が影響を受ける場合、それらの監査ポリシーを検証します。
 - User Manager、Group Manager または Organization Manager で、属性アクセス制御ポリシーを確認します。
 - 必要に応じ、マスター監査ポリシーおよびグローバル監査ポリシーを確認します。
 - パスワードおよびロスト・パスワード・ポリシーのデータ変更を移行した場合、それらを確認します。
 - データ変更を移行した場合、すべてのワークフロー構成詳細を検証します。
 - 移行後のオブジェクト・クラス定義が適切であることを確認します。

- Identity Server および WebPass の定義、サーバー設定、管理者情報およびディレクトリ・オプションを検証します。

6. 通常どおりログアウトします。

特定のタスクの実行の詳細は、『Oracle COREid Access and Identity Administration Guide Volume 1』を参照してください。

Oracle COREid リリース 7.0.4 のアクセス・システムのデータの移行の検証

アクセス・システムのデータの移行を検証するには、ターゲット・ディレクトリおよび移行したデータに依存する Oracle COREid リリース 7.0.4 アクセス・システム・コンソールおよびアプリケーションでタスクを実行します。

次の手順では、移行したデータの検証の際に実行するアクティビティの手順および概要を説明します。手順 5 には、実行する可能性があるアクティビティがいくつか示されています。ただし、実際に実行するタスクは、移行したデータにより異なります。

リリース 7.0.4 のアクセス・システムの成功したデータの移行を検証する手順

1. 移行したデータの影響を受けるアクセス・システムのアプリケーションおよび機能を特定し、それらをテストする計画を作成します。
2. すべての Access Manager の Web サーバーおよび WebPass の Web サーバー・インスタンスが実行されていることを確認します。
3. 適切な URL を指定して、ブラウザから Access Manager/ アクセス・システム・コンソールに移動します。次に例を示します。

```
http://hostname:port/access/oblix
```

ここで、*hostname* は Web サーバーをホストするコンピュータ、*port* は WebPass の Web サーバー・インスタンスの HTTP ポート番号をそれぞれ指し、*/access/oblix* はアクセス・システム・コンソールに接続します。

アクセス・システムのランディング・ページが表示されます。

4. Access Manager/ アクセス・システム・コンソールにマスター管理者としてログインします。
5. 次のタスクまたはそれ以外のタスクのいずれかを実行して、移行したデータを検証します。次に例を示します。
 - Access Server、Access Server Cluster および Access Client の詳細を確認します。
 - 影響を受ける認証および認可スキームの詳細を検証します。
 - レポート・データを確認します。
 - 影響を受けるポリシー・ドメインを確認します。

6. 通常どおりログアウトします。

特定のタスクの詳細は、『Oracle COREid Access and Identity Administration Guide Volume 2』を参照してください。

トランザクションの管理および変更の ロールバック

この章では、移行中に Oracle Access Manager Configuration Manager で作成したトランザクション・レコードを表示する方法および特定のトランザクションに対する変更をロールバックする方法について説明します。また、Configuration Manager を使用して作成した特定の環境スナップショットの内容をリストアする方法について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [関連付けられたディレクトリ・ペアのトランザクション詳細の表示](#)
- [特定のトランザクション中に加えられた変更のロールバック](#)
- [環境（ディレクトリ）スナップショットの内容のリストア](#)

関連付けられたディレクトリ・ペアのトランザクション詳細の表示

トランザクション・レコードは、Oracle Access Manager Configuration Manager で移行を実行するたびに、自動的に作成されます。「Transaction List」ページから、関連付けを選択し、選択した関連付けの既存のトランザクション・レコードを表示できます。

図 5-1 に「Transactions List」ページの例を示します。詳細には、移行中に自動的に関連付けられるトランザクション ID、トランザクションに対して入力した説明、移行の実行者の名前、移行を実行した日付および移行トランザクションのステータスが表示されます。

図 5-1 「Transactions List」ページ

Select	Transaction ID	Description	Performed By	Date	Status
<input type="radio"/>	1372	No Description	DemoUser	Sat Dec 16 05:52:57 GMT+05:30 2006	Done
<input type="radio"/>	1390	No Description	DemoUser	Sat Dec 16 07:00:18 GMT+05:30 2006	Done
<input type="radio"/>	1430	Rollback of Transaction 1372	DemoUser	Wed Dec 20 06:06:07 GMT+05:30 2006	Done
<input type="radio"/>	1431	Rollback of Transaction 1372	DemoUser	Wed Dec 20 06:33:07 GMT+05:30 2006	Done

トランザクション・レコードを選択して、選択した移行中に加えられた変更の詳細をより詳しく表示できます。図 5-2 に、「View Transactions」ページの例および選択した移行トランザクションで表示可能な詳細のタイプを示します。

図 5-2 移行前後のターゲットの違いの表示

図 5-2 で示すように、各フォルダには展開アイコンがあります。フォルダ・アイコンとオブジェクト名との間に表示される記号は、次のタイプの変更が移行中に発生したことを示します。

- +: 追加アイコン (+) は、オブジェクトが一方のディレクトリに存在し、両方には存在していない場合に表示されます。
- !: 差異アイコン (!) は、論理オブジェクトに異なる属性値または依存がある場合に表示されます。

データの移行に Oracle Access Manager Configuration Manager を使用した場合、この記号はターゲットの比較およびカスタマイズの際に表示されます。違いを表す記号の詳細は、3-35 ページの「ターゲットのカスタマイズの概要」を参照してください。

注意： トランザクション・レコードは明示的に削除できません。レコードが属する関連付けを削除する場合のみ、トランザクション・レコードが削除されます。

トランザクションの詳細を表示する手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager ホームページで、「Transactions」タブをクリックします。
2. 「Select Association」リストから、ディレクトリ関連付けを選択します。次に例を示します。

* Select Association

選択した関連付けの既存のトランザクションを示す「Transactions List」ページが表示されます。

3. 「Select」列で、選択する「Transaction ID」の横のオプションをクリックします。次に例を示します。

Select	Transaction ID	Description
<input type="checkbox"/>	1372	No Description

4. 「View」ボタンをクリックして、トランザクションの詳細を表示します。
5. トランザクション・レコードの詳細を調べ、正しいかどうか確認します。
6. このページの「Back」ボタンをクリックし、「Transactions List」に戻ります。

特定のトランザクション中に加えられた変更のロールバック

トランザクション・レコードを選択して、Oracle Access Manager Configuration Manager を使用したデータの移行中に加えられた変更を元に戻すこと（ロールバック）ができます。トランザクションをロールバックすると、Oracle Access Manager Configuration Manager を使用したデータの移行中に論理オブジェクトに加えられた変更のみが元に戻ります。

移行トランザクションをロールバックする理由は、いくつか考えられます。たとえば、ソース・デプロイ（ワークフロー、ポリシー・ドメインおよび WebGates）で論理オブジェクトを変更したとします。変更により必要な結果がソース・デプロイに生成されることをテストおよび検証してから、ターゲット・デプロイにデータを移行します。しかし、移行後テストをターゲット・デプロイで実行しても必要な結果が得られなかった場合は、トランザクションのロールバックを選択してターゲット環境をリストアします。または、オブジェクトに対する変更をターゲット環境で移行および検証してから、オブジェクトをターゲットから削除するとします。この場合、トランザクションをロールバックして移行した論理オブジェクトをターゲットから取り除くか、ID システム・コンソールまたはアクセス・システム・コンソールを使用してオブジェクトを直接削除します。

ロールバックの実行前に、必要な環境が Configuration Manager でアクセス可能であることを確認してください。トランザクションをロールバックする場合、Oracle Access Manager Configuration Manager はターゲット環境を次の方法で移行前の状態に戻します。

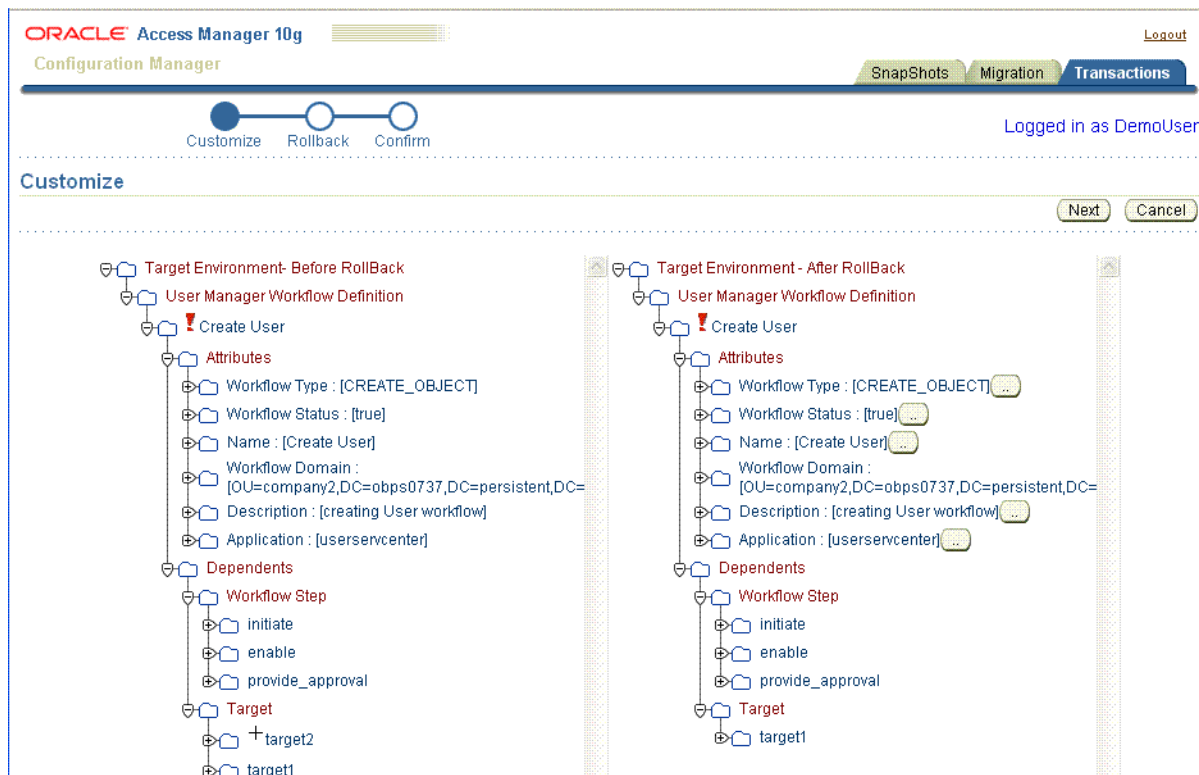
- 移行中に追加されたターゲットの論理オブジェクト（関連する論理オブジェクトは含まれません）を削除します。

たとえば、論理オブジェクト Access Client が、関連する論理オブジェクト Access Server を使用して、移行中にターゲットに追加されるとします。トランザクションをロールバックすると、Access Client は削除されますが、関連する論理オブジェクト Access Server は削除されません。

- ターゲットの論理オブジェクトを、次のようにして移行前の元の状態に戻します。
 - 移行前とは属性または依存が異なる移行した論理オブジェクトを、移行前の元の状態に戻します。
 - 変換ルールを、ロールバック操作中に元に戻し（取り消し）ます。変換ルールの適用に影響を受ける論理オブジェクトは、移行前の状態（ルールが適用される前の状態）にリストアされます。
 - 移行中に属性値に対して手動で加えられたすべてのカスタマイズを、ロールバック操作中に元に戻し（取り消し）ます。

次に、ロールバック手順の概要を示します。環境を選択し、ロールバック操作を起動すると、[図 5-3](#) に示すように「Customize」ページが表示されます。通常どおり、スクロールバーがあります。進捗インジケータの「Customize」がハイライト表示されます。

図 5-3 ロールバック操作中の「Customize」ページ



ロールバックの「Customize」ページには、次のナビゲーション・ツリーがあります。

- **Target Environment - Before Rollback:** 移行トランザクション後およびロールバック操作前の現在のターゲットの状態。
- **Target Environment - After Rollback:** ロールバック操作後のターゲットの状態。ロールバック操作により、ターゲットが移行前のこの状態に戻ります。このビューで、変更をロールバックする前に、属性をカスタマイズできます。

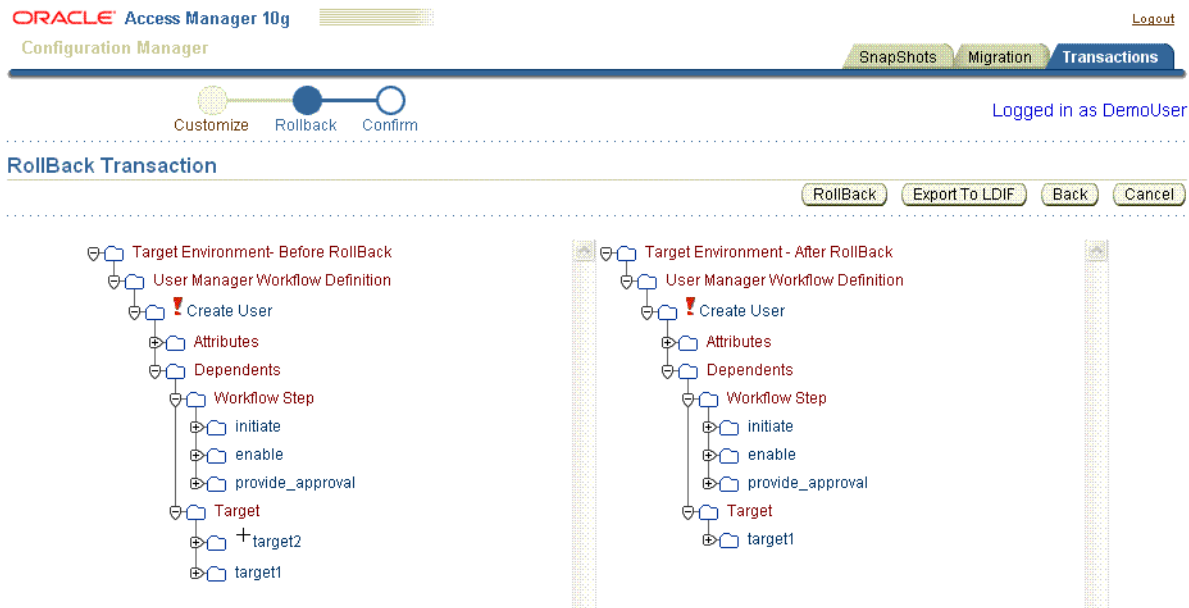
「Customize」ページで、フォルダ・アイコンとオブジェクト名との間に表示される記号は、次のタイプの変更を示します。

- **+:** 追加アイコン (+) は、オブジェクトが一方のディレクトリに存在し、両方には存在していない場合に表示されます。
- **!:** 差異アイコン (!) は、論理オブジェクトに異なる属性値または依存がある場合に表示されます。

「Customize」ページで、「Target Environment - After Rollback」ビューの属性を手動で更新できます。手順は、移行中に実行するカスタマイズと同様です。属性のカスタマイズの詳細は、3-35 ページの「[ターゲットのカスタマイズの概要](#)」を参照してください。

属性をカスタマイズするかどうかにかかわらず、「Next」ボタンをクリックして、「Rollback Transaction」ページに進みます。「Rollback Transaction」ページの例を図 5-4 に示します。

図 5-4 「Rollback Transaction」ページ



「Rollback Transaction」ページで、実際にロールバックを実行する前の最終確認および検証ができます。ページには、ロールバック操作前の現在のターゲットおよびロールバック操作後のターゲットが示されます。進捗インジケータは、「Rollback」を示しています。

「Rollback Transaction」ページには、4つのボタンおよび「Transaction Description」フィールドがあり、ここでロールバック操作中に作成するレコードに対する一意の説明を入力します。新規のトランザクションを使用すると、このロールバック操作をロールバックし、ターゲットをこの時点（元の移行後および変更のロールバックの前）の状態にリストアできます。

「Rollback Transaction」ページのボタンを使用して、次のことができます。

- **Rollback:** 次の手順で説明するように、選択したトランザクション中に加えられた変更を元に戻し、環境を「Target Environment - After Rollback」ビューに表示される状態にリストアします。

実行する必要があるか確認を求められます。操作が完了すると、情報メッセージの通知が「Confirm」ページに表示されます。ロールバック操作のトランザクション・レコードが作成されます。

- **Export to LDIF File:** 「Target Environment - After Rollback」ビューのデータを含む LDIF ファイル（オプション）を作成します。LDIF ファイルを使用すると、外部ツールを使用してデータを編集またはインポートできます。この場合、トランザクション・レコードは作成されません。
- **Back:** 「Customize」ページに戻り、属性を更新できます。
- **Cancel:** ロールバック操作を完了せずに終了し、「Transactions List」ページに戻ります。

次に、ロールバック操作を実行する際に使用する手順を説明します。LDIF ファイルへのデータのエクスポートおよび属性のカスタマイズの詳細が、オプションとして手順に含まれています。


特定の移行トランザクション中に行われた変更をロールバックする手順

1. Configuration Manager で、「Transactions」タブを選択します。
2. 「Select Association」リストから、ディレクトリ関連付けを選択します。次に例を示します。

* Select Association

選択した関連付けの既存のトランザクションを示す「Transactions List」ページが表示されます。

3. 選択するトランザクションの横のオプションをクリックします。

Select a Transaction and		RollBack	View
Select	Transaction ID	Description	
	1372	No Description	

4. 「Rollback」ボタンをクリックします。
5. **属性のカスタマイズ (オプション)** : 次のオプションの手順を実行し、属性を手動で更新すると、ロールバック操作中に新しい値が割り当てられます。それ以外の場合は、「Next」をクリックし、手順 6 にスキップします。
 - a. 「Customize」ページで、変更する属性の横の (..) のボタンをクリックします (Update Attributes ウィンドウが開きます)。
 - b. Update Attribute ウィンドウに新しい値を入力し、「Save」をクリックします。次に例を示します。
 - **Attribute Name:** 現在の属性名は固定で、変更できません。
 - **Attribute Old Value:** 現在の属性値。
 - **Attribute New Value:** 新しい属性値を指定されたフィールドに入力します。
 - **Save:** 「Save」ボタンをクリックして更新した属性値を保存し、「Customization」ページに戻ります。
 - c. 必要に応じ、「After Rollback」ビューで、変更する各属性に対して手順を繰り返します。
 - d. 「Customize」ページでの作業が終了したら、「Next」ボタンをクリックして「Rollback Transaction」ページを表示し、次のいずれかのアクティビティに進みます。
 - **LDIF ファイルにデータをエクスポート:** オプションの LDIF ファイルを作成してインポートしたデータを外部ツールで編集または使用する場合は、手順 6 に進んでください。トランザクション・レコードは作成されません。
 - **変更のロールバック:** トランザクション・レコードを作成し、変更をロールバックする場合は、手順 7 に進みます。
 - **ロールバック操作のキャンセル:** ロールバック操作を完了せずに終了する場合は、「Cancel」をクリックします。

6. **LDIF ファイルへのエクスポート (オプション)** : データを LDIF ファイルにエクスポートして、外部ツールを使用してインポートする場合のみ、次の順序で手順を実行します。それ以外の場合は、手順7にスキップします。
 - a. 「Rollback Transaction」 ページで、「Export to LDIF」 ボタンをクリックします。
 - b. Open MigrationData ウィンドウで、テキスト・エディタを選択 (または「Open with Notepad (default)」 をクリック) します。
 - c. メモ帳ウィンドウで、エクスポートするデータを確認して編集し、ファイルを保存します。
 - d. 名前を付けて保存ウィンドウで、このファイルの保存先ディレクトリを指定し、拡張子 .ldif を付けたファイル名を入力して「保存」をクリックします。次に例を示します。


```
MigrationData_01_07.ldif
```

指定した場所にファイルが作成されます。トランザクション・レコードは作成されません。
 - e. 外部ツールを使用して LDIF ファイルをインポートする前に、3-26 ページの「[スナップショットの作成](#)」で説明するようにターゲット・ディレクトリのスナップショットを作成します。
7. **ロールバック** : 「Rollback Transaction」 ページで、次のアクティビティを完了して、操作を完了します。
 - a. 指定されるフィールドにトランザクションの説明を入力し、ロールバック操作中に作成するレコードに名前を付けます。次に例を示します。


```
Roll back of Transaction 1372
```
 - b. 「Rollback」 ボタンをクリックし、元の移行トランザクション中に加えられた変更を元に戻します。
 - c. 「OK」 をクリックし、ロールバックを検証および開始します。次に例を示します。
 - d. 操作が完了したら情報メッセージを調べて、ロールバックが成功したことを確認します。次に例を示します。

ORACLE Access Manager 10g Configuration Manager

Logout

Snapshots Migration Transactions

Customize Migrate Confirm

Logged in as DemoUser

i Information

1. - Logical Objects are Successfully migrated to Target System
2. - Please Restart Identity Server

Configuration Manager

Transaction ID 1430
 Transaction Description Rollback of Transaction 1372

8. **Identity Server および Access Server を再起動し**、3-42 ページの「[移行後のサーバーの再起動](#)」で説明したように、移行後のデータの同期化を確認します。

環境（ディレクトリ）スナップショットの内容のリストア

次に、第3章で説明した環境スナップショットの内容のリストアの詳細を参考として繰り返して説明します。

Oracle Access Manager Configuration Manager の外部で行った変更の結果、環境の oblix ツリーの構成データに一貫性がなくなるか、構成データが破損した場合に、スナップショットをリストアすることがあります。HMUser 権限を持つユーザーであれば、このタスクを実行できます。Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリおよび関連付けられた LDAP ディレクトリはオンラインである必要があります。

Oracle Access Manager Configuration Manager を使用して作成したスナップショットをリストアすると、oblix ツリー全体がディレクトリにリストアされます。取り消される変更には、Configuration Manager を使用して行われた移行の変更の他、Configuration Manager 以外で行われた変更も含まれます。

注意： スナップショットをリストアすると、スナップショットの取得後に行われた変更はすべて元に戻り、ディレクトリはスナップショットが作成された時点の状態に戻ります。

リストアを開始する前に、選択したスナップショットをリストアする必要があるか確認を求められます。確認が終わると、新しいスナップショットが作成されてディレクトリの現行の状態が取得され、選択した古いスナップショットがリストアされます。リストアで元に戻った変更が多すぎる場合は、リストア中に作成したスナップショットをリストアできます。

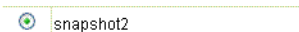
注意： Oracle Access Manager Configuration Manager 以外のアプリケーションを使用してディレクトリのバックアップを作成した場合は、Configuration Manager を使用してバックアップをリストアできません。

スナップショットの内容をリストアする手順

1. Oracle Access Manager Configuration Manager で、「Snapshots」タブを選択します。
2. 「Select Environments」リストから、環境を選択します。次に例を示します。



3. 「Select」列で、リストアするスナップショット名の横のオプションをクリックします。次に例を示します。



4. 「Restore」ボタンをクリックします。
操作を完了する（および環境を以前の状態に戻す）必要があるか確認を求めるメッセージが表示されます。
5. 「OK」をクリックして確認し、操作を完了します（または「Cancel」をクリックし、操作を終了します）。
操作が必要であることを確認すると、現行の状態の環境の新しいスナップショットが作成され、選択したスナップショットの内容がリストアされます。
6. 「Snapshots」リストで、情報メッセージを確認します。新しいスナップショットがリストに表示されていれば、操作は成功です。

ワークシートの計画およびチェックリストの追跡

データを移行する前に、インストールされた各デプロイの計画の詳細を定義および記録したドキュメントを作成する必要があります。各デプロイ内のコンポーネントおよびデータの詳細も必要です。この章では、コピーをして入力できるワークシート・テンプレート、およびコピーをして移行アクティビティの追跡に使用できるチェックリストについて説明します。

- [ワークシートおよびチェックリストの計画の再定義の概要](#)
- [デプロイ全体のワークシート](#)
- [ディレクトリ・インスタンスのワークシート](#)
- [DIT およびオブジェクト定義詳細のワークシート](#)
- [ディレクトリ・サーバー・プロファイルのワークシート](#)
- [データベース・インスタンス・プロファイルのワークシート](#)
- [Identity Server のワークシート](#)
- [Policy Manager \(リリース 7.0.4 Access Manager\) インスタンスのワークシート](#)
- [Access Server のワークシート](#)
- [構成のワークシート](#)
- [Configuration Manager のデプロイおよび設定のチェックリスト](#)
- [構成データの移行のチェックリスト](#)
- [別のツールを使用した他のデータの移行のチェックリスト](#)

ワークシートおよびチェックリストの計画の再定義の概要

この付録のワークシートをコピーして記入し、インストールした各デプロイの詳細を記録することをお勧めします。Oracle Access Manager インストールまたはアップグレードのワークシートに、開始点が説明されています。デプロイから様々な詳細にアクセスして、それらを印刷すると、時間を節約しエラーをなくすことができます。

注意： ワークシート、印刷物およびその他のインストールに関する詳細な記録は、追跡に使用するために安全な場所に保管してください。

また、この付録では、3つのチェックリストについて説明します。最初のチェックリストを使用すると、アプリケーション・デプロイおよび設定を追跡できます。2番目のチェックリストを使用すると、データの移行アクティビティを追跡できます。3番目のチェックリストを使用すると、Oracle Access Manager Configuration Manager を使用した移行でサポートされていないデータを識別できます。

デプロイ全体のワークシート

表 A-1 の空欄に、デプロイの一般的な情報を記録します。

表 A-1 デプロイ全体の詳細

タスク	サブタスク	デプロイ全体のワークシート
0	0.1	デプロイ名: _____ デプロイ・タイプ (該当するものをすべて丸で囲む): ID システムのみ ID システムおよびアクセス・システムの結合 開発 テスト / デモ QA 本番前 本番 その他 デプロイのマスター管理者: _____ システム操作を最後に検証した日付: _____
	0.2	デプロイの各コンポーネントの総数: Identity Server: _____ WebPass インスタンス: _____ ID システムとアクセス・システムの結合の場合、総数を入力。 Policy Managers (リリース 7.0.4 Access Manager コンポーネント): _____ Access Server: _____ WebGate: _____ カスタム AccessGate: _____ アプリケーション・サーバー・コネクタ (BEA、IBM、OC4J): _____
	0.3	総数: Identity Server のみのディレクトリ・インスタンス: _____ ID システムとアクセス・システムの結合の場合: Policy Manager のみのディレクトリ・インスタンス: _____ Identity Server、Policy Manager (リリース 7.0.4 Access Manager)、Access Server で使用する ディレクトリ・インスタンス: _____
	0.4	デプロイに依存するアプリケーションおよび所有者 アプリケーション名 所有者 コメント _____ _____ _____ _____
	0.5	コントロールの変更手順: _____ _____ スケジュール済メンテナンス・ウィンドウ: _____ _____ オフ時間操作ウィンドウ: _____ _____

ディレクトリ・インスタンスのワークシート

表 A-2 の空欄に、Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 のデプロイのディレクトリ・インスタンスの詳細を記録します。

表 A-2 ディレクトリ・インスタンス詳細

タスク	サブタスク	ディレクトリ・インスタンス詳細
1	1.1	ディレクトリ・サーバー・タイプ: _____ ディレクトリ・サーバー・バージョン: _____ ディレクトリ・サーバー・パッチ・レベル: _____
	1.2	ディレクトリ・サーバー詳細 ディレクトリ・サーバー DNS ホスト名 /IP アドレス: _____ ディレクトリ・サーバーのポート番号: _____ Oracle Access Manager のルート・バインド DN: _____ ルート・パスワード _____ 検索ベース _____ 構成ベース _____ ディレクトリ・サーバー・セキュリティ・モード オープン SSL SSL の場合: <ul style="list-style-type: none"> ■ CA 証明書ファイルへのパス _____ ■ キーストア・パスワード _____ 非結合検索ベース _____
1.3		ディレクトリ・サーバー・プロファイル (詳細は個別のワークシートを参照) _____ _____ _____ _____
1.4		マスター / レプリカ構成詳細: _____ _____ _____ _____
1.5		ディレクトリ・サーバーのデータ・タイプ (移行に該当するものをすべて丸で囲む) 構成データ ポリシー・データ
1.6		Person オブジェクト・クラス _____ Group オブジェクト・クラス _____ ユーザーのフルネーム属性: _____ ユーザーのログイン ID 属性: _____ パスワード属性: _____
1.7		ユーザー・クラス属性:
1.8		ユーザーのログイン ID 属性:
1.9		パスワード属性:

DIT およびオブジェクト定義詳細のワークシート

表 A-3 の空欄に、各 LDAP ディレクトリ・インスタンスに必要な詳細を記録します。

表 A-3 DIT およびオブジェクト定義詳細

タスク	サブタスク	DIT およびオブジェクト定義詳細
2	2.1	ディレクトリ・サーバー DNS ホスト名または IP アドレス: _____ ディレクトリ・サーバーのポート番号: _____
	2.2	Oracle Access Manager (または Oracle COREid リリース 7.0.4) で使用する DIT およびスキーマ・オブジェクト Person _____ _____ _____ _____ Group _____ _____ _____ _____ その他 _____ _____ _____ _____ レベル 4 の深さまでの DIT のダイアグラム _____ _____ _____ _____ _____ _____ _____
2.3		Oracle Access Manager で管理するすべてのオブジェクトのオブジェクト定義詳細: Person _____ _____ _____ _____ Group _____ _____ _____ _____ その他 _____ _____ _____ _____ _____ _____ _____

ディレクトリ・サーバー・プロファイルのワークシート

表 A-4 の空欄に、各ディレクトリ・サーバー・プロファイルの詳細を記録します。既存のインストールからこの情報を印刷してください。

表 A-4 Oracle Access Manager/Oracle COREid リリース 7.0.4 のディレクトリ・サーバー・プロファイルの詳細

タスク	サブタスク	ディレクトリ・サーバー・プロファイル詳細
3	3.1	ディレクトリ・サーバー DNS ホスト名 /IP アドレス: _____ ディレクトリ・サーバーのポート番号: _____
	3.2	ディレクトリ・サーバー・プロファイル プロファイル名: _____ ネームスペース (検索ベース): _____ ディレクトリ・タイプ: _____ 動的補助クラス
	3.3	操作 (該当するものをすべて丸で囲む) 検索操作: 検索エントリ ユーザーの認証 読取り操作: 読取りエントリ 書込み操作: エントリの作成 エントリの修正 エントリの削除 パスワードの変更
	3.4	コンポーネントで使用するもの (該当するものをすべて記録) すべて Identity Server: _____ _____ _____ Access Server _____ _____ _____ Policy Manager (以前の Access Manager) _____ _____ _____
	3.5	書込み操作: エントリの作成 エントリの修正 エントリの削除 パスワードの変更
	3.6	データベース・インスタンス (詳細は個別のワークシートを参照) _____ _____ _____ _____ _____ _____
3.7	最大アクティブ・サーバー数: _____ フェイルオーバーしきい値: _____ スリープ時間 (秒): _____ 最大セッション時間 (分): _____	

データベース・インスタンス・プロファイルのワークシート

表 A-5 の空欄に、ディレクトリ・サーバー・インスタンスに関連付けられた各データベース・インスタンス・プロファイルの詳細を記録します。既存のインストールからこの情報を印刷してください。

表 A-5 DB インスタンス・プロファイル詳細

タスク	サブタスク	DB インスタンス・プロファイル詳細
4	4.1	ディレクトリ・サーバー・インスタンス名 _____ ディレクトリ・インスタンスをホストするコンピュータ名 _____ ポート番号: _____ ルート DN: _____ ルート DN パスワード: _____ 時間制限: _____ サイズ制限: _____ フラグ: SSL 参照 ファスト・バインド (AD のみ) SSL の場合: ■ CA 証明書ファイルへのパス _____ ■ キーストア・パスワード _____ セキュア・ポート番号 _____ 初期接続数: _____ 最大接続数: _____

Identity Server のワークシート

表 A-6 の空欄に、各 Identity Server の詳細を記録します。

表 A-6 既存の Identity Server 詳細

タスク	サブタスク	既存の Identity Server 詳細
5		デプロイでの ID 構成データの移行の準備 デプロイの Identity Server の総数：
5.1	Identity Server 詳細	Identity Server のインストール・ディレクトリ _____ 完全パッチ・レベル _____ オペレーティング・システムおよびパッチ・レベル _____ 関連付けられた WebPass のインストール・ディレクトリ _____
5.2	Identity Server と WebPass 間のトランスポート・セキュリティ・モード：	オープン シンプル 証明書 シンプルの場合、パスフレーズを入力 _____ 証明書モードの場合、フルパスを指定： <ul style="list-style-type: none"> ■ 証明書ファイル (ois_cert.pem) _____ ■ 証明書 PEM パスフレーズ _____ ■ キー・ファイル (ois_key.pem) _____ ■ 連鎖ファイル (ois_chain.pem) _____
5.3		インスタンスの一意の Identity Server ID: _____ Identity Server がインストールされたコンピュータのホスト名 _____ Identity Server/WebPass 通信用のポート番号 _____
5.4		ディレクトリ・サーバー・タイプ _____ ディレクトリ・インスタンスの詳細は、_____ ワークシートを参照
5.5		ディレクトリ・サーバーと Identity Server 間のセキュリティ・モード： SSL オープン SSL の場合、ルート CA 証明書へのパス
5.6		(Windows のみ) 複数インスタンスがある場合は、このインスタンスを「サービス」ウィンドウ で識別する一意の Identity Server サービス名：
5.7		監査構成 _____ _____
5.8		パスワード・ポリシー構成 _____

Policy Manager (リリース 7.0.4 Access Manager) インスタンスのワークシート

表 A-7 の空欄に、既存の各 Policy Manager (以前の Access Manager コンポーネント) の詳細を記録します。

表 A-7 既存の Policy Manager 詳細

タスク	サブタスク	既存の Policy Manager の詳細
6		デプロイでのポリシー・データの移行の準備 デプロイの Policy Manager の総数: _____
6.1		Policy Manager インスタンス詳細 インスタンスのインストール・ディレクトリ _____
6.2		データの移行のマスター Policy Manager かどうか はい いいえ ポリシー・データの格納場所 - ユーザー・データ・ディレクトリ・サーバー - 構成データ・ディレクトリ・サーバー - 個別のディレクトリ・サーバー ディレクトリ・サーバー・タイプ _____ ユーザー・データを格納する検索ベース: _____ 構成 DN: _____ ポリシー・ベース: _____ ディレクトリ・インスタンスの詳細は、 _____ のワークシートを参照
6.3		Person オブジェクト・クラス名: _____
6.4		Policy Manager のポリシー・ドメイン・ルート: _____

表 A-7 既存の Policy Manager 詳細 (続き)

タスク	サブタスク	既存の Policy Manager の詳細																				
6.5	Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) /Oracle COREid リリース 7.0.4 認証スキームを構成するかどうか はい いいえ 構成する場合、1 つ以上の認証スキームを選択:	<table border="0"> <tr> <td data-bbox="383 371 849 396">10g (10.1.4.0.1) 認証スキーム</td> <td data-bbox="854 371 1360 396">リリース 7.0.4 認証スキーム</td> </tr> <tr> <td data-bbox="383 409 849 434">- Basic Over LDAP</td> <td data-bbox="854 409 1360 434">- Basic Over LDAP</td> </tr> <tr> <td data-bbox="383 449 849 474">- クライアント証明書</td> <td data-bbox="854 449 1360 474">- クライアント証明書</td> </tr> <tr> <td data-bbox="383 489 849 514">- 匿名</td> <td data-bbox="854 489 1360 514">- NetPoint の認証なし</td> </tr> <tr> <td data-bbox="383 529 849 554">- Oracle Access and Identity Basic Over LDAP</td> <td data-bbox="854 529 1360 554">- NetPoint Basic Over LDAP</td> </tr> <tr> <td data-bbox="383 569 849 594">- AD Forest 用の Oracle Access and Identity Basic Over LDAP</td> <td data-bbox="854 569 1360 594"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="383 609 849 634"></td> <td data-bbox="854 609 1360 634">- AD Forest 用の NetPoint Basic Over LDAP</td> </tr> <tr> <td data-bbox="383 648 1360 674">- その他 _____</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>_____</td> </tr> <tr> <td></td> <td>_____</td> </tr> </table>	10g (10.1.4.0.1) 認証スキーム	リリース 7.0.4 認証スキーム	- Basic Over LDAP	- Basic Over LDAP	- クライアント証明書	- クライアント証明書	- 匿名	- NetPoint の認証なし	- Oracle Access and Identity Basic Over LDAP	- NetPoint Basic Over LDAP	- AD Forest 用の Oracle Access and Identity Basic Over LDAP			- AD Forest 用の NetPoint Basic Over LDAP	- その他 _____			_____		_____
10g (10.1.4.0.1) 認証スキーム	リリース 7.0.4 認証スキーム																					
- Basic Over LDAP	- Basic Over LDAP																					
- クライアント証明書	- クライアント証明書																					
- 匿名	- NetPoint の認証なし																					
- Oracle Access and Identity Basic Over LDAP	- NetPoint Basic Over LDAP																					
- AD Forest 用の Oracle Access and Identity Basic Over LDAP																						
	- AD Forest 用の NetPoint Basic Over LDAP																					
- その他 _____																						

6.6	Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) /Oracle COREid リリース 7.0.4 関連のポリシー・ドメインを構成するかどうか はい いいえ 構成する場合、ポリシー・ドメインを選択:	<table border="0"> <tr> <td data-bbox="383 888 930 913">10g (10.1.4.0.1) ポリシー・ドメイン</td> <td data-bbox="935 888 1360 913">リリース 7.0.4 ポリシー・ドメイン</td> </tr> <tr> <td data-bbox="383 928 930 953">- Identity ドメイン (デフォルト)</td> <td data-bbox="935 928 1360 953">- NetPoint Identity ドメイン</td> </tr> <tr> <td data-bbox="383 968 930 993">- Access ドメイン (デフォルト)</td> <td data-bbox="935 968 1360 993">- NetPoint Access Manage</td> </tr> <tr> <td data-bbox="383 1008 1360 1033">その他 _____</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>_____</td> </tr> <tr> <td></td> <td>_____</td> </tr> </table>	10g (10.1.4.0.1) ポリシー・ドメイン	リリース 7.0.4 ポリシー・ドメイン	- Identity ドメイン (デフォルト)	- NetPoint Identity ドメイン	- Access ドメイン (デフォルト)	- NetPoint Access Manage	その他 _____			_____		_____								
10g (10.1.4.0.1) ポリシー・ドメイン	リリース 7.0.4 ポリシー・ドメイン																					
- Identity ドメイン (デフォルト)	- NetPoint Identity ドメイン																					
- Access ドメイン (デフォルト)	- NetPoint Access Manage																					
その他 _____																						

6.7	Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 関連の URL を保護するポリシーを構成するかどうか はい いいえ 詳細 _____	_____ _____ _____ _____																				

Access Server のワークシート

表 A-8 の空欄に、以前の Access Server の詳細をそれぞれ記録します。アクセス・システム・コンソールからこの情報を印刷してください。

表 A-8 既存の Access Server 詳細

タスク	サブタスク	Access Server の詳細
7		Access Server の詳細 Access Server の総数
7.1		Access Server インスタンス詳細 Access Server インスタンスのインストール・ディレクトリ _____
7.2		システム・コンソールでの Access Server の詳細 Access Server 名 _____ Access Server のホスト名 _____ Access Server がリスニングするポート番号 _____ Access Server と関連付けられる WebGate との間のトランスポート・セキュリティ・モード: オープン シンプル 証明書 関連付けられる WebGate ID _____ アクセス管理フラグ オン オフ
7.3		どのディレクトリ・サーバーで構成データを格納するか Policy Manager の DS と同じかどうか はい いいえ 構成 DN _____ そうではない場合、ディレクトリ・サーバー・インスタンスの _____ ワークシートを参照 ホスト・コンピュータ _____ ポート番号 _____ ルート DN _____ ルート DN パスワード _____ ディレクトリ・タイプ _____ 構成データ・ディレクトリ・サーバーと Access Server 間のセキュリティ・モード: オープン SSL
7.4		どのディレクトリ・サーバーでポリシー・データを格納するか _____ ポリシー・ベース _____ ディレクトリ・サーバー・インスタンスの詳細は、 _____ のワークシートを参照

表 A-8 既存の Access Server 詳細 (続き)

タスク	サブタスク	Access Server の詳細
7.5	アクセス・システム・コンポーネントのトランスポート・セキュリティ: プル 証明書	オープン シン
	シンプル・モードのみ	
	グローバル・アクセス・プロトコル・パスフレーズ:	_____
	パスワード・ファイル	_____
	証明書モードのみ	
	証明書 PEM フレーズ:	_____
	パスワード・ファイル	_____
	証明書ファイルのパス:	_____
	キー・ファイルのパス:	_____
	連鎖ファイルのパス:	_____

構成のワークシート

表 A-9 の空欄に、各構成の詳細を記録します。

表 A-9 既存の構成詳細

タスク	サブタスク	既存の構成詳細
8	8.1	構成のインストール・ディレクトリ _____ コンピュータに他のコンポーネントがあるか はい いいえ Identity Server WebPass Policy Manager Access Server WebGate
	8.2	ワークフロー _____ _____ _____
	8.3	ユーザー・キャッシュ・フラッシュ構成 _____ AccessGate の ID _____
	8.4	アクセス制御のリスト (ACL) _____ _____ _____

表 A-9 既存の構成詳細 (続き)

タスク	サブタスク	既存の構成詳細
8.5	カスタム ID イベント・プラグイン (プラグイン、事前または事後アクションが含まれるワークシート詳細)	プラグイン名: _____ ワークシート詳細: _____ 事前イベント・アクション: _____ 事後イベント・アクション: _____ プラグイン名: _____ ワークシート詳細: _____ 事前イベント・アクション: _____ 事後イベント・アクション: _____ プラグイン名: _____ ワークシート詳細: _____ 事前イベント・アクション: _____ 事後イベント・アクション: _____ プラグイン名: _____ ワークシート詳細: _____ 事前イベント・アクション: _____ 事後イベント・アクション: _____ プラグイン名: _____ ワークシート詳細: _____ 事前イベント・アクション: _____ 事後イベント・アクション: _____ プラグイン名: _____ ワークシート詳細: _____ 事前イベント・アクション: _____ 事後イベント・アクション: _____
8.6	カスタマイズ認証プラグイン: _____	_____ _____ _____ _____ _____
8.7	カスタマイズ認可プラグイン: _____	_____ _____ _____ _____ _____
8.8	10g (10.1.4.0.1) Access Manager API クライアント / リリース 7.0.4 Access Server API クライアント:	_____ _____ _____ _____ _____

Configuration Manager のデプロイおよび設定のチェックリスト

表 A-10 のチェックリストを使用して、Configuration Manager のデプロイおよび設定の進行を追跡します。

表 A-10 スキーマとデータ準備のチェックリスト

チェック	Configuration Manager のデプロイおよび設定のチェックリスト	詳細
	デプロイ名 : _____ タスク所有者 : _____	
	2-2 ページの「 Configuration Manager デプロイの計画 」	第 2 章
	2-6 ページの「 リポジトリの設定と OC4J のインストール 」	第 2 章
	2-6 ページの「 Oracle Database リポジトリのインストールおよび設定 」	
	2-7 ページの「 OC4J のインストールおよび構成 」	
	2-12 ページの「 Configuration Manager のデプロイ 」	第 2 章
	2-16 ページの「 Configuration Manager の管理者ロールおよびユーザー・ロールの割当て 」	第 2 章
	2-29 ページの「 Configuration Manager でのリポジトリの詳細の追加 」	第 2 章
	2-32 ページの「 リポジトリが Configuration Manager で使用可能であることの確認 」	第 2 章

構成データの移行のチェックリスト

表 A-11 のチェックリストを使用して、データ変更の移行の進行を追跡します。このチェックリストは、表に記載されている章の情報とともに使用する必要があります。

表 A-11 構成データの移行のチェックリスト

チェック	構成データの移行のチェックリスト	詳細
	デプロイ名 : _____ タスク所有者 : _____	
	3-4 ページの「 他の管理者への通知 」	第 3 章
	3-7 ページの「 Configuration Manager への環境の詳細の追加 」	第 3 章
	3-14 ページの「 ディレクトリ関連付けの作成 」	第 3 章
	3-17 ページの「 オプションの変換ルールの追加および管理 」	第 3 章
	3-26 ページの「 スナップショットの作成 」	第 3 章
	3-30 ページの「 ソースからターゲットへのデータの移行 」	第 3 章
	関連項目 : A-15 ページの「 別のツールを使用して移行するデータ 」	
	3-42 ページの「 移行後のサーバーの再起動 」	第 3 章

表 A-11 構成データの移行のチェックリスト (続き)

チェック	構成データの移行のチェックリスト	詳細
4-1 ページの「成功した移行の検証」		第 4 章
5-4 ページの「特定のトランザクション中に加えられた変更のロールバック」		第 5 章
	トランザクション ID _____ ロールバックの日付: _____ ロールバックの理由: _____	
5-9 ページの「環境 (ディレクトリ) スナップショットの内容のリストア」		第 5 章
	スナップショット ID _____ リストアの日付: _____ リストアの理由: _____	

別のツールを使用した他のデータの移行のチェックリスト

Oracle Access Manager Configuration Manager では、LDAP ディレクトリ内のデータのみが移行されます。ファイルは移行されません。

表 A-12 の項目は、Oracle Access Manager Configuration Manager を使用した移行でサポートされていません。表 A-12 のデータを移行するには、チェックイン、チェックアウトおよびデプロイに対して別のコード管理製品を使用する必要があります。このマニュアルでは、別のツールの詳細は説明していません。

表 A-12 別のツールを使用して移行するデータ

チェック	説明
	Oracle Access Manager Configuration Manager を使用して移行できないデータ
	データ・タイプ _____ データの移行に使用するツール _____
■	PPP カタログ (およびコールされる関連するスクリプト / コード) _____
■	JavaScript _____
■	イメージ _____
■	スタイルシート _____
■	認証プラグイン・コード (ある場合) _____
■	認可プラグイン・コード (ある場合) _____

Configuration Manager の問題の トラブルシューティング

次の情報を参照し、Oracle Access Manager Configuration Manager のインストールおよび設定中、およびデータの移行中に発生する問題のトラブルシューティングの参考にしてください。この章の内容は次のとおりです。

- [ログ・ファイルへのアクセスおよびその使用](#)
- [監査ファイルへのアクセスおよびその使用](#)
- [OC4J インストールおよび設定の問題のトラブルシューティング](#)
- [Oracle Database のインストールおよび設定の問題のトラブルシューティング](#)
- [Configuration Manager の問題のトラブルシューティング](#)

ログ・ファイルへのアクセスおよびその使用

Oracle Access Manager Configuration Manager では、Oracle Diagnostic Logging for Java (ODL) を使用してログ・ファイルを生成します。ODL ライブラリは、ojdl.jar の Configuration Manager に組み込まれています。

ログ・ファイルを使用して、データの移行、スナップショットの作成および新しい環境の追加などの Configuration Manager のアクティビティを検証できます。ログ・エントリには、Oracle Access Manager Configuration Manager、Oracle Database リポジトリおよび環境（ディレクトリ・サーバー）の詳細が含まれます。たとえば、リポジトリがオフライン時に、新しい環境（ディレクトリ）詳細を Configuration Manager に追加すると、データベースが実行されていないというログ・エントリが作成されます。

ログ・ファイル・ネーミング:次に現行の ODL ログ・ファイル・ネーミング標準を示します。つまり、新しいログ・ファイルが作成されると、log.xml と命名されます。生成されたログ・ファイルは、次の場所に格納されます。

```
$OC4J_Home/j2ee/home/log/OAMCMLogs/log.xml
```

ログ・ファイル・ローテーション:ログ・ローテーションは自動的にファイル・サイズに基づいて行われます。つまり、現行ログが一定のサイズに達すると、自動的にログ・ファイルが置き換えられます。ログ・ファイルの最大サイズは 100MB に制限されています。現行ファイルのサイズがサイズ制限に達すると、新しいファイルが log.xml として作成され、それ以前のログ・ファイルの内容が別名でアーカイブされます。アーカイブされたログ・ファイルは logindex.xml と命名されます。このとき、index は番号です。index 番号の小さい方が、古いアーカイブ・ファイルです。log1.xml が最も古く、log2.xml がその次と続きます。

次のファイルのパラメータを更新して、ログ・ファイル・ローテーションを設定してください。

```
oc4j_install_dir/j2ee/home/config/j2ee-logging.xml
```

Configuration Manager ログ・ファイル・ローテーションは、主に次の HMLogger エントリです (maxFileSize の値はバイト単位です)。

```
<log_handlers>
  <log_handlername='HMLog-Handler'
    class='oracle.core.ojdl.logging.ODLHandlerFactory'>
    <property name='path' value='../log/OAMCMLogs'/>
    <property name='maxFileSize' value='10485760'/>
    <property name='maxLogSize' value='104857600'/>
    <property name='encoding' value='UTF-8'/>
  </log_handler>
</log_handlers>
```

ログ・ファイルの内容およびロギング・レベル

ログ・ファイルには、操作名、操作を実行した個人、タイムスタンプ、操作のステータスおよび後述するエラーが含まれます。J2SE には、2 つの標準フォーマッタがあります。

- SimpleFormatter: ログ・レコードの概要を人間が読めるように記述
- XMLFormatter: 詳細な XML 構成の情報を記述

XML ファイルとしてログ・ファイルを表示するか、独自に設計したスタイルシートを適用してファイルを表示することができます。Oracle Access Manager Configuration Manager は、このためのスタイルシートを提供しません。

標準のイベント情報は管理者に提供されます。下位レベルのトレースおよびデバッグ情報は、アドバンスド管理者に提供可能です。特定のイベントおよびイベントを表示できるユーザーの詳細は、表 B-4 を参照してください。

ログ・ファイルの例を次に示します。

```
<MESSAGE>
  <HEADER>
    <TSTZ_ORIGINATING>2006-07-20T18:57:17.968+05:30</TSTZ_ORIGINATING>
    <COMPONENT_ID>oracle</COMPONENT_ID>
    <MSG_TYPE"NOTIFICATION"></MSG_TYPE>
    <MSG_LEVEL>1</MSG_LEVEL>
    <HOST_ID>ps0065</HOST_ID>
    <HOST_NWADDR>10.77.199.149</HOST_NWADDR>
    <MODULE_ID>hm.log.HMLogger</MODULE_ID>
    <THREAD_ID>10</THREAD_ID>
    <USER_ID>sharadchandra_chaval</USER_ID>
  </HEADER>
  <CORRELATION_DATA>

  <EXEC_CONTEXT_ID><UNIQUE_ID>10.77.199.149:25178:1153402038031:0</UNIQUE_ID>
  <SEQ>0</SEQ></EXEC_CONTEXT_ID>
  </CORRELATION_DATA>
  <PAYLOAD>
    <MSG_TEXT>Entering Into Method - com.oracle.hm.hmobjectshandler.
      HMObjectsHandler.getInstance </MSG_TEXT>
  </PAYLOAD>
</MESSAGE>
...
<MESSAGE>
  <HEADER>
    <TSTZ_ORIGINATING>2006-07-20T18:57:18.062+05:30</TSTZ_ORIGINATING>
    <COMPONENT_ID>oracle</COMPONENT_ID>

    <MSG_TYPE TYPE="NOTIFICATION"></MSG_TYPE>
    <MSG_LEVEL>1</MSG_LEVEL>
    <HOST_ID>ps0065</HOST_ID>
    <HOST_NWADDR>10.77.199.149</HOST_NWADDR>
    <MODULE_ID>hm.log.HMLogger</MODULE_ID>
    <THREAD_ID>10</THREAD_ID>
    <USER_ID>gail_tiberi</USER_ID>
  </HEADER>
```

それぞれのログ・メッセージには必須属性がいくつか含まれ、追加のオプション属性が含まれる場合もあります。

必須属性:すべての診断ログ・メッセージには次の属性が必要です。

- タイムスタンプ
- コンポーネント ID
- メッセージ・タイプ
- メッセージ ID (通知タイプ以上の各メッセージ)
- 実行コンテキスト ID
- メッセージ・レベル
- メッセージ・テキスト
- モジュール ID (コンポーネントが単一モジュール・コンポーネントの場合は、コンポーネント ID を使用)

オプション属性:診断ログ・メッセージは次の属性を持つことができます。

- 組織 ID
- インスタンス ID
- ユーザー ID
- メッセージ引数
- プロセス ID
- スレッド ID
- ホスト ID
- ホスト・ネットワーク・アドレス
- 追加詳細

注意: ロギング・サービスで、インスタンス ID、プロセス ID、ホスト ID およびホスト・ネットワーク・アドレスが提供されます。暗黙的属性の使用を避けてください。

コンポーネント固有属性: サプリメンタル属性フィールドを使用して、コンポーネントはコンポーネント固有の追加属性を追加できます。このような属性の定義および内容は、それぞれのコンポーネント固有です。また、Oracle Enterprise Manager ではわかりやすい名前 (たとえば WIP) を使用してください。

暗黙的属性: 属性の値は、ログ・メッセージに明示的に表示されない場合でも、コンテキストから暗黙的な場合があります。たとえば、そのコンポーネントのログ・メッセージのみを含むプライベート・ログをコンポーネントが持つ場合（たとえば、OC4J のログが OC4J インスタンスのメッセージのみの場合）、そのログを所有するコンポーネントに設定されたコンポーネント ID 属性をすべてのログ・メッセージが持つとみなされます。暗黙的属性の使用を避けてください。

表 B-1 に、ODL ログ・メッセージ・テキスト・フォーマット・フィールドの詳細を示します。

表 B-1 ODL ログ・メッセージ・テキスト・フォーマット・フィールド

フィールド名	短縮名	必須 (Y/N)	コメント
TIMESTAMP, ORIGINATING	N/A	Y	値がない場合は、[] を使用。
TIMESTAMP, NORMALIZED	N/A	N	値がない場合は、[] を使用。
COMPONENT ID	N/A	Y	値がない場合は、[] を使用。
MESSAGE ID	N/A	Y	値がない場合は、[] を使用。
MESSAGE TYPE	N/A	Y	値がない場合は、[] を使用。
MESSAGE LEVEL	N/A	Y	値がない場合は、[] を使用。
MODULE ID	N/A	Y	
MESSAGE TEXT	N/A	Y	
EXECUTION_CONTEXT_ID	ecid	Y	
ORGANIZATION_ID	org	N	
HOSTING_CLIENT_ID	hostingClientid	N	
MESSAGE_GROUP	group	N	
HOST_ID	host	N	
HOST_NWADDR	nwaddr	N	
PROCESS_ID		N	
THREAD_ID	tid	N	
USER_ID	userid	N	
UPSTREAM_COMPONENT_ID	upstreamComp	N	
DOWNSTREAM_COMPONENT_ID	downstreamComp	N	
ERROR_INSTANCE_ID	errid	N	
DETAIL_LOCATION	detailLoc	N	

診断メッセージ属性の詳細を、表 B-2 で説明します。

表 B-2 ログ・ファイル診断メッセージ属性

属性名	説明	例
タイムスタンプ、発生時	メッセージが生成された日付と時間タイムスタンプの精度は、できるだけ高くする必要があります。少なくとも秒単位が必要ですが、ミリ秒を使用することをお勧めします。	2003-12-20T12:30:45.123-08:00
タイムスタンプ、正規化済	メッセージを生成したホストと一般リポジトリのホストとの間の時間差を調整済のメッセージが生成された日付および時間。このフィールドは、ログ・メッセージが集中リポジトリに書き込まれた場合にのみ設定されます。コンポーネントで設定しないでください。	2003-12-20T12:30:45.123-08:00
組織 ID	メッセージを発生させたコンポーネントを書き込んだ組織。すべての Oracle コンポーネントに <code>oracle</code> を使用してください。	oracle
コンポーネント ID	メッセージを発生させたコンポーネント。	OHS
インスタンス ID	メッセージを発生させるコンポーネントが属するインスタンス。通常、このフィールドは、メッセージが集中リポジトリに書き込まれた場合にのみ設定されます。	OraHome1.mjgoncal-sun.us. oracle.com
メッセージ ID	メッセージを一意に識別する短縮識別子。メッセージ ID の書式は、 <code><component prefix>-<message number></code> でなければなりません。この場合、 <code><component prefix></code> は短縮コンポーネント接頭辞（最大 6 文字）で、 <code><message number></code> は 5 桁の数字です。	MAS-12345
メッセージ・タイプ	メッセージのタイプ。INTERNAL_ERROR、ERROR、WARNING、NOTIFICATION および TRACE の 5 つのメッセージ・タイプが定義されています。また、タイプがわからない場合は、値 UNKNOWN を使用できます。	NOTIFICATION
メッセージ・レベル	メッセージ・タイプを修飾するレベルで、メッセージの重大度の程度を表します。値は、1（重大度最高）から 32（重大度最低）の整数です。	1
ホスト ID	メッセージが発生したホスト名。Java では、この値は <code>java.net.InetAddress.getLocalHost().getHostName()</code> で返されます。	mjgoncal-sun.us.oracle.com
ホスト・ネットワーク・アドレス	メッセージが発生したホストのネットワーク・アドレス。Java では、この値は <code>java.net.InetAddress.getLocalHost().getHostAddress()</code> で返されます。	138.1.42.113
モジュール ID	メッセージを発生させたモジュールの識別子。値はコンポーネント固有です。	main
プロセス ID	メッセージを生成したプロセスまたは実行単位の識別子。値は、オペレーティング・システム PID またはプロセスの識別に使用できるそれ以外の値です。	1234
スレッド ID	メッセージを生成したスレッドの識別子。	main
ユーザー ID	メッセージを発生させた実行コンテキストを所有するユーザー。	scott
サブリメンタル属性	アプリケーション固有の追加的なメッセージ属性のリスト。各サブリメンタル属性には、名前および値を指定する必要があります。	name=URL、 value=/dmsoc4j/Spy

表 B-2 ログ・ファイル診断メッセージ属性（続き）

属性名	説明	例
実行コンテキスト ID	発生コンポーネントが属する実行スレッドの一意のグローバル識別子および順序番号。この識別子は、同じ実行スレッドに含まれる複数のコンポーネントから発生するメッセージを関連付けるために使用されます。	1234567890,1
メッセージ・テキスト	メッセージの説明テキスト。最大 1000 文字の、イベントの概略です。	
追加詳細	イベントの追加情報。これには、メッセージ・テキストよりも詳細な情報が含まれます。たとえば、Java スタック・トレースはメッセージ・テキストではなく、追加詳細に含まれます。	java.lang.NullPointerException at Test.main(Test.java:20)

ロギング・レベルおよびメッセージ・タイプ

java.util.logging で、レベルはクラスのオブジェクト java.util.logging.Level で表されます。レベルには事前定義されたものがいくつかあります (SEVERE、WARNING、INFO、CONFIG、FINE、FINER、FINEST)。ただし、アプリケーションでレベルを作成して追加できます。各レベルは、整数の値で一意に識別されます。つまり、指定できる整数の各値に対して、新しいレベル・オブジェクトを作成できます。

Java レベルは、ODL メッセージ・タイプおよびレベルにマッピングされます。一般に、コンポーネント構成で公開する必要があるのは、ODL メッセージ・タイプおよびレベルのみです。ODL メッセージ・タイプおよびレベルの java.util.logging.Level へのマッピングは、レベル・クラスのサブクラスで指定されます。すべての指定できる Java レベル (Integer.MIN_VALUE to Integer.MAX_VALUE) は、マッピングを持ちます。事前定義のレベルをコンポーネントで使用するのに制限はありません。事前定義 Java レベルのマッピングを表 B-3 に示します。

表 B-3 Java レベルおよび対応する ODL メッセージ・タイプ: レベル

Java レベル	ODL メッセージ・タイプ: レベル
SEVERE.intValue()+100	INTERNAL_ERROR:1
SEVERE	ERROR:1
WARNING	WARNING:1
INFO	NOTIFICATION:1
CONFIG	NOTIFICATION:16
FINE	TRACE:1
FINER	TRACE:1
FINEST	TRACE:32

整数の値を持つ Java レベルが事前定義の 2 つのレベルにあてはまる場合、そのレベルと次の事前定義レベルの違いに応じて、次にマッピングされたメッセージ・タイプにマッピングされます (ODL レベルは適切な値に設定されます)。FINEST より低く、SEVERE.intValue() + 100 よりも高い Java レベルは、UNKNOWN にマッピングされます。

メッセージ・タイプ INTERNAL_ERROR、ERROR、WARNING および NOTIFICATION には、短縮コンポーネント接頭辞 (3 ~ 6 文字) および 5 桁のメッセージ番号からなるメッセージ ID が指定されます。たとえば、MAS-12345 などです。

ログ・ファイル・メッセージ・タイプおよびレベルの詳細を表 B-4 で説明します。

表 B-4 ログ・ファイル・メッセージ・タイプ

ODL メッセージ・タイプ / レベル (Java レベル)	対象	説明	必要なボリューム
INTERNAL_ERROR:1 (SEVERE.intValue()+100)	システム管理者、アプリケーション開発者、オラクル社カスタマ・サポート・センター	製品のバグが原因の、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡する必要がある重大な問題。内部エラーの発生が、診断フレームワークによる問題の生成をトリガーします。	低。パフォーマンスに影響はありません。
ERROR:1 (SEVERE)	システム管理者、アプリケーション開発者、オラクル社カスタマ・サポート・センター	システム管理者が即時に対処する必要がある重大な問題。原因は製品のバグではありません。	低。パフォーマンスに影響はありません。
WARNING:1 (WARNING)	システム管理者、アプリケーション開発者、オラクル社カスタマ・サポート・センター	システム管理者が確認する必要がある潜在的な問題。	低。パフォーマンスに影響はありません。
NOTIFICATION:1 (INFO)	システム管理者、アプリケーション開発者、オラクル社カスタマ・サポート・センター	システムで発生する通常のイベント。パフォーマンスに影響はありません。これは製品出荷時のデフォルト・レベルです。	低。
NOTIFICATION:16 (CONFIG)	システム管理者、アプリケーション開発者、オラクル社カスタマ・サポート・センター	通常イベント・レポートのより詳細な単位のレベル。パフォーマンスへの影響は最小です。これは製品のデフォルトのレベルではありませんが、製品のパフォーマンスに大きな影響を与えずに、このレベルを本番環境で広範囲に有効化できます。	低から中程度。
TRACE:1 (FINE)	アドバンスト・システム管理者、アドバンスト・アプリケーション開発者、オラクル社カスタマ・サポート・センター	パブリック API エントリ / エグジット・ポイントなど、製品のエンド・ユーザーに有意なイベントのトレースまたはデバッグ情報。内部実装の詳細を知らない場合でも理解できるように、メッセージはわかりやすくする必要があります。小規模なパフォーマンスへの影響があります。このレベルを本番環境で広範囲に有効化して、製品の問題をデバッグできます。このレベルのロギングを有効化すると小規模なパフォーマンスへの影響がありますが、製品が使用できなくなることはありません。このレベルを本番システムで有効化すると、パフォーマンスに大きな影響を与えずに、循環メモリー・バッファ (MemoryHandler) に書き込むことができます。	中程度。
TRACE:16 (FINER)	オラクル社カスタマ・サポート・センター	オラクル社カスタマ・サポート・センターが特定のサブシステムの問題を診断する際に有用な詳細なトレースまたはデバッグ情報。オラクル社カスタマ・サポート・センター・エンジニアが、製品を十分理解しているが、内部実装の完全な詳細を知らない場合でも理解できるように、メッセージはわかりやすくする必要があります。製品の問題をデバッグする特別な状況以外では、このレベルを本番環境で有効化しないでください。少数の特定のサブシステム (ログ出力) 以外では、このレベルを広範囲に製品で有効化しないでください。	高。
TRACE:32 (FINEST)	オラクル社 DDR	通常、オラクル社の製品開発者およびメッセージを生成するサブシステムの実装を詳しく知っている人を対象にした、非常に詳細なトレースまたはデバッグ情報。このレベルは本番環境で有効化せず、テストまたは開発環境で製品をデバッグするために使用してください。	非常に高。

監査ファイルへのアクセスおよびその使用

Oracle Access Manager Configuration Manager は、特定のイベントを監査し、Oracle Database リポジトリのすべての監査エントリを OCMAUDIT 表に格納します。Oracle Database リポジトリ内の OCMAUDIT 表を問い合わせ、外部アプリケーションを使用してこれらのレポートを表示できます。

Oracle Access Manager Configuration Manager が監査する機能のイベント・タイプを、表 B-5 に示します。

表 B-5 監査されるイベント・タイプおよび機能

	読み込み/アクセス	書き込み/追加/作成	更新	削除	リストア
環境機能	Y		Y	Y	
関連付け機能	Y		Y	Y	
変換ルール機能	Y		Y	Y	
スナップショット機能	Y			Y	Y
トランザクション機能	Y		Y	Y	
データベース構成機能			Y		

Oracle Database リポジトリから Microsoft Excel スプレッドシートへ、Oracle Access Manager Configuration Manager の監査表をエクスポートすると、レポートが生成されます。Crystal Reports を使用すると、独自の構成で監査レポートを表示できます。

監査レポートの作成

1. Oracle Database リポジトリの OCMAUDIT 表を問い合わせます。
2. OCMAUDIT 表をスプレッドシート・アプリケーションにエクスポートします。
3. 外部レポート作成ツール (Crystal Reports) を使用して、レポートを表示します。

表 B-6 に Oracle Access Manager Configuration Manager の監査レポートの例を示します。

表 B-6 監査レポートの例

COMPONENT_NAME	EVENT_TYPE	EVENT_OWNER	EVENT_DATETIME	EVENT_STATUS	EVENT_DESCRIPTION
Snapshot	Create	User_A	Fri Nov 03 13:50:07 GMT+05:30 2006	Successful	Create Snapshot SnapshotName=TestSnapshot, EnvironmentName=10104DEV
Snapshot	Restore	User_A	Fri Nov 03 13:51:23 GMT+05:30 2006	Successful	Create Snapshot SnapshotName=TestSnapshot, EnvironmentName=10104DEV
Snapshot	Restore	User_A	Fri Nov 03 13:51:36 GMT+05:30 2006	Successful	Create Snapshot SnapshotName=TestSnapshot, EnvironmentName=10104DEV
Database_Configuration	Update	Admin_A	Fri Nov 03 13:53:16 GMT+05:30 2006	Successful	Update Database_Configuration
Environment	Create	User_B	Fri Nov 03 14:07:40 GMT+05:30 2006	Successful	Create: EnvironmentName=TestAudit
Environment	Create	User_B	Fri Nov 03 14:07:41 GMT+05:30 2006	Successful	Add Environment Parameter : EnvironmentName=TestAudit, Parameter : password=TestAudit
Environment	Create	User_B	Fri Nov 03 14:07:41 GMT+05:30 2006	Successful	Add Environment Parameter : EnvironmentName=TestAudit, Parameter : config-dn=TestAudit
Environment	Create	User_B	Fri Nov 03 14:07:41 GMT+05:30 2006	Successful	別のエントリはこの表には含まれません。

表 B-6 監査レポートの例 (続き)

COMPONENT_NAME	EVENT_TYPE	EVENT_OWNER	EVENT_DATETIME	EVENT_STATUS	EVENT_DESCRIPTION
Environment	Create	User_B	Fri Nov 03 14:07:41 GMT+05:30 2006	Successful	Add Environment Parameter : EnvironmentName=TestAudit, Parameter : port=1947
Environment	Update	User_B	Fri Nov 03 14:10:38 GMT+05:30 2006	Successful	Create: EnvironmentName=TestAudit, Parameters : Description=TestAuditChanging
Environment	Update	User_B	Fri Nov 03 14:10:40 GMT+05:30 2006	Successful	Update Environment Parameter : EnvironmentName=TestAudit, Parameters : password=TestAudit
Environment	Update	User_B	Fri Nov 03 14:10:40 GMT+05:30 2006	Successful	Update Environment Parameter : EnvironmentName=TestAudit, Parameters : config-dn=TestAudit
Environment	Update	User_B	Fri Nov 03 14:10:40 GMT+05:30 2006	Successful	Update Environment Parameter : EnvironmentName=TestAudit, Parameters : hostName=TestAudit
Environment	Update	User_B	Fri Nov 03 14:10:40 GMT+05:30 2006	Successful	別のエントリはこの表には含まれません。
Environment	Delete	User_B	Fri Nov 03 14:11:23 GMT+05:30 2006	Successful	Delete Environment Parameters : EnvironmentName=TestAudit
Association	Create	User_A	Fri Nov 03 14:13:39 GMT+05:30 2006	Successful	Create: AssociationName=TestAuditAssociation
Association	Update	User_A	Fri Nov 03 14:13:39 GMT+05:30 2006	Successful	Update : AssociationName=TestAuditAssociation
Transformation_rule	Delete	User_A	Fri Nov 03 14:14:49 GMT+05:30 2006	Successful	Delete Transformation Rules For Association : AssociationName=TestAuditAssociation
Association	Delete	User_A	Fri Nov 03 14:13:39 GMT+05:30 2006	Successful	Delete : AssociationName=TestAuditAssociation
Transaction	Create	User_A	Fri Nov 03 14:19:14 GMT+05:30 2006	Successful	Started Transaction TransactionID=2114, AssociationName=1014Dev-QA
Transaction	Update	User_A	Fri Nov 03 14:19:14 GMT+05:30 2006	Successful	Update Transaction Status : TransactionID=2114
Transaction	Commit	User_A	Fri Nov 03 14:19:23 GMT+05:30 2006	Successful	Commit Transaction : TransactionID=2114

OC4J インストールおよび設定の問題のトラブルシューティング

この項では、OC4J のインストールおよび設定で、次に示す問題が発生した場合の有用なヒントを説明します。

- [OC4J 管理者のパスワードの変更](#)
- [OC4J を構成して、Oracle Access Manager Configuration Manager を認識](#)
- [OC4J ホストでの OC4J インストール準備の完了の確認](#)
- [管理者権限を OC4J に定義](#)
- [スタンドアロン構成への OC4J のインストール](#)
- [OC4J の「ようこそ」ページが表示されない](#)
- [OC4J の起動と停止](#)
- [Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールの使用](#)

詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』のトラブルシューティングのヒントを参照してください。

OC4J 管理者のパスワードの変更

問題：OC4J 管理者のパスワードの変更

インストール中に、oc4jadmin アカウントにパスワードを指定するよう求められます。OC4J のインストール時にこのアカウントのパスワードを割り当てない場合は、OC4J の初回起動時に設定するよう求められます。

解決方法：

インストール後のパスワード変更の詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』の OC4J 管理のツールに関する章を参照してください。

OC4J を構成して、Oracle Access Manager Configuration Manager を認識

問題：OC4J を構成して、Oracle Access Manager Configuration Manager を認識

OC4J を構成して、Configuration Manager アプリケーションを認識する方法。

解決方法：

2-12 ページの「[Configuration Manager のデプロイ](#)」の説明に従って、OC4J を使用して Oracle Access Manager Configuration Manager をデプロイする必要があります。OC4J に追加の Web サイトを作成する方法の詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』の OC4J の Web サイトの管理に関する章を参照してください。

OC4J ホストでの OC4J インストール準備の完了の確認

問題：OC4J ホストでの OC4J インストール準備の完了の確認

スタンドアロン OC4J サーバーをインストールする前に、対象のホスト・コンピュータが適切に設定されていることを確認する方法。

解決方法：

スタンドアロン OC4J サーバーをインストールする前に、2-7 ページの「[OC4J のインストールおよび構成](#)」で説明する前提条件を満たしていることを確認してください。詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』の第 2 章を参照してください。

管理者権限を OC4J に定義

問題：管理者権限を OC4J に定義

管理者権限を OC4J に定義する方法。

解決方法：

OC4J スタンドアロン・インストール中に、oc4jadmin アカウントにパスワードを指定するよう求められます。このアカウントには、ユーザーおよびロールの管理と JMX MBean サーバーへの接続に使用される oc4j-administrators ロールが割り当てられます。OC4J のインストール時にこのアカウントのパスワードを割り当てない場合は、OC4J の初回起動時に設定するよう求められます。

概要および手順は、2-7 ページの「[OC4J のインストールおよび構成](#)」を参照してください。OC4J での管理者権限の定義の詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』を参照してください。

スタンドアロン構成への OC4J のインストール

問題：スタンドアロン構成への OC4J のインストール

スタンドアロン構成に OC4J をインストールして、Oracle Access Manager Configuration Manager と一緒に使用する方法。

解決方法：

OC4J スタンドアロン構成のインストール方法は、Oracle Access Manager Configuration Manager を使用するかどうかにかかわらず同じです。概要および手順は、2-7 ページの「[OC4J のインストールおよび構成](#)」を参照してください。詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』のスタンドアロンの OC4J のインストールに関する章を参照してください。

OC4J の「ようこそ」ページが表示されない

問題：OC4J の「ようこそ」ページが表示されない

インストール後に、「ようこそ」ページが表示されない場合の対処方法。

解決方法：

ホスト、ポートおよびコンソールに入力した URL が正しいことを確認してください（たとえば、`http://hostname:port/em/console`）。個別のトラブルシューティングのヒントは、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』を参照してください。

OC4J の起動と停止

問題：OC4J の起動と停止

OC4J を起動および停止する方法。

解決方法：

OC4J の起動および停止の詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』の対応する章を参照してください。

Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールの使用

問題：Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールの使用**解決方法：**

Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールは、Web ベースの管理アプリケーションで、OC4J とともにデフォルトでインストールされ、インストール直後に有効化されます。管理インタフェースの使用の詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』の Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールに関する説明を参照してください。

Oracle Database のインストールおよび設定の問題の トラブルシューティング

ここでは、Oracle Access Manager Configuration Manager への Oracle Database リポジトリのインストールまたは設定で、問題またはエラーが発生した場合の有用な情報を説明します。次の項目について説明します。

- [特定のプラットフォームに Oracle Database をインストール](#)
- [Oracle Database の管理および運用の問題](#)
- [Oracle Database プロセスおよびファイルの管理の問題](#)

特定のプラットフォームに Oracle Database をインストール

問題：特定のプラットフォームへのインストール

インストール前に対象のホストが正しく設定されていることを確認する方法。

解決方法：

インストールおよび設定の詳細は、使用しているプラットフォームに適した Oracle Database のインストレーション・ガイドを参照してください。

Oracle Database の管理および運用の問題

問題：Oracle Database の管理および運用の問題

Oracle Database を正しく管理および運用する方法。

解決方法：

Oracle Database の管理および運用の詳細は、『Oracle Database 概要』を参照してください。

Oracle Database プロセスおよびファイルの管理の問題

問題：Oracle Database プロセスおよびファイルの管理

Oracle Database プロセスおよびファイルの管理の方法。

解決方法：

Oracle Database のプロセス、表領域、データファイル、一時ファイル、スキーマ・ファイル、Oracle 管理のファイルなどの管理方法の詳細は、『Oracle Database 管理者ガイド』を参照してください。

Configuration Manager の問題のトラブルシューティング

Configuration Manager を使用した操作が正常に完了しないと、通常、問題を通知するエラーが表示されます。ここでは、Oracle Access Manager Configuration Manager を使用して問題またはエラーが発生した場合の、有用な情報を説明します。次の項目について説明します。

- [スナップショットを作成できない](#)
- [環境（ディレクトリ）スナップショットの内容が表示されない](#)
- [Configuration Manager のインストール、設定およびリポジトリの問題](#)
- [Configuration Manager 内の環境の問題](#)
- [関連付けおよび変換ルールの問題](#)

スナップショットを作成できない

問題：エラーが発生し、「Unable to create snapshot」というメッセージが表示される新しいスナップショットを作成する操作に失敗します。

解決方法：

3-11 ページの「[環境の接続のテスト](#)」の説明に従い、環境への接続をテストして、環境が動作しオンラインであることを確認します。2-32 ページの「[リポジトリが Configuration Manager で使用可能であることの確認](#)」の説明に従い、リポジトリ接続をテストして、動作しオンラインであることを確認します。

環境（ディレクトリ）スナップショットの内容が表示されない

問題：環境（ディレクトリ）スナップショットの内容が表示されない

スナップショットの表示操作では、スナップショット名、説明、作成した日付およびスナップショットの作成者のリストのみ表示されます。

解決方法：

スナップショットの詳細は表示できますが、スナップショットの内容は表示できません。

Configuration Manager のインストール、設定およびリポジトリの問題

問題：Configuration Manager の「Welcome」ページが表示されない

「Welcome」ページが、Oracle Access Manager Configuration Manager をデプロイした後に表示されません。

解決方法：

2-12 ページの「[Configuration Manager のデプロイ](#)」のすべての手順を完了していることを確認してください。詳細は、『Oracle Containers for J2EE 構成および管理ガイド』のアプリケーションのデプロイに関するトラブルシューティングのヒントを参照してください。

問題：「System Configuration」タブにアクセスできない、またはリポジトリの詳細を追加できない

「System Configuration」タブを使用して、リポジトリを追加、Configuration Manager スキーマをアップロードまたは Configuration Manager とそのリポジトリとの間の接続をテストできません。

解決方法：

Oracle Access Manager Configuration Manager のシステム構成機能を使用できるのは、HMAAdmin 権限でログインするユーザーのみです。詳細は、2-16 ページの「[Configuration Manager の管理者ロールおよびユーザー・ロールの割当て](#)」を参照してください。

問題：リポジトリ接続テストが成功しない

リポジトリ接続テストが成功せず、エラー・メッセージが表示されます。

解決方法：

すべてのリポジトリが正しく入力されていることを確認し、必要に応じ編集してください。Oracle Database インスタンスが実行中であることを確認し、2-29 ページの「[Configuration Manager でのリポジトリの詳細の追加](#)」の手順に従って、接続を再テストします。接続テストが成功しない場合は、Oracle Database 管理者に連絡してください。

Configuration Manager 内の環境の問題

ここでは、Oracle Access Manager Configuration Manager の LDAP ディレクトリ環境で操作する際に発生する可能性がある問題の解決方法を説明します。ディレクトリのスナップショットの作成、データの移行またはトランザクションのロールバックに関連するすべての環境は、動作しオンラインである必要があります。

問題：証明書のアップロードが成功しない

環境（ディレクトリ）詳細を追加して、SSL が有効な通信の証明書をアップロードしようとして失敗すると、エラー・メッセージが表示されます。

解決方法：

メッセージの内容を確認して、エラー・ウィンドウの「Cancel」ボタンをクリックします。証明書ファイルおよびパスワードの場所を確認し、3-7 ページの「[Configuration Manager への環境の詳細の追加](#)」の手順に従って、証明書の手順を再実行します。

問題：接続に失敗する

環境への接続をテストすると、「Connection failure. For details refer to log file.」という情報メッセージが表示されます。

解決方法：

ディレクトリ管理者に通知し、B-2 ページの「[ログ・ファイルへのアクセスおよびその使用](#)」の説明に従って、ログ・ファイルの場所を報告してください。

問題：Configuration Manager で環境詳細が使用できない

環境を表示または関連付けを作成しようとしても、必要な環境がリストにありません。

解決方法：

3-7 ページの「[Configuration Manager への環境の詳細の追加](#)」で説明されているように、環境（ディレクトリ）詳細が Configuration Manager に追加されていることを確認します。

関連付けおよび変換ルールの問題

問題 : Configuration Manager で関連付け詳細が使用できない

関連付けを表示または変換ルールを追加しようとしても、必要な関連付けがリストにありません。

解決方法 :

3-14 ページの「[ディレクトリ関連付けの作成](#)」で説明されているように、関連付けが作成されているか確認します。

関連付けが移行中にリストに表示されない

必要な関連付けが、「Select Logical Objects to Compare」ページの「Migrate」サブタブの「Select Association」リストに表示されません。

解決方法 :

3-15 ページの「[ディレクトリ関連付けの有効化 / 無効化](#)」で説明されているように、必要な関連付けが有効であることを確認します。

問題：変換ルールが正しく作動しない

移行する論理オブジェクトのプレビュー後、変換ルールの結果が正しくありません。

解決方法：

ルールを表示（および必要に応じて変更）して、指定する論理オブジェクト・タイプおよび属性が適切で、演算子およびパラメータが正しいことを確認します。詳細は、3-21 ページの「[変換ルールの変更](#)」を参照してください。

用語集

COREid

以前の Oblix NetPoint または Oblix COREid の製品名が、Oracle COREid に変更された。Oracle COREid リリース 7.0.4 は、Oracle Application Server 10g Release 2 (10.1.2) の一部として提供される。[Oracle Access Manager](#) も参照。

LDAP

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) ディレクトリ。

LDIF ファイル (LDIF file)

Lightweight Directory Interchange Format (LDIF) ファイル。LDIF ファイルは ASCII 形式ファイルで、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) サーバー間で外部ツールを使用して、データを交換および同期化できる。

LogicalObject

論理オブジェクトおよびそれが持つ属性値および依存する論理オブジェクトのメモリー内構造。これは特定の環境 (ディレクトリ) に存在する実際の論理オブジェクトを表す。LogicalObject は 1 つ以上の物理エンティティに対する論理オブジェクト・タイプのマッピングを定義する。また、関連付けられたペア内で、ディレクトリの論理オブジェクトの間の依存性を定義する。論理オブジェクトの移行はアトミックである (論理オブジェクトおよびすべての依存性がターゲットにコピーされる)。[論理オブジェクト](#) も参照。

Oracle Access Manager

10g (10.1.4.0.1) から、旧称 Oracle COREid の製品は、Oracle Access Manager に名称を変更。[COREid](#) も参照。

移行 (Migration)

選択した論理オブジェクト (および関連する物理エンティティ) を、指定したソースから関連付けられたペアの指定したターゲット・ディレクトリに送信 (コピー) するプロセス。たとえば、QA デプロイで新しいパスワード・ポリシーを定義およびテストした場合、Oracle Access Manager Configuration Manager を使用してポリシーを本番システムに伝播できる。データを移行する場合、構成ツリーのすべての選択したエントリーは、ソース・ディレクトリ・サーバーから関連付けられたペアのターゲット・ディレクトリ・サーバーにコピーされる。

インポート (import)

選択した構成データを、Lightweight Directory Interchange Format (LDIF) ファイルにエクスポートし、後で、外部ツールを使用してデータをインポートできる。

エクスポート (export)

選択した構成データを、Lightweight Directory Interchange Format (LDIF) ファイルにエクスポートし、後で、外部ツールを使用してデータをインポートできる。

環境 (Environment)

エンタープライズの様々なデプロイ（開発、QA または本番）内で、Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 と連動するようにインストールおよび構成されたサポートされている LDAP ディレクトリ・サーバー。このようなディレクトリは、論理オブジェクトに対応する物理エンティティとして格納される Oracle Access Manager または Oracle COREid のいずれかの構成データを含む。[論理オブジェクト](#)も参照。

関連付け (Association)

指定のソース・ディレクトリとターゲット・ディレクトリのペアを示す用語。各ディレクトリ関連付けは、移行する論理オブジェクトを選択する指定のソース・ディレクトリから、指定のターゲット・ディレクトリまでを含む。指定のソース・ディレクトリとターゲット・ディレクトリのペア間の論理オブジェクトの移行に関連するすべての履歴が、関連付けに属する。

グローバリゼーション (globalization)

変更を加えずにどこでも同時にアクセスおよび実行が可能で、ユーザーの母国語とロケール・プリファレンスでコンテンツをレンダリングする、多言語アプリケーションとソフトウェア製品を提供する。Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) は、グローバリゼーションされた。[国際化](#)も参照。

構成管理 (Configuration Management)

特定の Oracle Access Manager（または Oracle COREid）構成データのライフ・サイクル管理。Oracle Access Manager Configuration Manager を使用すると、あるデプロイから同じリリースの別のデプロイに変更を送信できる。[環境](#)も参照。

構成データ (configuration data)

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) ディレクトリに格納される Oracle Access Manager または Oracle COREid の製品固有の構成データおよびアクセス・ポリシー・データ。

国際化 (internationalization)

Oracle の国際化標準では、Oracle Access Manager などのソフトウェア製品やアプリケーションが、US 以外のキーボードまたは他の国固有のハードウェアを装備したすべての言語のオペレーティング・システムで使用できる必要がある。アプリケーションは、言語文字列へのハードコーディングによる依存はなく、他の製品の US 以外のバージョンと相互運用し、分散環境でのマルチバイト・キャラクタおよび差異を処理し、ユーザーの目的のロケールを検出できる。Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) は、これらの要件を満たしている。[グローバリゼーション](#)も参照。

システム構成 (System Configuration)

HMAAdmin 権限を持つ個人が、Oracle Access Manager Configuration Manager リポジトリ情報を入力および編集できる Oracle Access Manager Configuration Manager のタブ。[リポジトリ](#)も参照。

水平移行 (Horizontal Migration)

構成データの変更を、ある Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 環境から別の環境にコピーするプロセス。10g (10.1.4.0.1) のデータのリリース 7.0.4 デプロイへのデータ移行およびその逆はできない。[環境](#)も参照。

スナップショット (Snapshot)

Oracle Access Manager Configuration Manager を使用した時点で指定のディレクトリに作成されたすべての論理オブジェクトの構成データのバックアップ・コピー。スナップショットは、論理オブジェクトのみを含む（たとえば、ワークフロー定義は含むが、ワークフロー・インスタンスは含まない）。スナップショットを使用して、スナップショットを作成した時点の状態にディレクトリをリストアできる（戻す）。

ソース (Source)

構成データの変更のコピーをターゲットに送信するように指定された Oracle Access Manager Configuration Manager の関連付けられたペアのディレクトリ。[ターゲット](#)も参照。

属性 (Attribute)

論理 (および物理) オブジェクトに関連する 1 つ以上の特性またはトレース。たとえば、論理オブジェクトのワークフロー定義には、名前属性、説明属性およびその他の属性が含まれる。

ターゲット (Target)

Oracle Access Manager Configuration Manager の関連付けられたペアの受信者環境 (ソースから構成データの変更のコピーを受け取る指定のディレクトリ)。環境およびソースも参照。

ディレクトリ (Directory)

Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 にインストールおよび構成された LDAP ディレクトリ。Oracle Access Manager Configuration Manager に追加される各ディレクトリは、関連付けられたペアのソースまたはターゲットのいずれかに指定される。環境も参照。

デプロイ (Deployment)

Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) または Oracle COREid リリース 7.0.4 の個別のインストールをデプロイと呼ぶ。エンタープライズには、開発または QA、本番または本番前のデプロイなど、1 つ以上のデプロイ・タイプが含まれる場合がある。複数のデプロイが同じタイプの場合もある。

デルタ (Delta)

関連付けられたペア (移行前) のソース・ディレクトリの論理オブジェクトとターゲット・ディレクトリの論理オブジェクトとの間の差異。論理オブジェクトも参照。

トランザクション (Transaction)

Oracle Access Manager Configuration Manager を使用して構成データをソースからターゲットに移行するたびに作成されるレコード。各トランザクション・レコードには、関連付けられるペアのソースからターゲットに移行された論理オブジェクト (およびその依存性) のグループ全体が含まれる。すべてのトランザクションのリストを選択できる。特定のトランザクションを選択し、トランザクション中に加えられた変更を表示できる。トランザクションを選択して変更をロールバックし、ターゲットを移行前の状態にリストアできる。論理オブジェクトも参照。

変換ルール (Transformation Rule)

ディレクトリ関連付け用に定義できるルール。変換ルールにより、選択した論理オブジェクトの属性を移行中に自動的に変更できる。移行も参照。

リストア (Restore)

ディレクトリ・スナップショットをリストアし、スナップショットを作成してから論理オブジェクトに加えられた変更を元に戻す。

リポジトリ (Repository)

インストールして Oracle Access Manager Configuration Manager とともに使用する Oracle Database。リポジトリに格納されるのは、移行トランザクション・データ、スナップショット、インポートする LDIF ファイルおよび監査詳細を含む移行情報である。Configuration Manager ログ・ファイルはリポジトリに格納されない。

ロールバック (Roll Back)

特定の移行トランザクション中に加えられた変更を元に戻し、ターゲット・ディレクトリの論理オブジェクトをその移行の前の状態に戻す。トランザクションも参照。

論理オブジェクト (Logical Object)

ほとんどのアプリケーションには、データを物理エンティティ（データベースの表またはディレクトリ・サーバーの LDAP エンティティ）として格納するリポジトリ（データベースまたはディレクトリ・サーバー）がある。多くの場合、物理エンティティのグループの論理的関連が非常に密接なため、個々の物理エンティティはアプリケーションに対してほとんど意味を持たないことがある。これらの物理エンティティは1つのオブジェクト（論理オブジェクト）名でグループ化できる。論理オブジェクトは、物理エンティティと1対1マッピングすることもできる。

論理オブジェクトが別の論理オブジェクトへの依存性を持つ場合がある。たとえば、Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) および Oracle COREid リリース 7.0.4 では、ワークフロー定義は構成情報であり、ワークフロー参加者に依存するワークフロー手順に依存性がある論理オブジェクトとみなされる。

Oracle Access Manager Configuration Manager は、論理オブジェクトをインストールされたあるデプロイから別のデプロイに移行（コピー）する。たとえば、Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) 開発ディレクトリから別の Oracle Access Manager 10g (10.1.4.0.1) 開発ディレクトリまたは 10g (10.1.4.0.1) Oracle Access Manager 本番ディレクトリに移行する。各論理オブジェクトの移行はアトミックである（論理オブジェクトおよびすべての依存状態がターゲットにコピーされる）。[LogicalObject](#) も参照。

索引

記号

!, 3-34, 5-3, 5-5
+, 3-34, 5-3, 5-5

数字

10g (10.1.4.0.1), 1-16
7.0.4 リリース, 1-16

A

Access Client の詳細, 1-6
Access Manager の詳細, 1-13, 2-5
Access Server クラスタの詳細, 1-6
Access Server の詳細, 1-6
Association Description, 3-13
「Association Details」ページ, 3-13
Association Name, 3-13
Associations, 2-26
Attribute, 3-21

B

Back, 2-24

C

CA Certificate File, 3-9
Cancel, 2-24
Cleanup Repository, 2-28
「Compare and Migrate」ページ, 1-9
Configuration DN, 3-6
Configuration Manager, 1-2
 アクセスの前提条件, 3-3
Configuration Manager のインストールの準備, 2-6
Configuration Manager のツアー, 2-23
Configuration Manager のデプロイ, 2-12
COREid, 1-1, 用語集-1
Customize, 3-40
「Customize」ページ, 3-35

D

DB プロファイル, 1-6
Directory Type, 3-6

E

Edit
 リポジトリ, 2-28
Environment Description, 3-6
Environment Name, 3-6
Environment Type, 3-6
Environment URL, 3-7
Environments, 2-26
Export to LDIF File, 5-6

G

Group Manager オプション, 1-6

H

HMAAdmin, 2-27
 管理者権限, 2-16
HMUser, 2-16, 3-3
Host Name, 3-6

I

Identity Server, 1-13, 2-5
Identity Server 定義, 1-6
ID システム
 IdentityXML, vii, viii
 構成, vii, viii
 構成データ, 1-6
 サポート対象外データ, 1-7
 ランタイム・データ, 1-6
IP アドレス, 1-9

J

JavaScript, 1-7

K

Keystore Password, 3-9

L

LDAP, 1-2, 1-6, 用語集-1
LDIF ファイル, 1-4, 1-10, 用語集-1
LDIF ファイルへのエクスポート, 3-41, 5-8
Logical Object Type, 3-21

LogicalObject, 用語集-1
「Logout」リンク, 2-24

M

Migrate, 2-26
「Migrate」セカンダリ・タブ, 2-26

N

Next, 2-25

O

oblix ツリー, 1-14
OC4J, 1-16
 管理構成, 2-7
 スタンドアロン構成, 2-7
Operator, 3-21
Oracle Access Manager, 1-1, 用語集-1
Oracle Access Manager Configuration Manager, 1-1
Oracle Access Manager の概要, vii
Oracle Application Server のリリース・ノート, vii
Oracle COREid Access and Identity Administration
 Guide Volume 2, viii
Oracle COREid Access and Identity Customization
 Guide, viii
Oracle COREid Access and Identity Deployment Guide,
 viii
Oracle COREid Access and Identity Developer Guide,
 viii
Oracle COREid Access and Identity Integration Guide,
 viii
Oracle COREid Access and Identity Schema Description,
 viii
Oracle Database, 1-4, 1-16

P

Policy Manager の詳細, 1-13, 2-5
PPP カタログ, 1-7
Previous, 2-25

Q

QA デプロイ, 1-2

R

Repository Type, 2-30
「Rollback」ボタン, 5-6

S

「SnapShot List」ページ, 2-25
「Snapshots」タブ, 2-25
Source Environment, 3-13
SSL, 3-7, 3-9
「System Configuration」タブ, 2-27

T

Target Environment, 3-13
 After Migration, 3-35
 After Rollback, 5-5
 Before Migration, 3-35
 Before Rollbac, 5-5
「Transactions List」ページ, 2-27
「Transactions」タブ, 2-27

U

Upload Schema, 2-28, 2-31
User DN, 3-6

W

WebPass 定義, 1-6

あ

アクションの要求, 2-28
アクセス・システム
 構成データ, 1-6
 サポート対象外データ, 1-7
 ランタイム・データ, 1-6
アクセス制御リスト, 1-13, 2-5
アクセスの前提条件
 Configuration Manager, 3-3

い

移行, 用語集-1
 計画, 1-11
 前提条件, 3-38
 タスク, 1-11
移行後のサーバーの再起動, 1-12, 3-42
移行タスク, 3-30
移行用のランタイム・データ・タイプ, 1-6
依存, 1-7, 1-9
一覧表
 デプロイ, 1-13
 デプロイごとの詳細情報, 1-13
イメージ, 1-7
インストール, vii, viii
 OC4J, 2-7
 スタンドアロン構成, 2-7
 Oracle Database リポジトリ, 2-6
 管理コンポーネントとしての OC4J, 2-9
インストールされるコンポーネント, 2-2
インポート・データ, 用語集-1

え

エクスポート, 1-10
 データ, 1-12
 データを LDIF ファイルへ, 3-31
エラー・メッセージ, 2-29

お

オブジェクト・クラス定義, 1-6
オブジェクト定義, 1-13, 2-5

か

開発環境デプロイ, 1-2

概要

- Configuration Manager のインストール, 2-2
- LDIF ファイルへのデータのエクスポート, 3-37
- 移行した変更の検証, 4-2
- 移行する論理オブジェクトの選択, 3-32
- 移行前のプレビュー, 3-36
- スナップショット, 1-14
- ターゲットのカスタマイズ, 3-35
- データの移行, 3-2
- トランザクション, 1-14
- ワークシートの計画の再定義, A-2

確認

- Access Client の詳細, 4-4, 4-6
- Access Server Cluster の詳細, 4-4, 4-6
- Access Server の詳細, 4-4, 4-6
- オブジェクト・クラス定義, 4-3, 4-5
- 管理者権限, 2-4
- グローバル監査ポリシー, 4-3, 4-5
- 属性アクセス制御ポリシー, 4-3, 4-5
- パネル, 4-3, 4-5
- ポリシー・ドメイン, 4-4, 4-6
- マスター監査ポリシー, 4-3, 4-5
- レポート・データ, 4-4, 4-6

カスタマイズ

- 属性, 5-7
- 元に戻す, 5-4
- 論理オブジェクト, 3-31

環境, 1-2, 1-3, 1-5, 用語集-2

前提条件, 3-5

環境固有の設定, 1-9

環境スナップショットの内容のリストア, 5-9

環境の詳細, 1-4

監査の詳細, 1-4

監査ポリシー, 1-6

管理

- 環境の詳細, 3-5
- スナップショット, 3-24
- 変換ルール, 3-17

管理者権限, 2-4

管理者情報, 1-6

管理者ロールおよびユーザー・ロールの割当て, 2-16

管理レポート, 1-6

関連付け, 1-3, 1-5, 用語集-2

詳細, 1-4

前提条件, 3-12

関連論理オブジェクト, 1-7, 1-8

き

記号, 1-9

キャッシュ, 1-12, 1-15

く

グローバルゼーション, 用語集-2

グローバル監査ポリシー, 1-6

け

計画, 1-13

Configuration Manager インスタンス, 2-3

一覧表, 1-13

考慮事項, 2-2

成果物, 1-13

デプロイごとの詳細情報, 1-13

ワークシート, A-1

検索ベース, 1-6

検証

10g (10.1.4.0.1) の ID システム・データの移行, 4-3

10g (10.1.4.0.1) のアクセス・システムのデータの移行, 4-4

Identity Server の定義, 4-3, 4-6

Oracle COREid Release 7.0.4 の ID システム・データの移行, 4-5

Oracle COREid Release 7.0.4 のアクセス・システムのデータの移行, 4-6

WebPass の定義, 4-3, 4-6

移行されたデータ, 1-12

監査ポリシー, 4-3, 4-5

管理者情報, 4-3, 4-6

サーバー設定, 4-3, 4-6

ディレクトリ・オプション, 4-3, 4-6

認可スキーム, 4-4, 4-6

認証スキーム, 4-4, 4-6

パスワード・ポリシー, 4-3, 4-5

ロスト・パスワード・ポリシー, 4-3, 4-5

ワークフロー構成詳細, 4-3, 4-5

検証の前提条件, 4-2

こ

構成

OC4J, 2-7

構成管理, 1-2, 用語集-2

構成ツリー, 1-16

構成データ, 1-2, 3-6, 用語集-2

移行可能なタイプ, 1-6

国際化, 用語集-2

コンポーネント

必要, 1-11

さ

サーバー・キャッシュ, 1-15

サーバー設定, 1-6

差異アイコン, 3-34, 5-3, 5-5

再起動, 1-15

Identity Server および Access Server, 3-31

削除

環境の詳細, 3-10

スナップショット, 3-28

ディレクトリ関連付け, 3-16

変換ルール, 3-23

論理オブジェクト, 5-4

作成

関連付け, 3-12

スナップショット, 3-24, 3-26

ディレクトリ関連付け, 3-14

サポート対象

データ・タイプ, 1-6

デプロイと相互運用性, 1-16

し

システム構成, 用語集-2
システム固有の設定, 1-9
指定

ソース, 1-16
ターゲット, 1-16

手動による属性のカスタマイズ, 3-36
証明書のアップロード, 3-9
進捗インジケータ, 2-26

す

水平移行, 用語集-2
水平なデータの移行, 1-2
スキーマのアップロード, 2-32
スタイルシート, 1-7
スナップショット, 1-4, 1-14, 3-24, 用語集-2
前提条件, 3-24

せ

設定
Oracle Database リポジトリ, 2-6
リポジトリ, 2-6
選択
カスタマイズするオブジェクト, 3-34
論理オブジェクト, 3-31, 3-39
選択解除
論理オブジェクト, 3-39
前提条件
Configuration Manager のロール, 2-16
移行, 3-38
環境, 3-5
関連付け, 3-12
ケンショウ, 4-2
スナップショット, 3-24
デプロイ, 2-12
変換ルール, 3-18
リポジトリ, 2-29

そ

相互運用性, 1-16
マトリックス, 1-16
ソース, 用語集-2
属性, 1-9, 用語集-3
属性アクセス制御ポリシー, 1-6
属性の更新, 3-40

た

ターゲット, 用語集-3
ターゲットのレビュー, 3-41
タスクの概要
Oracle Access Manager Configuration Manager によるデータの移行, 1-11
既存デプロイに対する環境の詳細の管理, 3-5
スナップショットの作成および管理, 3-24
ディレクトリ関連付けの作成および管理, 3-12
データの移行, 3-2, 3-31

変換ルールの追加および管理, 3-18
ホストの設定, インストールの準備, 2-6

ち

置換権限, 1-6

つ

追加
環境の詳細, 3-5, 3-7
変換ルール, 3-17, 3-20
リポジトリ, 2-28, 2-29
追加アイコン, 3-34, 5-3, 5-5
通知, 1-13

て

停止時間の評価, 1-15
ディレクトリ, 1-2, 用語集-3
オプション, 1-6
ディレクトリ・サーバー・インスタンス, 1-13, 2-5
ディレクトリ・サーバー・プロファイル, 1-13, 2-5
データ・ストア, 1-4
データの移行, 1-2, 1-11, 1-12, 3-30, 3-38
データのエクスポート, 1-4, 用語集-1
データの準備および移行, 3-2
データベース・インスタンス・プロファイル, 1-13, 2-5
データベース管理者のユーザー ID, 2-30
適用
変換ルール, 3-31
手順
Configuration Manager
Configuration Manager にアクセスする手順, 2-23, 3-3
Configuration Manager をデプロイする手順, 2-12
HMAAdmin ロールおよび HMUser ロールを作成して割り当てる手順, 2-17
ID システム
7.0.4 ID システム・データの移行を検証する手順, 4-5
OC4J
OC4J スタンドアロン・サーバーをインストールする手順, 2-8
Oracle Application Server J2EE Server 構成をインストールする手順, 2-11
移行
移行後のデータの同期を保証する手順, 3-43
データを移行する手順, 3-38
環境
環境がオンラインであることを確認する手順, 3-11
環境の詳細を削除する手順, 3-11
環境の詳細を表示する手順, 3-7
詳細を追加する手順, 3-8
ディレクトリ環境の詳細を変更する手順, 3-10
管理者
他の管理者に通知する手順, 3-4
管理者権限
管理権限を決定または確認する手順, 2-4
関連付け
関連付けの設定を表示する手順, 3-13
関連付けを作成する手順, 3-15

- ディレクトリ関連付けを削除する手順, 3-17
- ディレクトリ関連付けを有効（または無効）にする手順, 3-16
- 計画
 - 一覧表を作成し、ソース・デプロイで変更をテストしてターゲットを正しく調整する手順, 2-5
- 検証
 - 10g (10.1.4.0.1) ID システム・データの移行を検証する手順, 4-3
 - 10g (10.1.4.0.1) アクセス・システムのデータの移行を検証する手順, 4-4
 - リリース 7.0.4 のアクセス・システムのデータの移行の検証, 4-6
- スナップショット
 - スナップショットの詳細を表示する手順, 3-25
 - スナップショットの内容をリストアする手順, 3-29, 5-9
 - スナップショットを削除する手順, 3-28
 - スナップショットを作成する手順, 3-27
- トランザクション
 - 特定の移行トランザクション中に行われた変更をロールバックする手順, 5-7
 - トランザクションの詳細を表示する手順, 5-3
- 変換ルール
 - 変換ルールを削除する手順, 3-23
 - 変換ルールを追加する手順, 3-20
 - 変換ルールを表示する手順, 3-19
 - 変換ルールを編集する手順, 3-22
- リポジトリ
 - Oracle Database Server 10g リリース 2 (10.2) をインストールする手順, 2-6
 - リポジトリが使用可能であることを確認する手順, 2-33
 - リポジトリの詳細を Oracle Access Manager Configuration Manager に追加する手順, 2-30
- ロールバック
 - 特定の移行トランザクション中に行われた変更をロールバックする手順, 5-7
- テスト, 4-2
 - 移行前後の変更の評価, 1-13
 - 環境, 3-38
 - 環境の接続, 3-11
 - 既存デプロイでの操作, 2-4
 - 接続, 2-28, 2-31, 2-33
 - デプロイ, 1-13
- デプロイ, 1-2, 用語集-3
 - 一覧表, 1-13
 - 前提条件, 2-12
- 展開
 - 比較するオブジェクト, 3-33

と

- 同種デプロイ, 1-16
- ドメイン名, 1-9
- トラブルシューティング, 1-12
- トランザクション, 用語集-3
 - データ, 1-4
 - レコード, 1-9
- トランザクションの説明の割当て, 3-41
- トランザクション・レコード, 1-14, 5-2

な

- ナビゲーション・ツリー, 1-8

に

- 入力
 - トランザクションの説明, 3-31
- 認可, vii, viii
 - スキーム, 1-6
 - プラグイン・コード, 1-7
- 認証, vii, viii
 - スキーム, 1-6
 - プラグイン・コード, 1-7

は

- パスワード・ポリシー, 1-6
- バックアップ
 - 構成データ, 1-14
 - リカバリ計画, 1-14
- パネル, 1-6

ひ

- 比較
 - 移行するオブジェクト, 3-34, 3-39
 - 論理オブジェクト, 3-31
- 必要なコンポーネント, 1-11
- 評価
 - 移行前後の変更, 1-13
- 表示
 - 依存, 3-39
 - 環境の詳細, 3-5
 - 差異, 3-39
 - スナップショット・リスト, 3-24
 - ディレクトリ関連付けの設定, 3-12
 - トランザクション詳細, 5-2
 - 変換ルール, 3-18
 - リポジトリ, 2-28

ふ

- 物理エンティティ, 1-7
- プレビュー
 - ターゲット, 3-31
- プロセスの概要
 - Oracle Access Manager Configuration Manager を使用したデータの移行, 1-3

へ

- 変換ルール, 1-4, 1-9, 3-17, 用語集-3
 - 前提条件, 3-18
 - 元に戻す, 5-4
- 変更
 - 環境の詳細, 3-10
 - 変換ルール, 3-21
- 編集
 - 論理オブジェクトの属性, 3-31

ほ

包含ポリシー, 1-6
他の管理者への通知, 3-4
ホスト識別子, 1-6
ホスト名, 1-9
ポリシー・ドメイン, 1-6
本番環境デプロイ, 1-2
本番前環境デプロイ, 1-2

ま

マスター Web リソース管理者, 1-6
マスター監査ポリシー, 1-6

む

無効化
関連付け, 3-16

め

メッセージ, 2-28

も

元に戻す, 5-6
カスタマイズ, 5-4
変換ルール, 5-4
論理オブジェクト, 5-4

ゆ

有効化
関連付け, 3-16
有効化 / 無効化
ディレクトリ関連付け, 3-15
ユーザー
認可, vii, viii
認証, vii, viii
ユーザー権限, 2-16

ら

ライフサイクル管理, 1-2

り

リカバリ
計画, 1-14
リスト, 2-25
リストア, 用語集-3
スナップショットの内容, 3-29
リストのナビゲーション・エイド, 2-24
リソース・タイプ定義, 1-6
リポジトリ, 1-3, 1-4, 1-16, 用語集-3
前提条件, 2-29
リリース 7.0.4, 1-16

ろ

ロール
前提条件, 2-16
ロールバック, 用語集-3
特定のトランザクション中に加えられた変更のロールバック, 5-4
トランザクション, 5-8
ロスト・パスワード・ポリシー, 1-6
論理オブジェクト, 1-4, 1-7, 1-8, 用語集-4

わ

ワークシート
DIT およびオブジェクト定義, A-5
Identity Server, A-8
以前の Access Server, A-11
以前の Policy Manager インスタンス, A-9
カスタマイズ, A-12
ディレクトリ・インスタンス, A-4
ディレクトリ・サーバー /RDBMS プロファイル, A-6
データベース・インスタンス・プロファイル, A-7
デプロイ全体, A-3
ワークフロー, 1-13, 2-5
ワークフロー構成, 1-6